

無名草子における引用関連文献の総合的調査と研究

1 3 6 1 0 5 0 5

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書

平成16年5月

高橋 亨

（名古屋大学文学研究科教授）



## は し が き

本研究は、鎌倉時代初期に書かれ、現存する最古の物語評論を中心とした王朝女性文化論である『無名草子』について、その引用関連の文献を総合的に調査し、文学史と文化史の中に位置づけたものである。従来は現存しない散逸物語などの資料とされ、その批評は、和歌的な美意識による印象批評とみなされてきたが、これを失われた王朝女性文化に固有の視点からの王朝憧憬の書物として、その特殊な位相を引用関連を主として解明しようとしたものである。

本研究と平行して、古代文学研究会の有志による『無名草子』輪読会による『無名草子注釈と資料』の出版に向けた活動を行い、すでにその刊行を行うことができた。私もそこに参加し「解説」執筆をはじめ全般に関与したが、本報告書の「無名草子引用関連年譜」は、その注釈を素稿としたものである。『無名草子』輪読会のメンバーに深く感謝する。

## 研究組織

研究代表者：高橋 亨（名古屋大学文学研究科）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成13年度	1,200		1,200
平成14年度	800		800
平成15年度	500		500
平成 年度			
平成 年度			
総計	2,500		2,500

## 研究発表

### (1) 学術雑誌

高橋亨、王朝女文化と『無名草子』、古代文学研究、第二次10号、2001年10月

高橋亨、「歌語り」と物語ジャンルの生成、SITES統合テキスト科学研究、1-2、2003年12月

### (3) 出版物

『無名草子』輪読会編、無名草子注釈と資料、和泉書院、2004年2月



## I 王朝〈女〉文化と『無名草子』の位相

### 1 はじめに

『無名草子』は、一二〇〇年ごろ成立した現存最古の王朝女性文化論の書物である。その中心に『源氏物語』をはじめとする「作り物語」の論があり、『源氏物語』以前の作品を扱わないのは、それらが男性の作者によるとみなしていたからと思われる。短編の物語も論の対象からはずしているらしいが、『伊勢物語』や『大和物語』のような「歌物語」は、事実を記したものとして除外し、説話集や歴史物語とも区別している。歌集についても短く記すが、その編者が男であることを残念がる発言もある。

つまり、『無名草子』からは、物語史を中心とした「文学史」の発想と、ジャンル論を素朴なかたちながら読み取ることができる。その批評は、作品の歌や物語文の表現、作中人物論、物語内容の非現実性などに及ぶ。印象批評といわれるのであるが、これを〈女〉の立場からの「物語の詩学」の原形と位置づけることができる。

本研究では、用語を含めた引用関連文献についての調査を主とするが、そこで論じられなかった作品や視点をも考慮することによって、現代の物語学の立場から「かな物語の詩学」を考えていくための有力な指標となるであろう。

### 2 草子というジャンル

現存本の書名は、天理図書館蔵本が「無名物語」、彰考館文庫蔵本が「建久物語」、群書類従所収本の奥書に「無名草子」とある。なお、『八雲御抄』にみえる「尼の草子」、伴直方の『物語書目備考』にみえる「最勝光院通夜物語」も『無名草子』をさすのかもしれないが、不明である。本来の書名も不明だが、あえて「草子」というジャンルを仮説し、『枕草子』から『徒然草』にいたる系譜の中に、現存する最古の物語批評の書とされている『無名草子』を位置づけたい。

平安朝中期から中世にかけて、当時のことばでいえば「物語」にあたるこれらの書物を、「作り物語」や「歌物語」「歴史物語」、「説話」や「軍記」また「日記」と区別したうえで、近代の「随筆」というジャンルとは別の批評文芸「草子」として設定しておきたい。それは、「歌論」書に近く、近世の「随筆」前史ともいえよう。

「草子」(冊子、草紙、双紙、造紙)は、ほんらいは書物の形態をさすが、かな書きによる批評文芸的な系譜を形成している。『袋草紙』は藤原清輔による歌の作法や故実の書であり、『乳母草子』は中世の女子教訓書である。ほんらいは書物を意味した「そうし」あるいは「ぞうし」の表記が「草子」に定着し、さらに「・・草」(くさ)といった書名が生まれるゆるやかな過程に、「つれづれ」という精神的な空白感情を慰める自由な表現形式の生成を読むことができる。それは、書く文芸形式としての物語、とりわけ「作り物語」という虚構のジャンルが〈女〉文化圏で成立し、それが〈男〉文化に取り

込まれ『源氏物語』に代表されるような権威化を生んでいった過程で、本来の「ものがたり」が持っていた私的で自由な自己表現にささやかな批評精神をこめる伝統を継承するものであったとみられる。

### 3 成立とその時代

『無名草子』の成立は、本文中に「建久七年」という年号や「隆信」「定家少将」という呼称がみえ、『新古今和歌集』への言及がないことから、建久七年（1196）以降、藤原定家が中將に昇進した建仁二年（1202）までのあいだ、さらに藤原隆信が右京権大夫から無官になった正治二年（1200）七、八月を上限とし、『新古今和歌集』撰進の院宣の下った建仁元年（1201）十一月を下限とするところまで絞りこまれてきている。おおよそ1200年ごろの成立とみておけばよい。

『無名草子』は『源氏物語』をきわめて高く評価している。その批評の基準や用語は、「あはれ」「えん」など、歌学の用語と共通するところが多く、歌を伴った場面が多く引用されている。このことから、藤原俊成や定家と関わりの強い文化圏において成立したとみられている。具体的には、俊成卿女を作者とみる説が強く、御子左家の歌学と共通の美意識に基いた作品だという見解である。とはいえ、俊成卿女は『無名草子』の成立時にほぼ三十歳、夫源通具と別れたが二児をかかえ、歌人としての活動や女房生活をはじめ前のことで、確かな根拠はない。

この時代は、政治権力が貴族から武家へと決定的に転換し、文化の意味やありようも大きく変わる転換期である。平安朝の中期に宮廷の女房サロンを中心として花ひらいた王朝の女性文化が、その現実の基盤と生活実感を失い、憧れるべき観念として抽象化した。それと裏腹に、政治の実権を失った貴族の男たちによって、王朝文化の総体の中に女性文化が取り込まれ、有職故実や歌や物語の幻想が権威化されていく時代であった。

この時代の和歌は、まず「神仏を体現する聖帝の読み知るべきもの」であり、それを支える摂関家の貴族理念の象徴行為であり、中下流の貴族である歌人たちは、その政治権力闘争につらなるものであった。これは〈男〉文化における和歌の公的な位相である。武家政権下であって、こうした天皇や院と、それにつらなる貴族文化そのものが〈女〉文化を変質させたのであった。

「建久物語」という書名とも関わり、本文中に「建久七年」という年号が明記されているのは、鎌倉幕府と結び付いていた九条兼実が失脚して慈円も天台座主を辞した「建久七年の政変」との関係が注目される。九条家の危機は、俊成や定家の御子左家の支持基盤が失われたことをも意味していた。貴族文化そのものが王朝〈女〉文化の位相にあったともいえ、こうした政治社会的な背景のもとに、女による〈女〉文化の論議である『無名草子』の作者も女に特定することはないとして、慈円をその作者とみる説が深沢徹によって提起された。その前には隆信作者説が五味文彦『藤原定家の時代』（岩波新書、1991）によってなされていた。かつては俊成作者説もあり、ともにうがちすぎであると思われるが、ジェンダーとしての〈女〉文化の位相にあることが重要であって、作者の性は男でも女でもありうる状況にあったということではある。

そこでは、『新古今集』の歌や、その撰者である定家の新しい歌風に代表されるように、

歌そのもの、歌学も大きく変換した。このような状況のもとでの『無名草子』の位相や、『源氏物語』の受容に代表される物語と和歌との関係について、〈女〉文化と〈男〉文化との対比とその葛藤、その複雑な相互関係として考えていく必要がある。

建久三年（1192）に征夷大將軍となり、鎌倉幕府を開設した源頼朝は、同六年に上洛して東大寺開眼供養会に臨んだ後、建久十年一月に歿し、頼家が跡を嗣いで年号は正治に改まった。武家の時代が到来するなかで、『源氏物語』の享受史もまた、大きな転換点にあった。後に河内本の本文校訂をした源光行は、頼家の將軍就任にちなむ吉書始めに列席している。『原中最秘抄』の奥書によれば、やはり後年に光行の注釈書である『水原抄』の草稿が成る過程で、藤原（後徳大寺）実定や藤原良経の協力を得ていたという。

藤原俊成が判者をつとめた『六百蕃歌合』は、建久四年あるいは五年に催されたが、その中の判詞に、「紫式部歌読の程よりも物ふかく、筆は殊勝之上、花宴の巻は殊にえんある物なり。源氏みざる歌読は遺恨の事なり」とあるのだった。『源氏物語』は『無名草子』と同時代の男性歌人たちによって、歌学のための必読書として権威化され古典化しつつあった。とはいえ、源光行・親行による河内本や藤原定家による青表紙本という証本も未だ成立する以前である。『無名草子』の引用する『源氏物語』の本文は、別本の国冬本や現存しない伝阿仏尼本などに近く、王朝〈女〉文化の伝統における自由な物語享受の流動性を示している。

良経は建久九年（1198）に左大將を辞して蟄居し、源通親の死去によって良経が摂政に返り咲くのは四年後の建仁二年である。その前年に、慈円が天台座主に復位している。『無名草子』が成立したとみられるその間には、後鳥羽院の主催した『正治二年初度百首』（1200）に際して、六条藤家（季経・経家ら）と源通親とが結託して、九条家グループの有力メンバーであった御子左家の新進歌人たちを排除した。これに抗議して、俊成は『俊成卿和字奏状』（正治奏状）を書いて、俊成・家隆・隆房らが加えられたという。

\* 錦仁「院政期歌合の構造と方法」日本文学 1994,2. 『古今集』仮名序と院政期の和歌観念」日本文学 1995,7

#### 4 藤原定家と物語二百番歌合

定家は『明月記』の中で、建久年間に『源氏物語』五十四帖の写本を盗まれ、その三十年ほど後の、元仁元年（1124）十一月から翌年の二月まで要して写させるまで、『源氏物語』の本が手元に無かったという。定家が『物語二百番歌合』を選定したのは、樋口芳麻呂によれば、建久三年（1192）から同七年で、定家31歳から35歳のころであるという。まず『源氏物語』から選んだ秀歌百首を左に、これに『狭衣物語』から選んだ百首を右として番えた「源氏狭衣百番歌合」を選んだあと、二、三年において『源氏物語』の残りの歌から百番を選んだ左と、『夜の寝覚』以下の十の物語の歌百首を右として番えた「後百番歌合」を選んだものである。

「後百番歌合」は、良経に頼んで宣陽門院（後白河天皇の皇女の観子内親王）から借り出してもらった物語を含んでいた。その十の物語の名称と歌数は、『夜寝覚』（20首）、『御津浜松』（15首）、『参河にさける』（15首）、『朝倉』（13首）、『左も右も袖湿』（10首）、『心高き』（10首）、『取替ばや』（6首）、『露の宿』（5首）、『末葉露』（3

首)、『海人刈藻』(3首)である。こうした物語が定家の手元にはなく、女院のような女性文化圏にあったとみられることも、『無名草子』の女性文化圏における成立を推定させる根拠である。

この『物語二百番歌合』と『無名草子』の物語論で扱われた物語名と、その順序や歌数だけを簡単に比較しておくことにしたい。『無名草子』では、『源氏』(40首)のあと、『さごろも』(5首)・『ねざめ』(17首)・『みつのはままつ』(8首)・『たまも』(ナシ)・『とりかへばや』(2首)・『かくれみの』(ナシ)・『今とりかへばや』(2首)・『心高き』(ナシ)・『朝倉』(ナシ)・『川霧』(ナシ)・『岩打つ波』(2首)・『あまのかるも』(ナシ)・『すゑはの露』(ナシ)・『つゆの宿り』(1首)・『みかはに咲ける』(1首)・『うちのかはなみ』(ナシ)・『こまむかへ』(ナシ)・『をだえの沼』(ナシ)である。

同時代の物語の歌にまつわる評価として、ここに共通性を読むのか、差異を強調するのか、判断のわかれるところであろう。もとより両者の性格も異なっている。樋口芳麻呂は、『無名草子』の歌の「七四首中の三二首、すなわちその四三%までが一致し、とくに『狭衣』とは六十%、『源氏』とは五五%が一致している」という。『源氏』では、須磨の巻の歌を特に多く載せている点では両書が一致し、明石・夕霧・幻の巻は、二書とも比較的多くの歌を収めている。ただし、柏木の巻はともに3首で、『無名草子』が多くの比率で歌を収載している。また、『無名草子』が歌数からも記述の分量からも『寝覚』と『みつの浜松』を重視しているにも関わらず、『狭衣』を尊重して『源氏』の次に置いているのは、『物語二百番歌合』の影響だとみている。

とはいえ、そのほかの物語については、どうみても差異のほうが大きい。『無名草子』の作者は、物語については、定家とは異なった独自の見識をもっていたというべきであろう。『無名草子』では、以上の後に、「人々しからぬ物語」(一人前でない物語)も多いが、ふれていたら夜が明けてしまうと云い、『はつゆき』という物語に物語のことが書かれているのを見よとしたあと、さらに、最近作として、隆信の作った『うきなみ』と定家少将の作『まつらの宮』を批評している。このあとに、『ありあけの別れ』・『夢語り』・『なみちの姫君』・『あさが原のないしのかみ』の名があげられている。それらでは、いずれも歌は記されていない。

物語の中の秀歌撰という試みは、定家にとって、本歌取りという歌の技巧との関連で必然性をもった行為だったはずである。『源氏物語』をはじめとする物語の歌を、歌そのものとして評価し鑑賞することは、その物語の世界を体得している人にとっては、歌の詠まれた文脈を想像し補完することが可能だが、歌を物語の文脈から切断する方向性は否めない。あたりまえのことだが、同じく歌を中心にして物語を批評するといっても、その物語の文脈に即して論じている『無名草子』との決定的な差異がある。そして、『無名草子』にはこれに先行していたとされる『物語二百番歌合』についての言及はない。

定家については、隆信の『うきなみ』(散逸)について「ことのほかに心に入れて作りけるほど見えて、あはれにはべれど、そも、などか言葉遣ひなど手づつげにて、いと心ゆきておぼえはべらず」と記したあとの、次のような発言がある。「また、定家少将の作りたるとてあまはべめるは、まして、ただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもにはべるなるべし。『松浦の宮』とかやこそ、ひとえに『万葉集』の風情にて、『うつほ』



など見る心地して、愚かなる心も及ばぬさまにはべるめれ」。

## 5 『松浦宮物語』の評価

『無名草子』では若き日の定家が多く物語を作ったといわれるが、それらについての評価は低い。「気色ばかり」つまり表面的で現実感に欠けるというのである。定家作として名をあげられている『まつらの宮』だけは現存していて、その批評の妥当なことを確かめることができる。

歌集の論にも、『万葉集』について「心も言葉も及びはべらず」と言う発言がある。『万葉集』の風情とは、一定の評価ではあっても、いわば敬して遠ざける発言である。『松浦の宮』は定家の物語の代表作であったとみられ、物語に対する定家の意図と、『無名草子』の語り手の女房にみられる女性読者の好みとのあいだには、その共有する文化圏が同じであっても、明らかな差があったといえよう。他の近作の物語については、その作者名が記されていないので不明だが、やはり男性作者によるものが多かったと思われる。隆信の『うきなみ』と定家の『まつらの宮』の前には、次のような発言があった。

「また、むげにこのごろ出で来たるもの、あまた見えしこそ、なかなか古きものよりは、言葉づかひ、ありさまなど、いみじげなるもはべるめれど、なほ『寝覚』『狭衣』『浜松』ばかりなるこそ、え見はべらね」。

また、『うきなみ』『まつらの宮』の後には、次のような発言がある。

「すべて、今の世の物語は、古き帝にて、『狭衣』の天の乙女、『寝覚』のうちしきなども、今少しことごとしく、いちはやきさまにしなしたるほどに、いとまことしからず、おびたしきふしづはべる。『有明の別れ』『夢語り』『波路の姫君』『浅茅が原の尚侍』などは、言葉遣ひなだらかに、耳立たしきからず、いとよしと思ひて見もてまかるほどに、いと恐ろしきこともさし交じりて、何事も醒むる心地するこそ、いと口惜しけれ」。

すぐれた近作が「言葉遣ひ」などの表現に優れているというのは、和歌的な修辞の得な作者によるためであろう。そして、その欠点が超現実的な要素にあるというのは、男性作者によるものが多いためだと思われる。本文や解釈に問題もあるが、「今の世の物語」が「古き帝にて」とはいわゆる擬古物語で、時代設定を古代の宮廷とすることである。『狭衣』の「天の乙女」は天人（天稚御子）の降臨、『寝覚』の「うちしき」は不明だが、その難点として批評されていた内容からみて「そらしに」で女主人公の擬死事件を意味するとみられる。この二作品の批評において、すでに大きな難点として論じられていた神仏の靈驗や超現実的な要素が、「今の世の物語」では、ますます強まって、「恐ろしきこと」やリアリティの欠如をもたらしているというのである。

## 6 〈同化〉と〈異化〉の詩学

『無名草子』の語り手の女房たちが理想とするのは、美しい言葉の表現に〈同化〉することによって、すでに現実としては失われた王朝の恋物語の世界に生きることであった。超現実的な要素は、『竹取物語』にはじまる平安朝の物語の基底をなすものであったが、それはあえて無視して否定しようとする。『竹取物語』にはまったくふれず、『源氏物語』

以前を扱わない理由でもあろう。「あはれ」や「えん」とは物語の時空への〈同化〉の美学であり、超現実的な物語要素は〈異化〉の言説であった。

「今の世の物語」のたぶん男性作者によって書かれた作品は、おなじく王朝の恋物語の世界にあこがれつつも、その失われた現実を想像力によって構成するために、超現実的な要素を必要としたのである。物語の語りの心的遠近法にかかわる問題であるといえよう。ここでもまた同時代の〈女〉文化と〈男〉文化との対比の視点から強調しておけば、女性作者を主とした『源氏物語』iraいの物語の伝統は、ふたたび男たちに奪われつつあったのだ。『無名草子』が『源氏物語』とそれ以後を論じ、『竹取』から『うつほ』までを除外する理由のひとつには、それらが男性作者による作品であったという認識があったと思われる。それ以上に重要なのは、『無名草子』の批評が、〈同化〉と〈異化〉との複合した『源氏物語』に代表されるような多声法の調和を、すでに見失って女たちによる〈同化〉と、男たちの〈異化〉とに、物語の価値基準が分裂しているともみなしうることである。

『無名草子』の語り手たち（つまるところ作者）は、物語作者としての定家を、さして高く評価してはいない。和歌に関する部分でも、それが撰集についての簡略な論であるとはいえ、父俊成は高く評価されていても、定家にふれるところはない。定家はまだ若く、和歌そして物語学者としての権威も後のことで、『無名草子』ではまったく意識されていない。『無名草子』は、『源氏物語』が男性歌人たちによって正典化されつつあるものの、いまだそれが確立してはいない〈女〉文化の状況を伝えるものであった。作中の登場人物がすべて女性であるところに、その自覚が端的に示されている。女たちによる女の王朝文化論議なのである。

その語り手の女房たちのひとりが、先に引いた歌集の論の終わりに、紫式部が『源氏物語』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたのだから、女も捨てがたいと言った他の女房の発言のあと、現在の自分について、こう語っている。

「さらば、などか、（私は）世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。（高貴な）人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさることにて、宮仕へ人としてひたおもてに出で立ち、なべて人に知るばかりの（私のような女房の）身をもちて、『このころはそれこそ』など人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし」

さらに、この女房の発言は、和歌の一つも歌集に入ることさえ女はむずかしく、まして「世の末」（後世）まで名を残すほどの言葉を表現した人は少ないのではないかと言う。『無名草子』の時代の女房たちの実態にそくした発言であろう。同じ女房といっても、この時代には、かつての清少納言や紫式部のような活躍の場は失われていた。彼女たちに出たのは、栄光に満ちた王朝女性文化を追想し、語りあうことであり、それが『無名草子』の世界であった。

## Ⅱ 『無名草子』の内容と構成と引用関連

### 1 物語場と場の物語

『無名草子』は全体が「物語の場」における座談形式で構成されている。森正人によれば、「順（めぐり）物語」の類型による「場の物語」である。八三歳で出家し、現在は百三歳から百十五歳とみなしうる老尼を聞き手として、七、八人の女房のうち三、四人による「御伽」として語られる。八三という老尼の出家の年齢は、『和漢朗詠集』にも載せる『白氏文集』の「百千万劫菩提種、八十三年功德林」により、「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもてかへして当来世々讃仏乗の因、転法輪の縁とせん」という詩句とともに、観学会で誦せられたことが『三宝絵』『私聚百因縁集』『栄花物語』（うたがひ）などでわかる。狂言綺語観を象徴する数字である。ちなみに、俊成は建久七年に八十三歳であった。

その構成は、(1) 序の物語、本論としては、(2) 作り物語の論、(3) 歌集の論、(4) 女性の論、と大別できる。

特定の作中人物にまつわる物語場を語りの枠として設定する先例としては、『大鏡』や『今鏡』、そして『宝物集』がある。それは、後世の夢幻能の形式に似ている。夢幻能では、諸国一見の僧が、冥界からその土地（トポス）にゆかりの死者の霊をよびおこして、物語が生成する。もちろん、後世の室町時代に確立した夢幻能の様式と直結するつもりはないが、百歳をはるかに超えた翁や姫が、寺院という場で青侍をまえに物語し、その終わりでは忽然と消える『大鏡』をはじめとする鏡ものの伝統が、すでに夢幻能の先駆といえるのであった。ワキにあたる旅の僧のような老尼の心内語、一人称語りのようにして、『無名草子』は始まる。鏡ものや『宝物集』の語り手たちの設定よりも、より複雑な語りの場の複式構造をもっているといえよう。

### 2 序の物語

老尼は、仏に供える花を摘みつつ東山辺りを西へ歩み、最勝光院をすぎて、風情ある桧皮屋に入る。そこは女性だけが住んでいるらしい幻想的な空間である。冒頭の道行き文の設定は、『宝物集』の聞き手である平康頼が、東山から都そして内裏を経て、嵯峨の清涼寺に至る叙述をふまえたものであろう。迎え入れられた老尼は、懺悔のためとうながされ、自身の経歴を語る。

小町伝説になぞらえられた超現実的な老尼は、『法華経』を口ずさみつつ道行きしているが、それは最勝光院を媒介にした王朝文化の時空への旅であった。桧皮屋の「中門の廊」に呼び据えられた老尼は、「十羅刹の御徳に、殿上許されはべりにたり。まして後の世もいとど頼もしや」と言い、闇のなかで法華経を読んで、感動をさそっている。桧皮屋の女性たちは、『法華経』の功德によって老尼の幻想に現れた亡霊たちかもしれない。あるいは「十羅刹女」の化身であろうか。

寝殿の南面の二間ほどが持仏堂であるなら、この屋の女主人が出家しているはずだが、その人はついに姿をみせない。若い女房たちがいるのは、女主人もまた若い姫君だからであろう。『無名草子』の女房らしき女性たちは、その物語論議を作中の現在において語りあっている。

女たちに「この仏の御前にて懺悔したまへ」と言われて語った老尼の履歴は、十六七で皇嘉門院（崇徳天皇の中宮藤原聖子）の母の北政所（関白忠通の妻の宗子）に仕えたというから、その誕生も堀河天皇（1086～1107）の時代までしか溯りえない。老尼その人は、王朝文化の体現者とはいっても、『源氏物語』の時代からはすでに遠い。

この老尼が女房として仕えたという皇嘉門院の母藤原宗子は、関白藤原忠通の妻であった。宗子が後の皇嘉門院聖子を生んだのは保安元年（1120）、その翌年一月に忠通は内覧の宣旨を得、三月には関白となり氏の長者となっている。保安四年一月に鳥羽天皇は崇徳天皇に譲位し、大治四年（1129）に白河法皇が没して鳥羽が上皇となり、同五年に聖子は中宮となる。そして、永治元年（1141）十二月、近衛天皇が三歳で即位して、聖子は皇太后となる。

崇徳上皇は『袋草子』によれば、天養元年（1144）に藤原顕輔に『詞花和歌集』の撰進を命じている。久安六年（1150）二月に聖子は皇嘉門院となり、十二月には宗子の建立した最勝金剛院が公家御願所となった。世はますます乱れ、頼長と信西、そして平清盛が台頭し活躍する時代である。十月には忠実が忠通に譲与した家屋荘園を鳥羽法皇に献上している。久寿二年（1155）七月には鳥羽法皇の第四皇子が践祚して後白河天皇となり、頼長の内覧は停止、頼長には近衛天皇呪詛の疑いがかけられていた。宗子もこの年の九月に六十一歳で没している。そして、翌保元元年、崇徳上皇と頼長らは上皇と帝に反逆し、清盛と義朝らが白河院を焼き落として、保元の乱が始まった。七月に崇徳上皇が讃岐に配流、十月に皇嘉門院は三十五歳で出家したあと、九条の地で世捨て人のような余生を生きたとする。摂関家は新興勢力の平家に依存して分裂し力を失った。

『無名草子』の老尼は、こうした保元の乱に至る激動の時代を、宗子の女房として仕えて、崇徳天皇と近衛天皇の時代の宮中を時々見聞し、宗子の亡き後は皇嘉門院に仕えるべきであったが、宮中の魅力にとらわれて、後白河院が天皇で二条院が皇太子であった保元三年（1158）以後も宮中に止まり、「人数」ではないが「馴れ者」となって、さらに六条院、高倉院の御代まで、時々女房として仕えたあと、老いの醜さを恥じて出家し山里にこもったのだという。

二条天皇の在位は保元三年（1158）から永萬元年（1165）まで、平治元年（1159）には平治の乱が起こり、それによって平清盛の権力が確かなものとなった。平家一門が『法華経』を書写して厳島神社に奉納した「平家納経」は長寛二年（1164）のことである。六条天皇の在位は永萬元年から仁安三年（1168）までだが、二条・六条天皇の時代は後白河院が支配しており、平滋子が後白河の女御（1167）となり、清盛は内大臣から太政大臣へと進み、急速に貴族化して王朝文化への回帰が強まる。この前後の時期に和歌の中心にいたのは、清輔や顕昭らの六条家であった。そして、平家はその権力をほしいままにしたのが高倉天皇の仁安三年から治承四年（1180）であった。高倉天皇の母滋子は、皇太后そして建春門院（1169）として、清盛の娘の徳子は後白河法

皇の猶女として入内し、中宮となっている。

この建春門院が、後白河院の御座所であった法住寺殿（現在の三十三間堂あたり）の一角に承安二年（1172）に建てたのが最勝光院である。その三年後に建春門院滋子は没したが、平治の乱が治まり、頼朝が挙兵して治承の乱の始まるまでの二十年余りのつかの間の平和、王朝回帰の美しい時代を回想する象徴が最勝光院であり、平氏の国母建春門院だった。『今鏡』は、かつて紫式部に仕えたという「あやめ」という百五十歳余りの老女を語り手として、後一条天皇から高倉天皇までの十三代、百五十年の王朝の歴史と文化を語っているが、帝紀にあたる「すべらぎの下」巻は、まさしくこの建春門院の栄花でしめくくっている。『無名草子』がこれを承け、今は廃虚となった最勝光院を王朝文化の入り口としているという森正人の説は、やはり正解であろう。深沢徹が、この「最勝光院」を「最勝金剛院」の誤写とみて、「九条家の〈起源〉を語る神話的なテキスト」という大胆な説を展開したのは、やはりうがちすぎであろう。

『無名草子』の老尼は、高倉院の時まで宮中の女房として仕えて出家したといいながらも、その後の治承の変、壇ノ浦に滅亡した安徳天皇の名をあげない。これは、意図的に避けたとみるほかに、平家の滅亡や戦乱の現実を語ることを回避し、平家や源氏や藤原氏とかの対立関係、まして九条家とか御子左家とかのセクト性は排除されている。美しい王朝への憧憬は、権力闘争や戦乱の現実をふまつつもその表現を回避し、すべては滅亡し失われたものへの供養と鎮魂の彼方にある。そこにあるのは、女房という王朝の〈女〉の視点と価値評価のみである。

森正人によれば、老尼の存在は、たんに鏡物の継承ではなく、積極的にその変形を意図したものである。「第一に捨てがたきふし」の論は、それぞれが完結的なく巡談（めぐりものがたり）の形式で、『宝物集』の「第一の宝」の論、ひいては〈定め〉の物語の変形としてある。それが、物語論から歌集の論、そして王朝女性論へと至って、語り手それぞれの物語は非完結的になり、『宝物集』の〈対話〉形式の場の物語は、〈雑談〉形式へと組み換えられている。『無名草子』の語り手たちが、複数の女房であること、その語りの多声法には十分な読みの配慮が必要である。

『無名草子』が『源氏物語』に言い及ぶのは、『法華経』に次いでであった。桧皮屋に迎えられた老尼は、夜になって、臥しながら三、四人の女房たちの物語の聞き手になる。

「第一に捨てがたきふし」は何かという話題で、「月」「文」「夢」「涙」「阿弥陀仏」「法華経」の六つについて、そのすばらしさが順に語られていく。これは『宝物集』の「第一の宝」の話題が何かという話題が「隠れ義」「打出の小槌」「金」「玉」「子」「命」をあげ、それらが「仏法」に帰結する構成をふまえている。とはいえ、明らかな引用関連があるからこそ、その差異もまた明確である。

鹿ヶ谷の陰謀に加わり、鬼界ヶ島に流されてこの世の地獄を見て帰京した康頼が、歌人として評価され、和漢の故事にちなんだ「ほとけの御前のものがたり」を記したのが『宝物集』であった。康頼には自分ひとりが帰京を許されたのは和歌の徳によるのだという自覚があった。嵯峨清涼寺の仏が天竺へ帰るという噂に導かれて『宝物集』は書かれた。すでに末法のただ中にいるという自覚があり、にもかかわらず、すがり信じるべきものは仏法しかなく、和歌は仏法への通路であった。そこに「狂言綺語」といった語や、それによ

る文芸の正当化の論理はなく、天地や鬼神を感動させる和歌こそが、法文であるという願いがこめられていた。『無名草子』もまた狂言綺語観の延長にはあるものの、そこに「狂言」や「綺語」が罪であるという自覚はない。『宝物集』とも異って、近いのは『今鏡』の罪得る「そらごと」ではなく「あらましごと」というべきで、「綺語」や「雑穢語」ではあってもさほどの罪にはあたらないという見解であろう。『今鏡』はさらに白居易が文殊の化身であるという説にならって、紫式部は妙音観音の化身かとさえいう。こうした仏教的文芸観のものと『源氏物語』全肯定の伝統を、『無名草子』もまた引いている。それが、序の論における仏教と王朝の美意識や『源氏物語』絶賛との二極分解の、奇妙な調和をもたらしている。

『宝物集』の、後から提示された物が前の物をうけ、それを否定的に包摂していくという論理構成は、仏教によくみられるものだが、『無名草子』の場合はゆるやかな連想で、それが仏教の世界に帰結しているとはいえ、それぞれの価値は王朝文化を背景にして認められている。『無名草子』には、和歌的な美意識や『枕草子』『源氏物語』などの、王朝文芸の伝統が通底している。そして『無名草子』が『宝物集』ともっとも異なっているのは、導入部で『源氏物語』と仏教との関係にこだわっているにもかかわらず、その本論というべき『源氏物語』についての論議では、仏教的な価値観に基づいた批評がほとんど見られないことである。『源氏物語』のようなすばらしい作品に、どうして『法華経』の「一偈一句」が無いのだろうかという女の発言にはじまる、『法華経』から『源氏物語』の論へと移行していく過程を、原文によって確認しておく。

- (A) ……など、『源氏』とてさばかりめでたきものに、この経の文字の一偈一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言もはべる。これのみなむ第一の難とおぼゆる」と言ふなれば、
- (B) あるが中に若き声にて、「紫式部が、法華経を読みたてまつらざりけるにや」と言ふなれば、
- (C) 「いさや、それにつけても、いと口惜しくこそあれ。あやしのわれらだに、後の世のためはさるものにて、人のうち聞かむも情おくれておぼえぬべきわざなれば、あながちにしても読みたてまつらまほしくこそあるに、さばかりなりけむ人、いかでかさることあらむ」など言へば、
- (D) また、「さるは、いみじく道心あり、後の世の恐れを思ひて、朝夕行ひをのみしつゝ、なべての世には心もとまらぬさまなりける人にや、とこそ見えためれ」など言ひはじめて、

ここまでが、ふつう「法華経」についての段落分けをしている部分に含まれる。(A) (B) (C) (D) の発言者はそれぞれその発言内容のニュアンスが異なっているから、別人とみてよいと思われる。(A) の女房は『源氏物語』がすばらしい作品であることを知っており、しかも「作り残し書き漏らしたること」がないはずなのにといつているから、『源氏物語』を読んだうえでの批判である。これに対して (B) の「若き声」の女房は、紫式部が『源氏物語』の作者であることは知っていて、『法華経』を読んでいなかったのかと質問している。この女房は、以下の議論の中で「若き人」「例の人」「例の若き人」と呼ばれ、話題の進行や転換の役割を果している。『源氏物語』のことをほとんど知らず、興味

を持って、熱心に他の女房たちから聞きだそうとするのである。

(C) の女房は卑しい私たちがさえ世間体もあって『法華經』を読みたいと思うのに、どうして紫式部のような人が読んでいなかったはずであろうかと言っている。これを (A) の女房と同一人物とみる可能性は残されている。この発言を受けたのが (D) で、紫式部はたいそう「道心」が深く、「後の世」に極楽往生できないことを恐れて、朝夕には勤行ばかりしていて俗世間には心もとめなかった人だろうと思うと言う。「など言ひはじめて」とあるから、『源氏物語』の論へと入っていく次の発言も同じ女房のものとみられる。

「さても、この『源氏』作り出でたることこそ、思へど思へど、この世一つならずめづらかにおぼほゆれ。まことに、仏に申し請ひたりける験にやとこそおぼゆれ。それより後の物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり。かれを才覚にて作らむに、『源氏』にまさりたらむことを作り出だす人もありなむ。わづかに『宇津保』『竹取』『住吉』などばかりを物語とて見けむ心地に、さばかりに作り出でけむ、凡夫のしわざともおぼえぬことなり」など言へば、

『源氏物語』を作ったことが前世からの因縁としか思えないという。『源氏物語』を規範にして作ればそれ以上の作品も可能であろうが、『源氏物語』が規範とした物語のことを思うと、普通の人間（凡夫）のしわざとは思えないとは、近代ならば「天才」というところだ。「天才」が神々の愛でし人であるという近代の発想にあたることを、仏教的な発想では前世からの因縁や仏に祈願したおかげだという。そこまで明示されてはいないのだが、後の『河海抄』や『石山寺縁起』にみられる、紫式部が石山寺に参籠して観音に祈り、湖上の月を見て須磨の巻から『源氏物語』を書き始めたといった伝承が、すでにあったのかもしれない。

しかしながら、文脈の上からは、仏教との関係を強調することによって『源氏物語』の正統化をしてよさそうな『無名草子』が、以外なことに、『源氏物語』や紫式部と仏教との直接的な結び付けをしていないことに、むしろ注目すべきであろう。『今鏡』にみえるような紫式部が観音の化身であるというような言及はない。このことは、『無名草子』の女性論といわれる部分の『源氏物語』の成立に関する記述においても明確である。

……繰り言のやうにははべれど、尽きもせずうらやましくめでたくはべるは、大斎院より上東門院、『つれづれ慰みぬべき物語やさぶらふ』と尋ね参らせさせたまへりけるに、紫式部を召して、『何をか参らすべき』とおほせられければ、『めづらしきものは何かはべるべき。新しく作りて参らせたまへかし』と申しければ、『作れ』とおほせられけるを、うけたまはりて、『源氏』を作りたりけるとこそ、いみじくめでたくはべれ」と言う人はべれば、

大斎院選子から上東門院彰子への注文によって、紫式部が『源氏物語』を書いたという。これと類似した伝承は、『古本説話集』や『河海抄』などにもみられる。この発言をした女房は、紫式部が後世に残る作品を書いたことをうらやましがっているのであって、紫式部を仏の化身などとは見ていない。あえていえば、同じ人間の女としての立場からの発言である。これに対して、次のような異説を口にしてどちらが本当だろうという別の女房は、『紫式部日記』をも読んでいる。

「いまだ宮仕へもせで里にはべりける折り、かかるもの作り出でたりけるによりて、

召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたり、とも申すは、いづれかまことにてはべらむ。その人の日記というものはべりしにも、『参りけるはじめばかり、恥づかしうも、心にくくも、また添ひ苦しうもあらむずらむと、おのおの思へりけるほどに、いと思はずにほけづき、かたほにて、一文字をだに引かぬさまなりければ、かく思はずと友達ども思はる』などこそ見えてはべれ。

宮仕え以前に『源氏物語』を書いたために、定子のもとに女房として召され、紫式部という名も『源氏物語』に由来するというので、『紫式部日記』はその傍証として引かれている。その引用は原文ではなく、いくつかの関連部分をつなぎあわせた要約である。『紫式部日記』を読んでいたらふれてもよさそうな、彰子のもとでの『源氏物語』の冊子作りの記述にはまったくふれていない。

ともかく、これらの発言は、先に引いた導入部の「法華經」にまつわる深い信仰者としての紫式部という女房の発言とは異質である。こうした多声法が場の物語の特徴であるが、「若き人」とかこうした発言内容の差から、ある程度の区別はできるものの、それぞれの発言者を特定しきることはできない。あくまでも、作者の直接的な批評ではなく、それぞれの語り手の多様性を含む物語なのである。

### 3 作り物語の論

『無名草子』は、その仏教的な要素を少なくとも急速に弱めて、『源氏物語』の世界へと入り込んでいく。「作り物語」の論というのは、その対象から、こんにちいうところの歌物語や歴史物語、説話集が排除されているからである。話題になった作品群について、「若き声」の女が「思へば、皆これは、されば偽りそら事なり。まことにありけることをのたまへかし」と、『伊勢物語』と『大和物語』をあげるのだが、周知のこととして語られない。歌のよしあしについては、それらのうちよいと思われるのは『古今集』に入っているという。また『世継』『大鏡』の名は巻末にみえるが、「女の沙汰」に対する男性論として参照せよというのである。説話集の類は、女性の論などの素材として歌集や日記などととも参照されていたはずだが、その名を記されてはいない。近代でいうところの物語文芸の下位分類というべきジャンル論が、すでに確立していたとみてよい。「作り物語」という用語も、すでに『今鏡』の「作り物語のゆくへ」という章の名にあった。

作り物語の論は、『源氏物語』から始まり、その内容を、(一) 卷々の論、(二) 作中人物の論、(三) ふしぶしの論と分けることができる。

(一) 卷々の論は、「いづれかすぐれて心にしみてめでたくおぼゆる」という問いから始まり、「桐壺」は最高で「言葉続きありさまをはじめ、あはれに悲し」、「帚木」は「雨夜の品定め」が「見どころ多く」、「夕顔」は「あはれに心苦し」、「紅葉賀」「花宴」は「艶におもしろく」、「葵」は「いとあはれにおもしろき」などと評される。正編が中心で、宇治十帖は「宇治のゆかり」として簡略にふれられるにすぎない。全体に、「あはれ」「めでたし」「えん」「おもしろし」「をかし」「いとほし」などの美的情詞による印象批評で、歌と情景を引いているのは明石巻のみである。

(二) 作中人物の論では、「めでたき女」として桐壺の更衣、藤壺の宮、葵の上、紫の



上、明石を、まず簡略にあげる。ついで「いみじき女」として朧月夜の尚侍、朝顔の宮、空蟬、宇治の姉宮、六条御息所の中將をあげ、はじめの三人についてはその理由を議論している。次に「好もしき人」としての花散里、末摘花、六条御息所、玉鬘の姫君をめぐる議論、「いとほしき人」は紫の上、夕顔、藤裏葉の君（雲居雁）、宇治の中の宮、女三の宮、手習ひの君（浮舟）で、より詳しくなっている。語り手の女房たちが共感するのは、「あはれ」な女性の生き方であり、自分たちに近い周縁的な女性であるといえよう。

女性論に次いで男性論があり、源氏の大臣の善悪などというのはよくないとしつつ「さらでもとおぼゆるふしぶし」をあげ、兵部卿宮、大内山の大臣（頭中將）、まめ人の大将（夕霧）、柏木の右衛門督、紅梅大納言、薫大将と続く。光源氏について批判的なものと相対的に、頭中將を「いとよき人」といい、柏木には同情的で、薫を「めでたき人」としているのが特徴である。左大臣家の一族に共感的だといえよう。特に藤原氏の立場から読んでみると強調すべきでもないが、帝や皇族たちなど王権にかかわる読みからは遠い。

（三）ふしぶしの論は、若い女が「あはれにも、めでたくも、心に染みておぼえさせたまふらむふしぶし」を尋ねたことから展開する。「あはれなること」として、桐壺の更衣の死、夕顔の死、葵の上の死、須磨の別れのほど、明石での紫上との贈答、柏木の右衛門督の死、紫の上の死と幻の巻の追悼、宇治の姉宮の死があげられている。「いみじきこと」としては、六条わたりの御しのびありきの暁（夕顔巻）の光源氏と中將の君との贈答、また忍んで通う女の門前での光源氏との贈答（若紫巻）、花宴の巻の朧月夜との関係、斎宮の伊勢下向のくだり（賢木巻）、荒れた常陸宮邸を訪れたところ（蓬生巻）、野分の朝の夕霧の六条院の見回り（野分巻）があげられている。エピソードというべき召人の女房や正体不明の女性をも取り上げていることが注目される。「宇治のゆかりにも、いみじきところどころ多くはべれど、さのみはうるさし」と、宇治十帖は省略されている。

「いとほしきこと」では、須磨の別れの紫上、少女の六位宿世の夕霧、若菜のひとり寝の紫上、薫との関係を匂宮に疑われた宇治の中の宮（宿木巻）が言及されている。「心やましきこと」でも、はじめに紫上が須磨に連れていかれなかったのみならず明石の君との関係を光源氏がとはず語りしたことをあげ、須磨の絵二巻を日ごろ隠して絵合で出したこと、女三の宮との結婚で紫上が悩んだことなどをあげる。「あさましきこと」では、夕顔が木霊に取られたこと、女三の宮が柏木の手紙を光源氏に見られたこと、手習ひの君（浮舟）の失踪をあげている。「心やましきこと」と「あさましきこと」に作中歌の引用はないが、他の「ふしぶしの論」では、歌が多く引かれている。

続いて「物語の中に、いみじとも憎しともおぼされむこと、おほせられよ」と問われて、『狭衣』以下の二五の物語についての評論がなされる。ほぼ成立の古い作品から新しいものへという順だが、評価の高い重要な作品の順という面もあり、必ずしも成立年代順とは限らず、後のものほど評論も簡略になる。『源氏』のはじめに「わづかに『宇津保』『竹取』『住吉』などばかりを物語とて見けむ心地に、さばかりに作り出でけむ、凡夫のしわざともおぼえぬ」とあるように、『源氏』を最高と評価しつつ、それ以前は評せず、「それより後の物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり」と、『源氏』をふまえて作れば『源氏』に優る作品を作りだせるはずなのに、以後は下降していくという物語史観である。

『狭衣』は『源氏』に次いで世評が高く、「少年の春は」という冒頭から「言葉遣い何

となく艶にしみじく」上品なものの、特に「心に染む」ところもなく、「さらでもありなむ」ということも多いという。次いで、一品の宮、女二の宮、大宮（の死）、源氏の宮、道芝（飛鳥井の姫君）の人物評、難点としての天人や粉河の普賢出現や、大将の即位が非現実的な例としてあげられている。

『寝覚』は、とくに「いみじきふし」もなく「めでたし」というべきところもないが、女主人公ひとりに心を入れて作ったのが「あはれにありがたきもの」だという。「心尽くし」で「身にしみておぼゆるふしぶし」などが、歌とともにくわしく言及され、めでたき人、にくき人としての作中人物批評が続く。最後に難点として「めづらかにあさまし」と口々に言って終わるのは、『狭衣』と共通だが、記述の量はいちばん多い。『みつの浜松』は、『寝覚』『狭衣』ほど世評は高くないが「言葉遣ひ、ありさま」をはじめ「めづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとなれば、かくこそ思ひ寄るべけれ」という高い評価の発言から始まる。ついで作中人物論、難点として超現実的な輪廻転生の「まことしからぬ」点があげられている。「あはれ」「艶」「いみじ」などの印象批評とともに、言葉遣いなどの表現を評価しており、超現実的な要素を難点としているが、この三作品が『源氏』に次ぐ別格とされている。

これに続いて、『玉藻』『とりかへばや』を評するが歌の引用はない。『隠れ蓑』は「言葉遣ひいたく古めかしく、歌などのわろければ」といい、改作するといいという発言のあと、『今とりかへばや』は「言葉遣ひ、歌など」も悪くないし、ひどく「恐ろしきところ」もないという。これには作中人物批評もある。

以下、『心高き』は言葉遣いが古めかしく歌などもわるいが名高く「あはれに悲し」、『朝倉』『川霧』も同様で、『岩打つ波』も言葉遣いが古めかしいが「かたき討ちたる」がうれしいという。「今様の物語にとりて」は『海人の刈藻』が「しめやかに艶」ではないが言葉遣いなども『世継』を学んで「したたか」で「あはれ」、『法華経』の一節を口づさむのはすばらしいが、男主人公の即身成仏は『寝覚』の中の君の「そら死に」にも劣らず残念だという。『末葉の露』は『海人の刈藻』と併称されるが、言葉遣いなども凡庸で、「女の果報」が残念。『露の宿り』は「古物語」の中では言葉遣い歌も悪くないが、余りに人の死ぬのが不吉、『みかはに咲ける』は歌がよい。『宇治の川波』は『海人の刈藻』を「まねび」すぎだが悪くなく、『駒迎へ』は言葉遣い艶にしみじげだが「末枯れ」、『緒絶えの沼』は余りに現代風だが「心ある」ものなど口々に言い、これ以外にも「人々そからぬ物語」や少しは得意げな作品も多いが、数多く夜も明けてしまうという。そして、『初雪』という物語に「物語」のことが見えるから参照せよと区切っている。

その次に、「むげにこのごろ出で来たるもの」が多く、なまじ古いものより「言葉遣ひ、ありさまなど」すばらしいのもあるが、『寝覚』『狭衣』『浜松』には及ばないという。また、隆信の『うきなみ』は「ことのほかに心に入れて作りけるほど見えて、あはれ」だが「言葉遣ひなど手づつげ」で不満、定家少将の作も多いが、「気色ばかり」で「むげにまことなきものども」、『まつらの宮』がひとえに『万葉集』の風情で『うつほ』など見る心地で「愚かなる心も及ばぬさま」という。すべて「今の世の物語」は「古き帝」に時代設定した擬古物語で、「いとまことしからず、おびただしきふし」が強いと批判的である。中では『ありあけの別れ』『夢語り』『なみじの姫君』『浅茅が原のないしのかみ』などが、

「言葉遣ひなだらか」でよいが「いと恐ろしきこともさし交じりて、何事もさむる心地」するのが残念だという。この後に事実物語としての『伊勢物語』と『大和物語』への言及があり、歌のよしあしは『古今集』などを参照せよという。

全体に、『源氏物語』以後の作り物語で「今の世の物語」以前を対象とし、「あはれ」「艶」「をかし」などを理想としながら、その「言葉遣ひ」としての文章表現と歌の評価が中心である。また、作中人物批評によりつつ、印象的な場面に言及しており、超現実的な要素には批判的である。こうした対象区分や批評のしかたは、女性の作品について王朝女性の視点から論じているためだと思われる。「今の世の物語」の多くは、隆信・定家の名があげられているように、『源氏物語』以前と同様に、再び男性作家によるものが多いと思われる。『源氏物語』は別格としても、『寝覚』『狭衣』『浜松』という女性による物語が理想なのである。とはいえ、多くは散逸物語であり、作者を確認するすべはない。『あまのかるも』なども現存作品は改作本である。散逸作品の研究のためには、『風葉和歌集』などとともに貴重な資料であるが、『無名草子』の作品としての位相をおさえることが肝要である。物語作者そして読者としての女性の立場から、改作について積極的であるのは、あくまでも物語の制作と享受の側からの評論であることを示している。

こうした物語批評の場は、平安朝の中期から現実にはしばしば行なわれていたものの反映であるといえよう。『枕草子』では、中宮定子の御前で「物語のよきあしき、にくきところなどをぞ、定め、言ひそしる」とあり、『うつほ物語』の涼、仲忠の優劣について論議している。また『今鏡』（巻七）では令子斎院の「うちに源氏読みて、榊こそいみじけれ、葵はしかあり、など聞えけれ」という。これらは、作り物語の人物や場面の優劣、好き嫌いをめぐる「定め」の場であり、『無名草子』とも共通している。もの定めめの場の物語の特徴である語り手の複数性を生かした論議は、いくつかの対立や異見を示して効果的であるが、評価の対立に主眼があるわけではない。すでに物語批評というべき『はつゆき』という物語のあったことも示され、それがかなり広汎に『無名草子』の言及しない物語をも論じていたことを伺わせるが、それも散逸していて内容は不明である。

和歌に関しては早くから歌論があったが、物語について体系的に論じる伝統はなかった。それは物語が「つれづれ慰む」娯楽であり、漢詩文や和歌とちがって、作者名を記さない無署名の表現だったためでもある。平安朝の後期から、男性歌人たちを中心にして『源氏物語』の正典化が始まったが、それは秀歌を読むための教養としてであり、一般の物語はなお娯楽であった。その基底には、仏教的な言語価値観によるイデオロギー的な差別があった。『無名草子』もこうした磁場ゆえに、冒頭に登場した老尼が聞き手になって、桧皮屋の女房たちが語り合うという、幻想的な物語場が入れ子構造によって、トポロジカルに設定されていた。このトポロジカルな物語の構造と物語の内容における仏教的な要素や価値基準の変化は、きわめて密接な関係にあると思われる。それは、仏教的な価値観に拠るしかない「末の世」（末世）の物語の現在の時空から、王朝の〈女〉の文化をふりかえり、その過去の時空へと同化していくための仕組みなのであった。

こうした表現の構造と主題的な意味内容とを結ぶ発想の根底には、〈狂言綺語〉観があったといえる。〈狂言綺語〉観は、白居易に由来し、仏教的な価値観を前提にしながら文芸の正統化を願う論理として、平安朝の中期から文芸の表現者たちを支えてきていた。そ

れが急速に現実味をおびて表面化してきたのは、永承七年（1052）に末法の世に入ったという説が定着したあと、武家が台頭して戦乱の世になり、平家が滅亡して、ついに鎌倉幕府が成立する動乱の時代においてであった。『無名草子』はまさしくその時代の産物である。そして、その発想の基盤として、具体的には「源氏供養」という儀式がある。

現存する最古の「源氏供養」の記録は、永万二年（一一六六）からまもなく導師をつとめた澄憲によって書かれた「源氏一品経表白」である。その施主は「禅定比丘尼」とよばれる女性であった。その漢文の表白文のはじめでは、仏典（内典）を頂点として、儒教や道教の典籍（外典）、史書、漢詩、和歌の順に言語イデオロギーによる価値の階層化が示され、その末端に「虚誕」を宗とし、「男女交会の道」を語るのみの物語を位置づけている。次いで、物語の中でも『源氏物語』は特に秀逸であることを言い、その綺語（美文）が恋情をよびおこすゆえに、作者そして読者もまた地獄に堕ちねばならないという。昔、紫式部の亡霊が人の夢に託して罪の重さを告げたというのである。そこで信心ぶかい大施主の比丘尼が、「道俗貴賤」に勧めて『法華経』二十八品を書写し、巻ごとの端に「源氏一篇」を記し、『法華経』の品々（章ごと）に『源氏物語』の「篇目」（巻名）をあてた。白居易の発願にならって「狂言綺語の謬を以て、讚仏乗の因と為し、転法輪の縁と為す」ために供養したという。そこに示された物語は、「落窪・岩屋・寝覚・忍泣・狭衣・扇流・住吉・水ノ浜松・末葉ノ露・天ノ葉衣・格夜姫・光源氏等」である。

ここには、仏教がますます支配的な思想としての役割を強めていた時代の物語文芸の位相が示されている。内典＞外典＞史書＞詩＞和歌＞物語という言語表現の階層化として図式化できる。それはまた、漢字（真名）による男文化に対する、かな（仮名）による女文化の位相が典型的に顕れているのでもあった。女文化の立場から、王朝の物語や女性文化を正統化するためには、狂言綺語観によることが欠かせない手続きだったのである。

はやく『更級日記』の作者もまた、『源氏物語』を夢中になって読みふけていたとき、「法華経五の巻をとくならへ」という夢のお告げを得ており、その深層にも狂言綺語観が作用していた。『法華経』の第五巻は、女人往生の根拠とされた「提婆達多品」である。そして、『無名草子』がその導入部で典拠にしていた『宝物集』にも、次のようにあった。

まちかくは、紫式部が虚言を以て源氏物語を作りたる罪によりて、地獄に堕ちて苦患忍びがたき故に、早く源氏物語を破り捨て、一日経を書きてとぶらふべしと、人々の夢に見たりけるとて、歌詠みども寄り合ひて、一日経書き供養しけるは覚え給ふらん。

治承二年（1178）に近いころの源氏供養であろうが、注意しておきたいのは、ここでは『源氏物語』が「源氏一品経表白」に比べてずっと否定的にとらえられていることである。それとともに、この供養を行ったのが「歌詠みども」とされていることが重要である。この「歌詠み」の中に女性たちがいなかったとは言えないが、男性歌人を主とした発想であると思われる。歌の規範としての『源氏物語』の評価と、『源氏物語』そのものを愛読し弁護しようとする立場の差異を読んでおきたい。定家が撰した『新勅撰和歌集』巻十の釈教歌に次のようにあるのは、このときのことかもしれない。

紫式部のためとて結縁経供養し侍りける所に薬草喻品をおくり侍るとて

権大納言 宗家

法の雨に我もや濡れむむつまじき若紫の草のゆかりに

また『藤原隆信集』下の釈教にも、「母の紫式部がれうに一品経せられしに、だらに品をとりて」として、歌二首が記されている。この隆信の母は、『今鏡』の著者である寂超の妻で、その『今鏡』は、紫式部が地獄に堕ちたという説に対して、これを弁護し観音化身説を提起していた。

「誠に、世の中にはかくのみ申し侍れど、ことわり知りたる人の侍りしは、大和にも唐土にも、文作りて人の心をゆかし、暗き心を導くは常の事なり。妄語などいふべきにはあらず。わが身になき事を、あり顔にげにげにといひて、人のわろきをよしと思はせなどするこそ、そらごとなどはいひて、罪得る事にはあれ。これはあらましごとなどやいふべからむ。綺語とも雑穢語などはいふとも、さまで深き罪にはあらずやあらむ。……人の心をつけむ事は、功德とこそなるべけれ、情をかけ、艶ならむによりては、輪廻の業とはなるとも、奈落に沈む程にやは侍らむ。

紫式部が『源氏物語』という「妄語」を記したゆえに「奈落」つまり地獄に堕ちたという世間の説に対して、語り手の老尼は、道理をわきまえた人が文章によって「暗き心」の人々を導くのはよくあることで、『源氏物語』は「そらごと」ではなく「あらましごと」つまり理想の物語だという。「綺語」とか「雑穢語」ではあっても地獄に堕ちるほどの「深き罪」ではなく、人々が魅了されるのは「功德」であり、「輪廻の業」として往生できないことはあっても、地獄に堕ちるはずがないという。

『今鏡』は初瀬寺における対話形式で進行し、この語り手の女房は『大鏡』の世継の翁の孫娘で、もと紫式部の侍女だということになっているから、『源氏物語』を好意的に弁護するのも当然だが、続くつぎのような文章で、いっきに観音の化身とまでいうのは、そのマイナスからプラスへの逆転の論理がきわだっている。

この世の事だに知り難く侍れど、唐土に白楽天と申しける人は、七十の巻物作りて、詞をいらへ譬をとりて、人の心を勧め給へりなど聞え給ふも、文珠の化身とこそは申すめれ。仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出だし給ひて説き置き給へるは、こと虚妄ならずとこそは侍れ。女の御身にてさばかりの事を作り給へるは、ただ人にはおはせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申すやむごとなき聖たちの女になり給ひて、法を説きてこそ人を導き給ふなれ」などいへば、

『源氏物語』を書いた紫式部を観音の化身とまで発想する根拠は、白居易（白楽天）が、文珠の化身だという説になぞらえたことにある。さらには、仏の説いた「譬喩経」を例にだすのは、『源氏物語』の蜩の巻の物語論を想起させるし、前段で「そらごと」というべきでないというのも共通している。

白居易は、いうまでもなく狂言綺語観の源拠であり、文芸や芸能を正統化する平安朝においてほとんど唯一の論理であった。ここには、『梁塵秘抄』の歌謡を引いて、それが中世にかけて、いかに流布していたかを確かめておきたい。

狂言綺語の誤ちは、仏を讃むる種として、僞き言葉も如何なるも、第一義とかにぞ帰るなる。

『今鏡』にも、「ものの心を弁へ、悟りの道に向かひて、仏の御法をも広むる種となし、僞き詞も、なよびたる詞をも、第一義とかにもかへし入れむは、仏の御志なるべし」と、このあとの老尼の発言の中にある。

『無名草子』もこうした狂言綺語観に基づいた物語の正当化の流れの内に位置づけられる。とはいえ、老尼をめぐる序の物語のあとの物語論議からは、意外なほどに仏教的な価値基準による評価が消し去られている。神仏による奇跡の要素も、真実味のない超現実性として否定的に捉えられているのである。それはまた、中世の『源氏物語』の注釈書や『弘安源氏論議』などに強くみられる歴史や有職故実の考証などとも異質である。

「源氏供養」の施主が女性であったにせよ、『無名草子』では男の学問との差異が明かなのであり、それはまた、歌や歌ことばによる表現の重視にも作用していると思われる。そのことが、御子左家に近い立場にありながらも、俊成や定家、隆信などとの距離を示すのであろう。『無名草子』の物語批評には、歌の批評とは異なった〈詩学〉がある。たとえばそれが、歌学と共通するにせよ、物語の歌と歌集の歌との差異をまず出発点として想定しておくべきだと思われる。

#### 4 歌集の論

『無名草子』の歌集の論は、物語についての論にくらべて量的にもきわめて少なく、そのあとの女性論へのつながりのような位置にある。

『万葉集』については、「心も言葉も及びはべらず」と、一種のほめことばではあろうが、敬して遠ざけるといった趣だ。『古今集』については、その「ふるごと」は「返す返すもめでたくはべれ」と讃えつつ、「歌のよしあしなど申さむことは、いと恐ろし」と言ったうえで、選者たちが「たとひ思ひ誤りてよろしき歌」を入れたとしても、帝が見とがめなかったはずはないと言う。結果的には『古今集』を高く評価しているのだが、「よろしき歌」とは凡庸な歌で、わざわざそんなことに言い及ぶのは、これも単純な絶賛とはいいがたい。

『後撰集』は、「あまりに神さびすさまじきさまして、凡夫の心及びがたくはべり」。『拾遺集』と『拾遺抄』との関係については、ある人が定家少将にどちらが勅撰かと質問したのに対して、定家が「集には抄ははるかに劣りて見ゆ」と答えたことや、「万葉集より千載集に至るまでは八代集とや言ふらむ」と記したものがあるという。『後拾遺集』は「よき歌どもはべるめり」と認めつつも、「古き集どもよりはよし」という人々もいるが『古今集』には及ばないとする。

次いで、藤原公任が三代集の歌から撰じた『金玉集』を見よという。そこに収められた歌が、「心も言葉も姿もかき合ひて、めでたき歌」だということを知らなさいという。あえて確かめておけば、三代集という勅撰和歌集それ自体よりも、公任がそこから秀歌を選んだものが、歌の最高の基準だということである。公任の秀歌撰をもっとも高く評価するのは、それが紫式部の『源氏物語』と同時代の産物だということに注目しておきたい。

これ以下が私撰集についての論だが、その評価は高くない。『金葉集』はよいと思う人もいるが、「今少し見どころ少なく」思われると言う。その後には、「家々に撰べる集」が多く、『かゑんす（歌苑集）』『こせんす（今撰集）』などは、人はよいと思うようだが、勅選集でないせいか「いとあなずらはしく」思うとし、「撰べる人柄による」のだとする。

『げんそん（現存）』『げつけす（月詣集）』などは「めでたかるらめども、心にくくもい

とおぼえはべらず」。まして『ならず（奈良集）』などは、見ていないが「心せばきもの」だろうとか、『ぎよくわす（玉花集）』という建久七年の撰のものも、誰というほどの者のしわざでもないだろうなどという。ほとんどが、散逸した歌集らしく、その内容はわからないが、撰者の才能を重視した発言である。

『ぎよくわす』については、別の女房が、「題の歌」（題詠）だから、歌を詠むべきとっさの場合に役立つのではないかと言う。それに対する答えとしては、「題の歌」ということなら、撰集でなくとも、『堀河院百首』『新院百首』（久安百首）、近くは藤原良経が左大将だったときの『百首』があり、かえって「いと美しき」歌どもがあるという。この『百首』とは、建久四年に良経が主催して、俊成が判者をした『六百番歌合』のことである。歌題は、「春」（十五首）「夏」（十首）「秋」（十五首）「冬」（十首）「恋」（五十首）の百題で、作者は、良経・季経・兼宗・有家・定家・顕昭・家房・経家・隆信・家隆・慈円・寂蓮の十二人。それぞれが持ち寄った百題の百首を六百番の歌合とした。当時の歌壇の二大勢力である御子左家と六条家の代表歌人たちが結集して、激しい論争が行なわれたらしい。

次いで、その判者である俊成が撰んだ勅撰集の『千載集』について、次のような発言が『無名草子』にあるのも注目にあたいする。

あはれ、折につけて、三位入道のやうなる身にて、集を撰びはべらばや。『千載集』こそは、その人のしわざなれば、いと心にくくはべるを、あまりに人にところを置かるるにや、さしもおぼえぬ歌どもこそ、あまた入りてはべるめれ。何事もあいなくなりゆく世の末に、この道ばかりこそ、山彦の跡絶えず、垣の本の塵尽きず、とかやうけたまはりはべれ。まことに、聞き知らぬ耳にもありがたき歌どもはべるを、主のところにはばかり、人のほどに片去る歌どもにはかき混ぜず撰り出でたらば、いかにいみじくはべらむ。

俊成への評価は高い。けれども、歌そのものの価値によってではなく、撰者が詠んだ人の身分に遠慮して、たいして良くもない歌を入れたことには批判的である。何事も悪くなっていく「世の末」に、この歌の道だけが持続しているという認識もある。末世という時代認識のもとに、人の身分をはばからず撰ぶことができたならどんなにすばらしいか、と言ったあと、「女」の論へと帰結していくのである。この末世という時代認識と、歌をその作者の身分によってではなく歌そのものの評価によって撰ぶべきだという見解とは、どう関連しているのか。

『無名草子』の「世の末」そして「末の世」という末法思想は、他の部分にも顕著である。だからこそ現実社会の身分秩序とは無関係な歌の純粹性が求められるという態度は、「女」の論とも通底している。それは、現実社会の身分秩序を構成している公的な世界が〈男〉のものであり、そこから疎外された〈女〉の私的文化の伝統にこそ、より純粹な歌や物語の世界があるという発想であろう。『無名草子』の文脈をもう少したどってみる。

いでや、いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。昔より色を好み、道を習ふともがら多かれども、女の、いまだ集など撰ぶことなきこそ、いと口惜しけれ。

これを承けたべつの女房が、必ずしも歌集を撰ぶことがすばらしいのではないとして、次のように言うところに、物語論を中心とした『無名草子』の特色が示されている。

「必ず、集を撰ぶことのいみじかるべきにもあらず。紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざにはべらずや。されば、なほ捨てがたきものにて我ながらはべり」

『無名草子』の語り手の女房の発言から、歌にたいする評価の基準は、明確なものがあつた。それは、公任撰の『金玉集』の歌のように「心も言葉も姿」も調和した歌が理想なのであり、題詠歌ならば『六百番歌合』の「美しき」歌であつた。勅撰集を撰することにはあこがれつつも、撰者の男たちが、作者の身分のような歌そのものの評価とは別の権力関係による社会的基準を混同していることには、批判的できびしい。その深層にあるのが、〈女〉の立場からの、私的な文芸観である。紫式部が『源氏』を作り清少納言が『枕草子』を書いたから女も捨てがたいと言ったあと、現在は活躍の場がないと嘆いているのが現実の状況であつた。

『無名草子』の物語論の実例に即して、「あはれ」や「えん」といった批評用語による和歌的とみなされてきた物語の詩学についての全体的な検討をする余裕はない。ここでは、その一例として、『無名草子』の中から『源氏物語』の仏教的な要素についてふれた部分に注目してみるが、ほとんど無きにひとしい要素ではある。俊成など同時代の歌の世界における釈経歌の隆盛と対比されよう。

まず「いみじき女は」の中で、空蟬も朝顔の宮のように「心強く」光源氏を拒んだことを「むげに人わろき」と言い、「後に尼姿にてまじらひゐたる、また心づきなし」と言う。空蟬が尼姿で光源氏と交流を続けたのはみっともないというので、出家の心が不徹底だというのだろうが、出家そのものを肯定する発言でもない。また、蓬生の巻で、ひとり光源氏の訪れを信じてそのかいあつた末摘花について、「その人柄には、仏にならむよりもありがたき宿世にははべらずや」と言う。大げさな喩えにすぎないが、成仏よりも現世の幸福をめつたにない「宿世」という。

これらはささいな例だが、光源氏や藤壺、女三宮、そして仏教的な要素の色濃い宇治十帖の薫や八宮、浮舟や横川僧都など、信仰生活や出家に関わる情景についての言及は、まったくというほどに無いのである。そのかわりに『無名草子』の『源氏物語』論の基調をなしているのは、「あはれ」という用語に代表される哀傷の心である。「巻々の中に、いづれかすぐれて心にしみてめでたくおぼゆる」という問いへの答えに、それははっきりと示されている。その始めと終わりの部分を引用してみる。

「『桐壺』に過ぎたる巻やははべるべき。『いづれの御時にか』とうちはじめたるより、源氏初元結のほどまで、言葉続き、ありさまをはじめ、あはれに悲しきこと、この巻にこもりてはべるぞかし。……

『柏木』の右衛門督の失せ、いとあはれなり。『御法』『幻』、いとあはれなることばかりなり。宇治のゆかりな、『こじま』にやう変はりて、言葉遣ひも何事もあれど、姉宮の失せをはじめ、中の君など、いといとほし」など、口々に言へば、

『無名草子』の批評基準は、たんに物語内容の「あはれ」にあるのではなく、その「言葉」の表現にある。歌も文脈から切り離されて引かれるのではなく、主題的表現の核としてである。浮舟についてはきびしい発言があるが、入水を決意したときの歌に共感し、匂宮との関係を薫が疑って贈った手紙の歌をはぐらかして返した配慮については讃えてい



る。

手習ひの君、これこそ憎きものとも言ひつべき人。さまざま身をひとかたならず思ひ乱れて、

鐘の音の絶ゆる響きに音を添へて我が世尽きぬと君に伝へよ

と詠みて、身を捨てたるこそいとほしけれ。兵部卿官の御事聞きつけて、薫大将、

波越ゆるころとも知らで末の松待つらむとのみ思ひけるかな

とのたまへるを、『ところ違へならむ』とて、結びながら返したるほどこそ心まさりすれ」

## 5 王朝女性の論

女性論は、まねしたいような古今の「心にくく聞こえむほどの人々」についてであるが、歌集の論の終りの「末の世まで名をとどむばかりのことば言ひ出で、し出でたるたぐひ」を承けている。女性の芸術活動への関心を主にして、十五人の歌人や作家、琵琶の名手、后妃や皇女がとりあげられている。その時代は、一条朝を中心にして、堀河天皇の時代までであり、王朝文化の最盛期に限られている。

小野小町は「色を好み、歌を詠む者」の代表で、「女の歌」の理想であると言われ、「老いの果て」の落魄伝説に言い及ぶ人に対しては、「それにつけても、憂き世の定めなき思ひ知られて、あはれ」と肯定される。清少納言も、『枕草子』の「あはれにも、いみじくも、めでたくもある」ことを書いたことへの評価をしつつ、歌は得意でなかったこと、中関白家の没落を記さなかったことは讃められつつも、やはり晩年の落魄に言及されている。

小式部内侍は、教通に愛されて子を生んだことなどが「めでたけれ」とされ、多くの男生との歌による交流が言われている。その母の和泉式部は、歌人として高く評価され、歌の徳により「罪深かりぬべき人」なのに後世で救われたことが「うらやまし」とされる。宮の宣旨は、定頼との悲恋の贈答が「ありがたくあはれ」。「名を得て、いみじく心にくく」理想的なのは伊勢の御息所で、宇多天皇との関係や、晴れの屏風歌の歌人として「心も言葉もめでたく」という。兵衛の内侍は「歌を詠み、物語を撰び、色を好む」ばかりでなく、数少ない女の琵琶奏者として「ありがたくうらやまし」い人としてあげられている。

紫式部は、いうまでもなく『源氏物語』作者として、また「その人の日記」の「一文字をだに引かぬさま」のエピソードや、道長や彰子と親しい関係にありながら控えめな「心柄」を言われている。

これらは、文芸や芸術に長けた女房であるが、男性関係における「色を好む」ことが、肯定的で共通の基準であることにも注目したい。語り手の女たちが、女房であることと、その理想に通じるものだからである。そこには、「定め」の場の論議における連想と対比の論理が作用している。それが、次の后妃論のはじめ、「皇后宮、上東門院、いずれか今少しめでたくおはしましける」という問いにも明確である。

皇后宮（定子）は美人で一条院の愛情も深く、その死別のときの「あはれ」な歌、また中関白家の没落をめぐる生きざまが同情的に懷古されている。上東門院（彰子）は「よしあしなど聞こゆべき」でなく「何事もめでたきためし」に引かれる人としたうえで、一条

院との死別の歌の「めでた」さ、二度の剃髪の「あはれ」をいう。何よりも、「優なる人」（女房たち）の多さが「心にくくめでた」い。その妹の枇杷殿の皇太后宮（妍子）は「華やかに、もの好み」した女房を多く集め、大和宣旨の名があげられる。女房装束の禁制を破り、一品経供養なども「おびたたし」い豪華さだったという。

次に大斎院（選子）のすばらしさが語られる。若き日の「めでたさ」は当然だが、晩年「世も末」の「末の世」に、月の光のもとで琴を引き遊ぶ風雅のエピソードが印象深く語られている。そして最後が、小野の皇太后宮（歆子）で、これも出家の後、雪の朝の白河院行幸の際の、貧しさの中の風流が、今の世ではありえない心配りとして記されている。

これらは『栄花物語』や『今鏡』、また説話集の類にある話題によるものであろうが、印象ふかくその人を歌物語的なエピソードで多く語っている。その晩年の生き方に多くの関心を示しているのは、「末の世」意識と深く通じている。物語的ともいえるが、ふりかえってみれば、このような歴史の現実を知る女房たちが、作り物語について語った時に、歴史的な背景や要素にほとんど関心を示さないことが、あらためて逆照射される。

『無名草子』で語られる物語の世界は、現実とは異次元の、美しい過去の女たちによる王朝文化の憧憬だということである。

## 6 作品の意義と限界

『無名草子』の語り手たちが理想とするのは、美しい王朝文化の言葉に〈同化〉することによって、失われた〈女〉の王朝文化を憧憬しつつ、その回復を願うものであった。その中心に『源氏物語』を頂点とする作り物語が位置するのは、〈女〉による最大の文化遺産であり、虚構ゆえになお未来へと持続する可能性をもつものだったからである。中世に特有の語と思われるものも多く、『無名草子』じたいが典型的な中世文芸のひとつの作品であるともいえる。

定め（論議）の場の物語は、現実にも行なわれていたが、『枕草子』や『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定めをはじめ、『大鏡』『今鏡』『宝物集』『古とりかへばや』などの伝統を継承するものであった。物語については、『枕草子』では定子の御前で「物語のよきあしき」を定め、『うつほ』の涼と仲忠の優劣について論議したりしていた。『源氏物語』では、蛍の巻の物語草子作りや、光源氏と玉鬘による物語論議、末摘花の愛読する古物語、また絵合における論議があった。『今鏡』巻七には令子斎院で『源氏物語』を読み「柵」や「葵」の巻についての論議をしたという。現存しないので定め場の物語かどうかは不明だが、『はつゆき』という先駆の物語批評作品もあったという。

『無名草子』は〈男〉たちの歴史物語や歌論や説話集に対抗する、現存最古の作り物語論を中心とした〈女〉による文化批評の書である。これ以前に、体系的な文化批評や物語論はなく、『枕草子』の「物語は」の段や『源氏物語』の蛍巻の物語論など、作品の中のひとつの要素として組み込まれていたものを、独立させ拡張したといえるのである。それは歌学や歌を詠むための教養でも歴史物語の一部でもなく、まぎれもない物語論を中心とした王朝文化論なのである。そこには、歴史物語や歌論や説話集とは異なった物語の詩学がある。

これまで『無名草子』は近代の「評論」という視点から扱われ、その印象批評的な性格が、論としては素朴で未熟な作品とみられる傾向が強かったが、定め場の物語として再評価すべきであろう。「あはれ」「艶」「をかし」といった和歌の美意識と共通する用語によって王朝文化の理想を語っているとはいえ、難点を批判し、「まことしからず」「あさまし」「すさまじ」などいうのは、和歌の美意識をはるかに超えている。それはまた、老尼の序の物語による狂言綺語観をふまえた仏教的文学観の枠をもつとはいえ、多声的な語り的手法によって、トポロジカルにその制約から逸脱している。印象批評というにせよ、その人物批評などは的確で、近代の作品論や作中人物論の原型といえる。歌のみならず「言葉遣ひ」という文章表現に批評基準のあるところが、表現論の先駆としても注目される。

『無名草子』で言及された作り物語や歌集の半数以上が散逸作品であり、『寝覚』『みつの浜松』など欠巻部分を補ったり、現存する改作本の古本を知る手がかりにもなる。そうした物語の全体像の復元や、散逸物語を含んだ物語史の検討のためにも、『物語二百番歌合』や『風葉集』などとともに、貴重な資料である。とはいえ、たんに物語史の資料として扱うのではなく、「草子」という批評文芸の系譜に位置づける必要もある。

物語批評としての『無名草子』は、作り物語を中心とした物語のジャンル区分の意識を示し、ゆるやかではあるが、物語史というべき文学史的な時代区分を示している。それは、一二〇〇年頃を現在として、次のように大別される。

- (1) 源氏物語より前の物語、
- (2) 古く感じられる物語、
- (3) 今様の物語、
- (4) 今の世の物語

それぞれ、(1) 十世紀以前、(2) 一一世紀、(3) 十二世紀前半から中期、(4) 十二世紀後半と、ほぼ対応させることができる。そして、『無名草子』が対象としているのは、作り物語のうちでも、中・長編の物語であり、『堤中納言物語』に収められた諸作品のような短編の物語は、論の対象からはずされている。このことは、『風葉集』との比較によっても確かめうるのである。これは、作中人物に同化し感情移入する享受のしかたによると考えられ、『無名草子』の限界ともいえるのであるが、王朝女性たちの享受の伝統でもあった。

現在の文学研究からみた最大の限界としては、『竹取物語』iraいの物語の重要な要素であった超現実的な空想性や、王権や摂関政治的な権力闘争などの歴史的な現実をふまえた世界、あるいは仏教・儒教・道教・神道などの思想との交錯や拮抗という要素が、読みのコードから抜け落ちていることがある。それはまた、多くの後期物語の特徴でもあって、『無名草子』の特性と裏腹のものである。

古代末期には価値観が大きく変動し、平安朝中期における〈類聚〉によって世界を再解釈し秩序を回復しようとする動きから、武家の時代への移行の中で、もはや統一的な秩序による体系性を求めつつも放棄せざるをえない〈集成〉の時代に入っていた。仏教における浄土教と物語文芸は、こうした過渡期の産物である。社会（共同体）の秩序はゆらぎ、個化した人間の魂の救済となぐさめが大きな課題となった。

漢文による六国史が終焉したあと、かな文による歴史書は「物語」となった。勅撰和歌集は相変わらず編纂されたが、もはや王国の秩序を統合するものではありえなかった。『今昔物語集』のように、仏法を核として世界を再解釈し体系化しようとする試みは破綻する。人々の魂の救済に目的を絞った浄土教の流れは、源信の『往生要集』から法然へ、そして親鸞へと社会的な現実に対応する思考と実践のなかで、特異な〈日本化〉をとげた。その方向性の内に、物語文芸の表現史も位置づけうるであろう。慈円は「道理」の存在を問い『愚管抄』を書かねばならなかった。『無名草子』の下降史観といったものも、たんなる失われた過去への追憶ばかりではなかった。

『無名草子』の王朝文化への憧憬も、たんなる失われた過去への追憶ではなく、中世の王朝〈女〉文化への新たな可能性への希求であった。

#### \* 諸本

現存の本文は、(一)天理図書館蔵本、(二)彰考館文庫蔵本、(三)群書類従本の三本に帰結する。天理本は、建武二年(一三三五)の奥書のあと、康永二年(一三四三)と正平二一年(一三六六)の奥書、そして永正五年(一五〇八)の津守則棟の奥書がある。彰考館本にも、建武二年の奥書、そして津守国冬(冬)の奥書がある。いずれも末流の写本で、本文の乱れをもつが、彰考館本は筆記者がその内容を理解しないまま字形を似せて書写したと思われる誤りが多い。

#### \* 参考文献

高橋亨「王朝〈女〉文化と『無名草子』」古代文学研究、第二次10、2001年10月。  
樋口芳麻呂『平安鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、1982年。  
樋口芳麻呂「源氏物語と物語秀歌撰」高橋亨・久保朝孝編『新講源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社、1995年。  
森正人「無名草子の構造」国語と国文学、1975年10月。  
森正人「場の物語・無名草子」中世文学、1982年10月。  
錦仁「院政期歌合の構造と方法」日本文学、1994年2月。  
錦仁「『古今集』仮名序と院政期の和歌観念」日本文学、1995年7月。  
五味文彦『藤原定家の時代』岩波書店、1991年。  
深沢徹「『無名草子』のトポロジー」『講座平安文学論究』13輯、風間書房、1998年。  
三角洋一『物語の変貌』若草書房、1996年。  
神野藤昭夫『散逸した物語世界と物語史』若草書房、1998年。  
大隈和雄「古代末期における価値観の変動」北海道大学文学部紀要、1968年2月。  
他は、『無名草子 注釈と資料』和泉書院、2004年の「研究文献目録」(安藤徹)を参照。

1 「世継」の物語の系譜

『無名草子』を、戦乱によって失われた王朝貴族の女性文化の回復を願う、女房たちによる幻想の歴史書としてとらえ、「世継」の物語の系譜において位置づけられるのではないというのが、この論の発想である。

『無名草子』は、「さのみ女の沙汰にてのみ夜を明かさせ給ふことの、むげに男のまじらざらんこそ人わろけれ」と、女性の話題だけで男性を論じないのはみっともないと言った女房に対する、次のような発言で終わっている。

「げに、昔も今も、それはいと聞きどころあり。いみじき事いかにおほからむ。おなじくは、さらば、御かどの御うへよりこそ言ひたちなめ。よつぎ、大かがみなどを御覽ぜよかし。それにすぎたることは、なにごとかは申すべき」といひながら。

この「大かがみ」が『大鏡』であることは確かだが、「よつぎ」は『栄花物語』なのかどうか、さだかでない。「よつぎ大かがみ」で『大鏡』をさすという説もあるが(1)、並列しているから『栄花物語』の可能性が強いとみるのが近年の説である(2)。

『無名草子』では、『海人の刈藻』についても、「しめやかに艶あるところなどはなけれども、ことばづかひなども、よつぎをいみじくまねびて、したたかなるさまなれ。物語のほどよりは、あはれにもあり」という。言葉遣いを「よつぎ」に学んで「したたかなるさま」とは、歴史物語風の文体がしっかりしているというのであろう。この「よつぎ」についても確定はできないが、『栄花物語』とみる説が通説化している。

そもそも、『栄花物語』も『大鏡』も、書名としての別称に「世継」や「世継物語」とあることが、混乱の原因である。『栄花物語』では、三条西家旧蔵の梅沢記念館蔵本(梅沢本)の、前半十帖(巻二十まで)が「栄花物語」と題し、書写年代の異なる後半七帖が「世継」と題して、ともに鎌倉中期を下らない書写という。また、異本系統の富岡家旧蔵の学習院大学蔵本が「世継物語」と題するという。『大鏡』では、建久三年(1192)書写の建久本をはじめとする諸本が「大鏡」の題名をもち、藤原伊行『源氏釈』や顕昭『古今集註』『袖中抄』などが「大鏡」の名をあげるが、原題は不詳ともされている。蓬左文庫本は「よつぎ物語」(内題「世継」)、また、「世継が物語」(愚管抄)、「世継の翁が物語」

(六百番歌合)、「世継の翁の物語」(徒然草)、「世継物語」(袋草紙、中古歌仙三十六人伝)などともいう。「世継大鏡」という例も、『無名草子』だけでなく、『拾遺抄註』『清輔本古今集』『異本伊勢物語』『塵袋』などにもあり、『大鏡』の異名ともみなされている。

『大鏡』のばあい、いずれも語り手の大宅世継に関連した呼称とみられる。(3)

『無名草子』にもどってみれば、「さらば、御かどの御うへよりこそ言ひたちなめ」というのは、男性についての論議を、同じことなら天皇の事跡から語るべきだということで、それが「よつぎ、大かがみなど」だということである。それは、この直前まで語られていた女性論に対してのものである。女性論で語られたのは、小野小町、清少納言、小式部内侍、和泉式部、宮の宣旨、伊勢の御息所、兵衛内侍、紫式部のあと、皇后宮定子、上東門院彰子、大斎院選子、小野の皇太后宮歡子であった。

その記述には、勅撰集をはじめとする歌集や、『枕草子』や『紫式部日記』などとの関連が、さまざまに指摘できる。『栄花物語』や『大鏡』を出典や引用関連とみられるものもあり、『宝仏集』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』などの説話集とも通底している。いまとくに注目したいのは、『古本説話集』や『世継物語』（『小世継』とも。『宇治大納言物語』は増補改編本）との共通性である。『古本説話集』は近年に発見されて題名は仮に付けられたものであり、『世継物語』との共通の歌説話が多い。

和泉式部が貴船に詣でて「物おもへばさはの蛍も」という歌を詠み、「おく山に」という神の返歌があったことは、『後拾遺集』をはじめとして、『俊頼髓脳』『袋草紙』にもみえるが、『古本説話集』と『世継物語』にもある。また『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』にも載せる有名な説話である。小式部内侍の死を悲しんで遺児を見て詠んだ「とめをきて誰をあはれと思ふらん」の歌は、『後拾遺集』『宝物集』『和泉式部集』『栄花物語』にあるが、『古本説話集』と『世継物語』にもある。そして、書写の聖（性空）に贈った「くらきよりくらき道にぞいりぬべき」の歌にまつわる伝承は、『拾遺集』『和泉式部集』『俊頼髓脳』『袋草紙』にあるが、『古本説話集』と『世継物語』にもある。つまり、この三つの歌にまつわる伝承すべてを記すのが『古本説話集』と『世継物語』なのである。

宮の宣旨の歌では、「はるばると野中にみゆるわすれ水」の歌は『後拾遺集』にもあるが、「よそにても見るに心はなぐさまで」の歌は、他書にない。そして「恋しさをしのびもあへず」という三つめの歌も『後拾遺集』にあるものの、この三つの歌すべてにまつわる伝承を記すのが、『古本説話集』と『世継物語』である。赤染衛門の「松とはとまる人やいひけん」という歌は、『赤染衛門集』とともに『古本説話集』にみえ、伊勢大輔の「近江のかみにかたからめ」という歌は、『後拾遺集』とともに『古本説話集』と『世継物語』にある。兵衛内侍の部分では、博雅三位が逢坂の関で蟬丸に琵琶を習ったという説話は、『今昔物語集』『江談抄』などとともに『世継物語』にもあり、村上天皇時代の相撲の節会で玄上という琵琶を兵衛内侍が弾いたという伝承は『大鏡』にみえる。

紫式部が大斎院から上東門院への依頼に応じて『源氏物語』を書いたというのも、『古本説話集』と『世継物語』にあった。皇后宮定子と上東門院彰子に関しては、『栄花物語』『今鏡』『枕草子』『大鏡』などにより、大斎院選子については、『古本説話集』と重なる。そして、小野の皇太后宮歆子のもとへの雪の朝の白河院行幸の説話は、『今鏡』をはじめ、『十訓抄』『古今著聞集』『小野雪見御幸絵巻』にみられる。

『古本説話集』の成立は、1130年あたりという説と鎌倉時代初期という説もある。『世継物語』は鎌倉時代初期から中期にかけてとみられている。『無名草子』は1200年ごろの成立とみられるから、『世継物語』が『無名草子』に先行するとはいえないが、『古本説話集』や『世継物語』のような作品、あるいは〈歌語り〉のような伝承の記録が、『無名草子』に先行していた可能性は大いにある。

## 2 仏教から物語への反転

『無名草子』は、百歳を越えているとみられる尼が、東山あたりを花を摘みながら歩き、最勝光院を過ぎて、檜皮屋で女たちと語り合う場の物語として始まっていた。「花籠をひじに掛け、檜笠を首に」つった老尼の姿をみた若い女の声が、「小野小町がひぢに掛け

む筐（かたみ）よりはめでたし」というように、『玉造小町壮衰書』の小町落魄伝承をふまえた表現である。『宝物集』には次のようにある。

小野小町が、おひをとろへて、貧窮になりたりしありさま、弘法大師の玉造といふ文にかき給へるこそ、あはれにかなしく侍るめれ。着物なくして、蓑をもつて衾とたのみ、敷けるものなくて、菅菰をもつて畳とせり。みづから野べの蕨をつみて、簀（あじか）にいれて臂にかけたり。昔色をこのみ人にあひせられし事をおもひいでて、涙の雨をふらさずといふことなし。

色見えでうつろふ物は世の中の人々の心の花にぞありける

これ、若年の時所詠之歌也。（巻三「求不得苦」）

『無名草子』の王朝女性論のはじめは小町であり、そこに引かれた四首の始めにも「色見えで」の歌が引かれていた。そこでも晩年の老衰説話がふまえられるのだが、野中の鬨の目の穴から薄が生えている痛さを訴えた、「秋風の吹くたびごとにあな目あな目」という、『和歌童蒙抄』や『袋草子』などの歌論書や説話集で有名な歌が引かれている。

『無名草子』の老尼は、檜皮屋の女房たちに懺悔の物語をうながされ、我が身を回想して、十六七歳で皇嘉門院聖子の母藤原宗子に女房として仕え、宗子亡きあとも宮中で六条院、高倉院の御代まで時々仕えたあと出家したという。宗子は関白藤原忠通の妻で、後の皇嘉門院聖子を生み、聖子は崇徳天皇の中宮となる。近衛天皇が三歳で即位して、聖子は皇太后、久安六年（1150）に皇嘉門院となり、没したのは久寿二年（1155）である。翌年に崇徳上皇らが叛逆し、保元の乱が始まった。崇徳上皇は讃岐に配流され、皇嘉門院は三十五歳で出家して、九条の地で余生を生きた。

平治の乱（1159）で平清盛が権力を確立して、平滋子が六条院の女御となり、平家は急速に貴族化して、王朝文化への回帰が強まった。滋子は皇太后そして建春門院となり、後白河院の御座所法住寺殿の一角に、最勝光院を建てた。その三年後に没したが、頼朝が挙兵するまで二十年余り、王朝回帰の美しい時代の象徴が最勝光院であった。

「続世継」ともいう『今鏡』は、『大鏡』の語り手であった大宅世継の孫娘で、百五十歳を超えており、かつて「あやめ」と名乗って紫式部にも仕えたという老女を語り手としている。その老女の昔語りを、長谷寺に詣でた一行の女たちが聞き、作者は傍らでそれを記録したという表現形式をとっている。語り手も聞き手も、情報提供者（五節命婦）も女性であるところが、『無名草子』の先駆となっている。『今鏡』は『大鏡』のあとを承け、一条天皇の万寿二年（1025）から高倉天皇の嘉応二年（1170）までの王朝の歴史を語り、「すべらぎの下」巻を、建春門院の栄花で結んでいる。『無名草子』はこれを承け、今は廃墟となった最勝光院を、王朝女性文化への入り口としているのであった（4）。

とはいえ、源平の合戦や平家の滅亡にはふれず、老尼が体験したはずの戦乱の現実を語ることは回避して、『源氏物語』の世界へと向かう。その導入部にあたる「第一に捨てがたきふし」の論では、「月」「文」「夢」「涙」「阿弥陀仏」「法華経」のすばらしさが、順に語られている。それぞれが完結しながら仏教に帰結する内容で、『宝物集』の「第一の宝」の論の変形としてある。『宝物集』では、末法のただ中であって、仏法しか信じられず、和歌は「狂言綺語」観を媒介とした仏法への通路であった。『宝物集』の宝物の論は、「隠蓑」「打出の小槌」「金（こがね）」「玉」「子」「命」を順にあげ、それにまつわる故

事や歌説話を列挙しながら、それらが宝でないことを論じて「仏法」へと導くのであった。

その「子」が宝たりえない例証のひとつとして、『無名草子』の女性論にもあげられた、小式部内侍に先立たれた和泉式部の「もろともにこけの下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき」という歌がある。その主題的な文脈は、『無名草子』では小式部内侍と和泉式部ともに「あはれ」な歌詠みとしての評価にあって、『宝物集』とは方向が逆である。

『無名草子』では、『源氏物語』と『法華経』との関係を議論し、「凡夫」のしわざとは思えないとはいうものの、序の物語における仏教と、後の物語内容における王朝の美意識とが反転した、奇妙な調和をもたらしているといえる。王朝女性文化としての最高の達成として『源氏物語』をとらえることは、仏教的な価値評価を導入部の前提としてふまえながらも、物語史を主とした回想の中で、みごとに無化されているのである。

### 3 「打聞」と「世継」と「草子」

『今鏡』が語ろうとするものが政治なのか芸能なのかは難しい問題だとしながら、加納重文は、自身の「隠れた政治性」という論も含めて、「文学的歴史」といった見解をめぐる研究史をまとめている。また、『今鏡』の反『金葉集』や反『詞華集』的な態度についての議論もあったことを紹介しているが(5)、『無名草子』もまた『詞華集』にはふれず、『金葉集』には批判的である。後藤祥子は、『今鏡』巻十の「打聞」に関して、次のようにいう。

「打聞」の巻は拾遺集読み人知らずの哀傷歌から始まっている。『大鏡』の巻末におかれた「昔語り」を今鏡では巻九に置いて、さらに添加されたのが最終巻「打聞」である。「昔語り」が文字通り単に昔の珍しい出来事の伝承譚だとすれば、「打聞」とは歌にまつわる説話をいう。枕草子の作者は、自作の和歌が人の口の端に上って「打聞」などに書き入れられたらさぞ嬉しかろうと云い、道綱母の「薪樵る」の歌は「打聞」になったのだ、と賛嘆している。枕草子のこのあたりは、道命や業平の歌語りに挟まれて、まさに「打聞」の躰をなしている。俊頼髓脳の後半部（良暹の連歌に誰も付け得なかった話など）、あるいは袋草子の雑談の部分は「打聞」というにふさわしい所であろう。そのようなジャンルの盛行にのっとり『今鏡』は「昔語り」のあとに「打聞」を付け加えた。(6)

後藤はまた、この論文の注で、『和歌大辞典』が「打聞は私撰集のこと」というのを引き、『正徹物語』上に「現葉集は打聞にて侍るか。家々にみな打聞とて、その頃のうたを集おきてさぶらひし也」をその根拠としている。また、平安後期の「良暹打聞」も同様の私撰集と考えられているという。

「打聞」は、ほんらいは口承された「歌語り」や「歌物語」を記録したものであった。それを『枕草子』から『袋草子』へと系譜としてたどる中に、『無名草子』をも「草子」という批評文芸のジャンルとして位置づけ、『徒然草』の先駆としてみることが出来るという仮説を提起したことがある。(7) ここではそれを、「世継」の系譜との重なりにおいて捉えたいのである。すでにみたように、『無名草子』の王朝女性論は、『古本説話集』や『世継物語』をも含めた「世継」の系譜にあった。そればかりでなく、『無名草子』という作品の全体を、『今鏡』を承けた「世継」の「打聞」の系譜の中に位置づけることが



できよう。編年体や列伝という歴史叙述の外延として「昔物語」や「打聞」があり、その「打聞」の末尾の「作り物語のゆくえ」の延長線上に、『無名草子』の作り物語を中心とした、幻想の王朝女性文化論があるという構図である。

とはいえ、こうした「打聞」や「歌物語」を歴史物語に取り込むことは、「虚言（そらごと）」とみられて信頼を失う危険性をはらんでいた。『徒然草』は、「人の語りいでたる歌物がたりの、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道しらむ人は、いみじとおもひてはかたらじ」（五七段）といい、これは、『枕草子』「かたはらいたきもの」の「よしとも覚えぬ我が歌を人に語りて、人のほめなどしたる由言ふも、かたはらいたし」へと通じている。「歌物語」といっても、歌そのものの評価に関する評言だが、兼好は次のように醒めた発言もしている。

世に語り伝ふること、まことはあひなきにや、おほくはみなそらごと也。あるには過ぎて、人はものを言ひなすに、ましてとし月過ぎ、境もへだたりぬれば、言ひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定まりぬ。……とにもかくにも、そらごと多き世なり。ただ常にある、めづらしからぬ事のままだに心えたらむに、よろづは違ふべからず。下さまの人の物がたりは、耳おどろく事のみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにはあらず。是は世俗のそらごとをねんごろに信おこしたるもおこがましく、「よも」など言ふもせんなければ、大かたはまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、又疑ひあざけるべからずと也。（七三段）

#### 4 狂言綺語観からの自由

『今鏡』と『宝物集』との前後関係については不確定であるようだが、七巻本『宝物集』を『今鏡』と比較した黒田彰は、「宝物集は、その選歌の規範の一端を今鏡に仰いだのではないか」とし、説話についても「宝物集の今鏡依拠」の可能性を指摘している。（8）

この両書の『無名草子』との関連で興味深いのは、やはり狂言綺語観による紫式部墮地獄説をめぐる反応である。それは「源氏供養」という儀式をめぐる顕在化していた。『宝物集』は、「不妄語」の条で「虚言」を戒める例のひとつとして言う。

ちかくは、紫式部が虚言をもって源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとて、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おぼえ給ふらんものを。

これに対して、『無名草子』では、『源氏物語』に『法華経』の「文字の一偈一句」がないことを残念がる発言はあるものの、次のように全面肯定へと転じているのである。

「さても、この『源氏』作り出でたることこそ、思へど思へど、この世一つならずめづらかにおぼほゆれ。まことに、仏に申し請ひたりけるしるしにやとこそおぼゆれ。それより後の物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり。かれを才覚にて作らむに、『源氏』にまさりたらむことを作り出だす人もありなむ。わづかに『うつほ』『竹取』『住吉』などばかりを物語とて見けむ心地に、さばかりに作り出でけむ凡夫のしわざともおぼえぬことなり」

『河海抄』にみえるような、紫式部が石山寺の観音に祈念して『源氏物語』を起筆した

というような伝承が、すでにあったかのようにもある。「凡夫のしわざともおぼえぬ」とは、やはり『今鏡』にみえる、「女の御身にて、さばかりの事を作り給へるは、ただ人にはおはせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申すやむごとなき聖たちの女になり給ひて、法を説きてこそ人を導き給ふなれ」に通じている。『今鏡』はこの直前で、「仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出だし給ひて説き置き給へるは、こと虚妄ならずとこそは侍れ」と仏典による正当化をしている。

これとは異なって、『無名草子』は、『宝物集』の仏法へと導く宝の論を援用しつつ、これを変換して物語の肯定へと転じたのと同じく、観音の化身に直接言及することはなく、きわめて現実的である。その物語批評のなかでは、神仏の靈驗などによる奇異な設定を「まことしからず」と、否定的にとらえているのである。

そもそも、『今鏡』そのもの、そして「源氏供養」じたいが、仏教イデオロギーの強迫観念ともいえるべき思想状況の中で、『源氏物語』を肯定しようとするものであった。現存するもっとも古い記録は、安居院澄憲が永万二年（1166）からまもなく記した『源氏一品経表白』である。そこではまず、「文学」（外典）と「典籍」（内典）とは違うが、それぞれに「出世・世門の正理」にかなうとする。ついで「百王の理乱・四海の安危」を詳かにする史書と、「煙霞春興・風月秋望」を恣にする「文士の詠物」（詩＝漢詩）とが比較され、この外として、本朝の「風俗」である和歌、そして、古今に作られた「落窪・石屋・寝覚・忍泣・狭衣・扇流・住吉・水ノ浜松・末葉ノ露・天ノ葉衣・格夜姫・光源氏等」の物語に言いおよぶ。ここには、内典（仏書）＞外典（儒）＞史書＞詩＞和歌＞物語という、言語表現の価値の階層制が明確であり、漢字＞かなの差別も示されている。（9）

ここにあげられた物語は、散逸して不明なものもあるが、「作り物語」とみられ、「古人の美悪を伝ふるに非ず、先代の旧事を注するに非ず。事に依り人に依り、皆虚誕を以て宗と為し、時を立て代を立て、併せて虚無の物事を課（こころみ）る」とされ、「唯だ男女交会の道を語るのみ」といわれる。こうした物語の否定的位相にあつて、『源氏物語』は「言は内外の典籍に渉り、宗は男女の芳談を巧みて、古来物語の中、これを以て秀逸と為す」ものだという。

しかしながら、その悪徳の魅力ゆえ、作者と読者とは「輪廻の罪根を結び、悉に奈落の剣林（地獄）に墮つ」のだとし、「紫式部の亡霊、昔、人の夢に託して罪根の重きを告ぐ」という。禅定比丘尼を施主とし、作者の「幽魂」と読者の救済のために、『法華経』を書写し、巻々の端に『源氏物語』の巻名をあてたという。「愛語を翻（かえ）して種智と為す」ためであり、その根拠が、白楽天の「狂言綺語の謬（あやまち）を以て、讚仏乗の因と為し、転法輪の縁と為す」という、いわゆる狂言綺語観である。この白楽天の詩句は、『和漢朗詠集』にも採られて、『源氏物語』の時代以前から文芸の正当化の論理とされてきていた。

『今鏡』では、ある人が、『源氏物語』のために地獄に堕ちている紫式部を吊りたいと言ったのに対して、こういうのであった。

「誠に、世の中にはかくのみ申し侍れど、ことわり知りたる人の侍りしは、大和にも唐土にも、文（ふみ）作りて人の心をゆかし、暗き心を導くは常の事なり。妄語などいふべきにはあらず。わが身になき事を、あり顔にげにげにといひて、人のわ

ろきをよしと思はせなどするこそ、そらごとなどはいひて、罪得る事にはあれ。これはあらましごとなどやいふべからむ。綺語とも雑穢語などはいふとも、さまで深き罪にはあらずやあらむ」(打聞、第十「作り物語のゆくえ」)

「そらごと(虚言)」ではなく「あらましごと」(あつてほしい理想)というのは、その背景に、『源氏物語』に対する高い評価と、その伝統を意識しているからである。『今鏡』はまた、「ひと巻ふた巻の書(ふみ)にもあらず、六十帖などまで作り給へる書の、少しあだにかたほなる事もなくて、今も昔も、めでもてあそび、帝后より始めて、えならず書きもち給ひて、御宝物とし給ふなどする」ともいう。

『宝物集』が「歌よみども」が集まって源氏供養したというのは、『源氏一品経表白』と同じかどうか不明だが、『新勅撰和歌集』に「紫式部のためとて、結縁供養し侍りける所に、薬草喻品を送り侍るとて 権大納言宗家」という詞書をもつ、「法(のり)の雨に我もや濡れむむつまじきわか紫の草のゆかりに」(巻十、釈教)という歌がある。また、『藤原隆信朝臣集』にも、「母の紫式部が料に一品経せられしに陀羅尼品を取りて」とし、「夢のうちも守る誓のしるしあらば長き眠りをさませとぞ思ふ」という歌がある。隆信の母は美福門院加賀とよばれた人で、後に俊成に嫁して定家をも生んでいる。この定家の姉妹と宗家は結婚しており、これらの源氏供養が同一のものかどうかはともかく、きわめて近親の歌人関係の背景が見えてくる。

そして、『今鏡』の著者として有力視されている寂超もまた隆信の父である。『源氏物語』を歌人の必読の書として正典化したものとして有名な、建久四年(1193)の『六百番歌合』における俊成の判詞のことば、「紫式部歌よみのほどよりも、物書く筆は殊勝なり。その上花の宴の巻は、ことに艶なるものなり。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」もまた、こうした状況の中で、『無名草子』の『源氏物語』をはじめとする作り物語を中心とした王朝女性文化論へと通底しているのであった。

## 5 「世の末」と「末の世」の女文化

『無名草子』の女性論が兵衛内侍から紫式部に移行する部分に、次のような女の発言がある。

「されど、さやうのことは、我が世にある限りにて、亡きあとまでとどまりて、末の世の人見聞き伝ふることなきこそ、口惜しけれ。男も女も、管絃の方などは、その折にとりてすぐれたるためし多かれど、いづらは、末の世にその音の残りてやははべる。歌をも詠み、詩をも作りて、名をも書き置きたるこそ、百年(ももとせ)千歳(ちとせ)を経て見れども、ただ今、その主にさし向かひたる心地して、いみじくあはれなるものはあれ。されば、ただ一ことばにても、末の世にとどまるばかりのふしを書きとどむべき、とはおぼゆる。……」

語り手の女房たちにとって、「末の世」つまり後世まで名が残る文字文芸の作品こそが、あこがれの対象であった。その最高峰が『源氏物語』であり、作者の紫式部であった。これとよく似た表現が始めの方の「この世にとりて第一に捨てがたきふし」の「文(ふみ)」にもあり、「ただ今さし向かひたる心地」の臨場感と「文字」の時空を超えるすばらしさを讃えている。その前の「月」には、「あばかり濁り多かる末の世まで、いかで、かかる

光のとどまりけむと、昔の契りもかたじけなく思ひ知らることは、この月の光ばかりこそはべるを……」と、末法の世を意味する「末の世」という語がみられる。『扶桑略記』によれば永承七年（1052）から、すでに末法の世に入っていた。『無名草子』でも「阿弥陀仏」や「法華経」の部分をはじめ、「後の世」（来世）の救済を願う発言はあるが、末世ではあっても、自分たちが生きる「末の世」にあって、後世に名や文字を残す可能性に執着しているのである。そこに罪の意識はみられない。

『無名草子』には「世の末」という語もあって、「末の世」と同じような、末法の世と後世という両義で用いられている。歌論のうち俊成の『千載集』を論じる部分の中に、「何事もあいなくなりゆく世の末に、この道ばかりこそ、やまびこの跡絶えず、かきのもとの塵尽きず、とかやうけたまはりはべれ」とある。この末世にも歌の道だけは盛んだというのである。そして、女が「いまだ集など撰ぶことのなき」を嘆いた女に対して、紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書いたのだから、女も捨てがたいという発言のあとに、こうある。

「さらば、などか、世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさることにて、宮仕人としてひたおもてに出で立ち、なべて人に知らるばかりの身をもちて、このころはそれこそなど人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし。昔より、いかばかりのことかは多かめれど、あやしの腰折れ一つ詠みて、集に入ることなどに女はいとかたかめり。まして、世の末まで名をとどむばかりの言葉、言ひ出で、し出でたるたぐひは少なくこそ聞こえはべれ。いとありがたきわざなんめり」

『無名草子』は末世であることを自覚しながらも、宮仕え女房として後世に残る歌や物語を書き、あるいは、その活躍を記録されたいと願う女房たちの、王朝女性文化の歴史記録であった。それは、直接的には『今鏡』を継承しつつ、歌を核とした「打聞」そして「世継」の物語の系譜にある。その中心が『源氏物語』以降の「作り物語」であるのは、それらが紫式部をはじめとする女性作者による女文化の主流だったからである。

それにしても、狂言綺語や妄語という仏教イデオロギーによる強迫観念や、老尼の懺悔の物語を導入としながらも反転させ、現実の歴史を外部に排除して無化しようとするかのような構成は、意図的なものであろう。歴史的現実よりも物語の虚構世界の幻想の方に、より確かな現実感覚をもつ人々の歴史観は、『源氏物語』蜚の巻の物語観に通底しているともいえよう。

\*本文の引用は、『無名草子』が新編日本文学全集本、『宝物集』『徒然草』が新日本古典文学大系本、『今鏡』が日本古典全書本によるが、表記等を改変している。

注

- (1) 富倉徳次郎『無名草子評解』有精堂、新装初版、1988年。
- (2) 桑原博史、新潮日本古典集成。久保木哲夫、新編日本古典文学全集。
- (3) 『日本古典文学大事典』（岩波書店）による。
- (4) 高橋亨「王朝〈女〉文化と『無名草子』」古代文学研究、第二次10号、2001

年10月。

- (5) 加納重文「今鏡研究史」歴史物語講座第四巻『今鏡』、風間書房、1997年。
- (6) 後藤祥子「今鏡の和歌」歴史物語講座第四巻『今鏡』。
- (7) 注(4)に同じ。
- (8) 黒田彰「今鏡の説話」歴史物語講座第四巻『今鏡』。
- (9) 高橋亨『源氏物語の対位法』東京大学出版会、1982年。

## 無名草子引用関連文献年譜

### 凡例

- ・この文献年譜は、『無名草子 注釈と資料』（『無名草子』輪読会編、和泉書院、2004年）の注を基として、それを改編し改訂したものである。頁と行数を末尾に付したのは、同書による。
- ・作品名は多くは略号により、『新版 日本文学大年表』（市古貞次・久保田淳編、おうふう、2002年）などに基きほぼ成立年代順に配列した。
- ・同一作品内ではほぼ巻の順としたが、不徹底であり、その内部の順序は未整理である。
- ・語釈に関わるものも含め、それには下線を付した。

涅槃經「仏出世難 人身難得 値仏生信 是事亦難」（寿命品）、2-1,16-14

法華經、第一卷は「序品」と「方便品」からなる。「すゑつかた」は「方便品」後半の「比丘偈」。比丘は出家者、偈は仏徳や仏法を讃える四句の詩のこと。「方便品」は有名な經文が多い。8-10

法華經「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三」（方便品）、16-11

法華經「三界無安 猶如火宅 衆苦充滿 甚可畏怖」（譬喻品）。3-2

法華經「從冥入於冥 永不聞仏名」（化城喻品）、11-8

法華經「葉王今告汝 所説諸經 而於此經中 法華最第一」（法師品）。16-11

法華經「時有阿私仙 來白於大王 我有微妙法 世間所希有 若能修行者 吾當為汝悦」（提婆達多品）。6-1

法華經「無垢世界 六反震動」（提婆達多品）。53-13

法華經「爾時有羅刹女等」（陀羅尼品）。9-5

法華經、底本「シユミヤウニウヲミヤウエウフモンフツミヤウ」と振り仮名。「從冥入於冥 永不聞佛名」（化城喻品）。現存本巻一では「心を傷ましむる色」と朗詠。「行宮見月傷心色 夜聞雨猿断腸声」（白氏文集・一二「長恨歌」／和漢朗詠・下・恋 779）。あまのかるも 78-4

法華經、普賢菩薩は釈迦如来の脇侍。法華經を深く信奉する者のために白象に乗って現れ守護するという（普賢菩薩勸発品）。53-7

宝苑珠林「為善生天、為惡入淵」（一七）。93-13

文選「妾ハ巫山ノ陽、高丘ノ阻シキニ在リ、旦ニハ朝雲ト為リ暮ベニハ行雨ト為ラン」（文選・一九・高唐賦）。35-11

白氏文集「行宮見月傷心色 夜聞雨猿斷腸声」(一二「長恨歌」／和漢朗詠・下・恋 779)。

あまのかるも 78-4

白氏文集「背燭共憐深月 踏花同惜少年春」(一三「春中与廬四周諒華陽觀同居」／和漢朗詠・春・春夜 27)。50-12

白氏文集「三五夜中新月色、二千里外故人心」(一四「八月十五夜禁中独直对月憶元九」／和漢朗詠・上・秋「十五夜付月」242)。38-16

白氏文集「遺愛寺鐘欹枕聽」(一六「香炉峯下新ト山居草堂初成偶題東壁五首重題三」／和漢朗詠・下・山家 554)。42-12

白氏文集「百千万劫菩提種、八十三年功德林」(五七「贈僧五首鉢塔院如満大師」／和漢朗詠・下・仏事 589)、2-1

759以後

万葉「旅にすら紐解くものをこと繁み丸寝ぞ我がする長きこの夜を」(一〇 2309)、浜松 68-10

万葉「幼年未逕山柿之門戴歌之趣詞乎聚林」(一七 3969 題詞)、91-14

催馬楽「いかにせむ せむや 愛しの鴨鳥や 出でて行かば 親はありくとさいなべど 夜妻は定めつや さきむだちや」(何為)。『狭衣物語』と同じように韻文を踏まえた起筆は、『有明の別』『あさが露』『いはでしのぶ』『恋路ゆかしき大将』『木幡の時雨』等、後代の物語へと受け継がれた。玉藻 69-7,50-12

東大寺諷誦文稿「春の野には彩花死尸の辺に開けども毛(ミノケ) 堅ちて採らずなりぬ」(平安初期点)、97-2

822頃

日本霊異記「有智ノ得業ニシテ、並衆オヲ統ベタリ」(下・三〇)。底本「得業」に「とくこう」と振り仮名。末葉の露 80-15

894

千里集(句題和歌)「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき」(不明不暗朧朧月 72)。44-2

905

古今・仮名序「ちからをもらえずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもらはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもらはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは、うたなり」。14-4

古今「かがみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき」(仮名序)、2-11

古今「むめの花ををりて人におくりける／とものり／君ならで誰にか見せむ梅花色をもか  
をもしる人ぞしる」(一・春上 38。) 95-14

古今「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く」(四・秋上 172  
よみ人しらず)。4-6

古今「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり」(四・秋上 184 読み  
人知らず)、38-10

古今「朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ山にてよみける／素性法師／たむけ  
にはつづりの袖もきるべきにもみちにあける袖やかへさむ」(九・羈旅 421)、97-8

古今「題しらず／(歌同)」(一二・恋二 552／小町集 16)。94-11

古今「人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝ななむ」・一三・恋三 632  
なりひらの朝臣)。13-11

古今「むばたまのやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」(一三・恋三  
647 よみ人しらず)。13-13

古今「紫のひととゆゑにむさしのの草はみながらあはれぞと見る」(一七・雑上 687  
読人しらず)。寢覚 62-1

古今「いで人は事のみぞよき月草のうつし心はいることにして」(古今・一四・恋四 711)。  
101-16

古今「おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ」(一四・恋四 743  
さかゐのひとざね)。40-11

古今「色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける」(一五・恋五 797 小野小  
町)、14-5

古今「題しらず／(歌同)」(一五・恋五 797／小町集 20)。『宝物集』三も参照。94-7  
『宝物集』三も参照。古今「題しらず／(歌同)」(一五・恋五 797／小町集 20) 94-7

古今「文屋やすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりけ  
る返事によめる／(歌同)」(一八・雑下 938／小町集 38)。『古今著聞集』五——八二  
も参照。94-9

古今「みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ」(一六・哀傷 847  
僧正遍昭)。2-7

古今「世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやどとさだむる」(一八・雑下 987  
よみ人しらず)。2-16

918

玉造小町「左臂懸破篋。右手提壊笠。頸係一囊背負一袋」(序)、2-9

938

伊勢集「御屏風歌／山に花みにいそぎゆくところ／(歌結句「人もあはなむ」、正保四年  
刊歌仙家集本「ひととあらなん」)」(95)、103-3

948



公忠集「思ふらん心のうちをしらねどもなくをみるこそあはれなりけれ」(30 / 大和・一三三、第二句「心のうちは」、結句「悲しかりけれ」)。14-11

951

後撰「はる日さす藤のうらばのうらとけて君しおもはば我もたのまん」(三・春下 100 よみ人知らず)、31-1

後撰「ふちせともいさやしら浪立ちさわぐわが身ひとつはよる方もなし」(九・恋一 526 よみ人知らず)。17-8

後撰「ゆふやみは道も見えねど旧里は本こし駒にまかせてぞくる」(一三・恋五 978 よみ人知らず / 13-12

後撰「わがやどのいつならしてかならのはのならしがほにはをりにおこする」(一六・雑二 1182 俊子)。106-10

後撰「はじめてかしらおろし侍りける時、ものにかきつけ侍りける / たらちめはかかれとてしもむばたまのわがくろかみをなでずや有りけん」(一七・雑三 1240 遍昭)。浜松 66-14

後撰「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」(後撰一九・羈旅 1352 業平)。38-8

954～974

蜻蛉日記「れいの方は、案内するたより、もしはなま女などして、いはすることこそあれ」(上)。103-14

960

天徳内裏歌合「させる難にはあらぬにぞ」(一八番の判詞)、17-2

961頃

伊勢「いちはやきみやび」(一)、86-9

伊勢「人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ」(伊勢・五 / 13-11

伊勢「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」(七)。38-8

伊勢「そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」(九)。諸注、身分の低い男の名とする。詳細は不明。あさくら 76-7

伊勢「武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて(略) / 名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」(九)。87-11

伊勢「三河の国八橋といふ所にいたりぬ。(略) / から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」(九) 87-12

伊勢「武蔵鑑さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし」(一三)。16-7

伊勢「むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり」(二一)、15-11

伊勢「むかし、ものいひける女に、年ごろありて、 / いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな / といへりけれど、なにとと思はずやありけむ」(三二)。

浜松 67-4

伊勢「とほやまずりの、ながきあををぞきたりける」(五八)、「青菜といふもの」「あを(襖=アウ)などいふもの」両説あり。97-6

伊勢「ものいたく病みて、死に入りたりければ(略)いきいでたりける」(五九)、とりかへばや 71-5

伊勢「百年に一年たらぬつくも髪」(伊勢・六三/卒都婆小町)。7-16

伊勢「あにおとと友だち」(六六)。32-3

980頃

古今和歌六帖、伊勢「ちりちらず」歌(二 1302、歌結句「人もあはなん」)。拾遺抄、拾遺集、金玉集も参照 103-3

984

三宝絵「只一日一夜ノ出家ノ功德諸ノ事ノ中ニ無比」(序)、15-1

三宝絵「我が釈迦大師。凡夫に伊坐ませし時」(上)、18-8

三宝絵「念仏ハ慈覚大師ノモロコシヨリ伝テ貞観七年ヨリ始行ヘルナリ」(下・比叡不断念仏)、15-1

984頃

大和・「ゆふやみは道も見えねど旧里は本こし駒にまかせてぞくる」五六、初句「夕されば」、結句「まかせてぞゆく」。13-12

大和「かの君むことられたまひぬ」(九六)。今とりかへばや 75-4

大和「思ふらん心のうちをしらねどもなくをみるこそあはれなりけれ」(一三三、第二句「心のうちは」、結句「悲しかりけれ」。14-11

大和「さてこの男、簀子によびのぼせて」(御巫本附載)。8-13,9-3

983～986

うつほ「いさや、何かは聞こえさせん」(俊蔭)、17-8

うつほ「この侍従の仕うまつりたらむに、来し方・行く先あるまじきことをせさせむ」(吹上下)、15-15

うつほ「我をいひまさぐる公卿たち」(菊宴)。29-16

うつほ「物奉る人を片さりて奉れ」(菊宴)、92-1

うつほ「仕うまつる受領などもまめやかなる物・菓物など奉れば、時の所のやうなり」(国譲)、112-5

うつほ「昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり」(蔵開中)、88-11

うつほ「布の襖、綿厚く入れて」(うつほ・国譲下)、「青菜といふもの」「あを(襖=アウ)などいふもの」両説あり。97-6

985

往生要集「如意の妙香・塗香・抹香、無量の香、芬馥として遍く世界に満つ」(二一四)、5-6

往生要集「滅罪生善共生極楽」(大文四)、9-14

986

檜垣姫集、清原元輔(清少納言の父) 986が肥後守時代に、九州の伝承的な遊女である  
檜垣姫と交渉があったという。96-5

989頃

落窪「二人の婿の装束、いささかなるひまなくかきあひ縫はせ給へば」(一)。89-13

落窪「帯刀笑ふ笑ふ、「かかる雨に、かくておはしましたらば」(一)。34-4

落窪「思へば、いたくかたひく」(一)、「かたひかし」は「かたひく」の形容詞化した語  
とも。25-16,52-4

落窪「中将面うち赤めて、「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも  
ほしからず」(二)。23-10

落窪「ましてほの聞く若き人は、死にかへり笑ふ」(二) 24-4、

落窪「よそ人も、かく敵のやうなる人こそありけれ」(落窪・二)、岩うつ波 77-10

落窪「越前守、太夫など、只今の時の所なれば」(三)。112-5

落窪「かくいひたちてとどまりたらむ、いとをこならむ」(三)。113-11

991

能宣集「あづまへまかる人に、あふぎつかはすとて／わかれちにへだつるくものためにこ  
そあふぎのかぜはやらまほしけれ」(一 39)、露のやどり 81-8

997

拾遺抄、伊勢「ちりちらず」歌「齋院の屏風に春山道をゆく人のかた有る所に／(歌同)」  
(一・春 30)。拾遺集、古今和歌六帖、金玉集も参照。103-3

1001頃

枕草子「女房、桜の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れて、藤、山吹など、色々このましうて、  
あまた小半部の御簾よりも押し出でたるほど」(二一)、23-10

枕「いみじう見え聞えて、をかしき筋など立てたる事はなう、ただありなるやうなるを」  
(四七)、末葉の露 80-5

枕「下なるをも呼びのぼせ」(四九)、8-13

枕「妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠に貫き、念仏して往生極楽の  
縁とすればよ」(六四)。15-1

枕「歌よむと言はれし末々は、すこし人よりまさりて(略)／元輔が後といはるる君しも  
や今宵の歌にはづれてはをる」(枕・九五／能因本枕・一〇四)。96-10

枕「亡き人のためにもいとほしうはべる」とまめやかに啓すれば、笑はせたまひて、「さ  
らば、ただ心にまかせ。われらはよめとも言はじ」とのたまはすれば、「いと心やすく  
なりはべりぬ。今は歌のこと思ひかけじ」など言ひてあるころ」(枕・九五／能因本枕  
・一〇四)。96-12

枕「男も女も、け近き人思ひ、方ひき」(一二九)。25-16,52-4 枕「つれづれなぐさめぬべきわざ」評論(一三四、源氏・蜚)。19-5

枕「つれづれなぐさむもの」(一三四)。105-10,20-5

枕「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にみたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。右中将おはして物語したまふ。「今日、宮にまゐりたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束、裳、唐衣をりにあひ、たゆまで候ふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑、萩などをかしうてみ並みたりつるかな。御前の草のいとしげきを、「などか。かきはらはせてこそ」と言ひつれば、「ことさら露置かせて御覧ずとて」と、宰相の君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな」(一三七)。108-3

枕「法師などの(略)経たふとくよみ、みめ清げなるにつけても」(一七九)、24-7

枕「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ」(一八九)。20-4,31-13,45,15

枕「経は 法華経さらなり」(一九六)。16-6

枕「卯の花の垣根近うおぼえて、郭公も陰に隠れぬべくぞ見ゆるかし」(二〇六)。4-15

枕「かたさり山こそ、誰に所をきけるかとをかしけれ」(前田本・一四)、8-14

枕「むかしおぼえてことなる事なき歌よみしておこせたるもののあり」(能因本・二二)。

88-11

枕「めづらしと言ふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものには。はるかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならむと思ふに、文を見れば、ただいまさし向ひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし。わが思ふ事を書きやりつれば、あしこまでも行き着かざるらめど、心ゆく心ちこそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、暮れふたがる心ちせまし。よろづの事思ひ思ひて、その人のもとへ細々と書きておきつれば、おぼつかなきをもなぐさむ心ちするに、まして返事見つれば、命を延ぶべかんめる、げにことわりにや」(能因本・二二一)。三卷本『枕草子』には見えない。12-3

枕「はるかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならむと思ふに、文を見れば、ただいまさし向ひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし」(能因本・二二一)。

105-6,12-6

枕「この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを、あいなう人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう隠しおきたりと思ひしを、心よりほかにこそ洩り出でにけれ」(跋)。92-8

枕、不明。「乳母子のゆかりありて、阿波の国に行きて、あやしき萱屋に住みける。つづりといふ物をぼうしにして、あをなといふ物乾しに、外に出でて帰るとて、「昔の直衣姿こそ思ひ出でらるれ」と言ひけむこそ、なほ古き心の残れりけるにやと、あはれにおぼゆれ。されば、人の終りの、思ふやうなる事、若くていみじきにもよらざりけるとこそおぼゆれ」(能因本枕・奥書)。清少納言零落説話(古事談・一五五、一五七)も参照。97-5

1005～1007

拾遺集、伊勢「ちりちらず」歌（一・春 49、歌結句「人もあはなん」）。拾遺抄、古今和歌六帖、金玉集も参照 103-3

拾遺「源重之が母の近江のこふに侍りけるに、むまごのあづまよりよるのぼりていそぐ事侍りて、えこのたびあはでのぼりぬることといひて侍りければ、おばの女のよみ侍りける／（歌結句「あらぬなるべし」）」（九・雑下・545）。これに従えば源重之の母の歌となる。『重之集』60も参照。100-7

拾遺「山寺の入あひのかねのこゑごとにけふもくれぬときくぞかなしき」（二〇・哀傷 1329よみ人しらず）。42-12

拾遺「法華經をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし」（二〇・哀傷 1346／袋草子・上 1129 大僧正行基）。6-1

拾遺「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照せ山のはの月」（拾遺・二〇・哀傷 1342和泉式部）。11-8,100-11

拾遺「性空上人のもとに、よみてつかはしける／雅致女式部／（歌同）」（二〇・哀傷 1342）。

拾遺「ひとたびも南無阿弥陀仏といふ人の蓮の花にのぼらぬはなし」（二〇・哀傷 1344空也上人）、15-2

1008頃

源氏「いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや」（桐壺）、19-11

源氏「たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく／ゑにかきたるやうくゑひはいみじきゑしといへどもふでかぎりありければいとにほひすくなし。おばなの風になびきたるよりもなよび、なでしこのつゆにぬれたるよりもなつかしかりしかたちけはひをおもほしいづるに、はなとりのいろにもねにもよそふべきかたぞなき。

（略）おもほしやりつゝともし火をかゝげつくしておはしますに」（別本源氏・桐壺）。

『源氏物語』諸本では、「おばな」―ナシ（青表紙本）、「女郎花」（河内本）、「尾花」（別本）34-7

源氏「後の宮の姫宮こそ（略）ありがたき御容貌人になん」（桐壺）。浜松 65-8

源氏「宮腹の中將は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心やすく馴れ馴れしくふるまひたり」（帚木）。28-11

源氏「この品々をわきまへ定めたまふ」（源氏・帚木）、19-14,28-12,70-14

源氏「この男いたくすずろきて（松浦家旧蔵本（青表紙本）「そゝろきて」）、門近き廊の簀子だつものに尻かけて」（帚木）、岩うつ波 77-10

源氏「門近き廊の簀子だつものに尻かけて」（帚木）。42-15

源氏「これをはじめの難とすべし」（帚木）。17-2,63-7

源氏「耳立たし」の初出例か。「ことに耳立たずかし」（帚木）。86-13,68-16

源氏「六条わたりの御忍び歩きのころ、（略）霧のいと深き朝、（略）中將の君、御供に参る。（略）見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。（略）「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔／いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、（略）朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる／と公事にぞ聞こえなす」（夕顔）。43-6

源氏、夕顔巻の死の情景では「山彦」とあり、「こたま」という語なし。49-8

源氏「死にかへり思ふ心は知りたまへりや」(夕顔)。24-4,63-7

源氏「うちとけで向かひゐたる人は、え疎みはつまじきさまもしたりしかな」(夕顔)、23-4

源氏「ありし雨夜の品定」(源氏・夕顔)。19-14,28-12,70-14

源氏「そらうちくもりて風ひやゝかなるにいたうながめ給て／みし人のけぶりをくもとながむればゆふべのそらもむつまじきかな／(略)まさにながき夜とうちずんじ給へり」(別本源氏・夕顔)。34-15

源氏「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しき」(源氏・若紫)、11-12『無名草子』に頻出する語。

源氏「いと忍びて通ひたまふ所の(略)御供(大島本「すいしん」、河内本「御すいしん」)に声ある人してうたはせたまふ。／(「あさぼらけ」歌第四句「行き過ぎがたき」)／と二返りばかりうたひたるに、よしある下仕を出だして／(「たちどまり」歌同)」(若紫)。43-15

源氏「御歌も、これよりのは、ことわり聞こえてしたたかにこそあれ」(末摘花)、あまのかるも 77-15

源氏「宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける」(紅葉賀)。15-16

源氏「中将、いかで我と知られきこえじと思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れる気色にもてなして、太刀を引き抜けば」(紅葉賀)。28-15

源氏「宮は、いかなるにつけても、むねのひまなく、やすからず、物をおもほす」狭衣(紅葉賀)。54-16

源氏「おぼろ月夜にしく物ぞなき」(花宴)は御物本(別本)のみ「しく物」で、他は「似るもの」。44-2

源氏、夕顔と比較して、葵上の死にかなりの分量を費やし、その死が描かれる葵巻を「すべてあはれなるまき」と評価。35-4,36-10

源氏「にぶめる御ぞたてまつるもゆめの心地して、我さきだゝましかばふかくぞゝめ給はましとおぼす／かぎりあればうすゞみごろもあさけれどなみだぞ袖をふちとなしける」(別本源氏別本・葵)。34-5

源氏「風あらゝかにふきしぐれさとしたるほど、なみだもあらそふ心地して、あめとやなり雲とやなりにけんいまはしらず、とうちひとりごちて、(略)中将ものいとあはれなるまみにうちながめ給へり／あめとなりしぐるゝそらのうき雲をいづれのかたとわきてながめん／ゆくゑなしやとひとり事のやうなるを／見し人のあめとなりにし雲井さへいとゞしぐれにかきくらすかな」(別本源氏・葵)。35-11

源氏「とりわきてらうたくし給しちひさきわらはのをやどもはなくいと心ほそげに思へるも心ぐるしう事はりにみ給て、あてきはいまは我こそはおもふべき人なめれとの給へば、こひていみじうなく。ほどなきあこめ人よりことにくろうそめて」(別本源氏・葵)。36-1  
「てならひすて給へるをとりてめをしぼりつゝ見給を(略)をの／＼あからさまにまかでゝまいらんといふもあればかたみにわかれをしんほど、をのがじしあはれなる事どもおほかり」(別本源氏・葵)。36-7

源氏「はかなき御骸骨ばかりを御なごりにて」(葵)、95-4

源氏「あかつきのわかれはいつもつゆけきをこはよにしらぬ秋のそらかな」賢木巻の光源氏歌。44-16

源氏「松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを」(賢木)。河内本と本文一致。45-2

源氏「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ」(賢木)、45-3

源氏「されくつがへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆかし」(末摘花)、15-9

源氏「かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には」(末摘花)。23-4

源氏「もろともに大内山は出でつれど入かた見せぬいさよひの月」(末摘花)。諸本異同なし。大内山の大臣最初の歌。28-13

源氏「塞ぎもてゆくままに、難き韻の文字どもいと多くて、(略)御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふいとうつくし」(賢木)。32-3

源氏賢木巻の一場面。朧月夜の尚侍、源氏を帳のうちに籠めて、父大殿にみつけれたる所(賢木) 49-9

源氏「をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に」(花散里)、4-3

源氏「けぶりは」一底本「けぶりは」の「は」に「も」を傍記、彰本「けぶりも」、群本「けぶりに」。『源氏物語』諸本は「けぶりも」(肖柏本(青表紙本)のみ「も」に見せ消ちして「に」)。(須磨) 36-13

源氏「御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば」(須磨)。36-16

源氏「かげのやうにやゝせ侍」一彰本「かけのやせ侍」。「この影のやうにや瘦せてはべる」(須磨)。37-1

源氏「わかるとも」は『源氏物語』諸本では「別れても」、「なぐさみなまし」は別本以外は「なくさみてまし」。(須磨) 37-7

源氏「いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて(略)／(歌同)」(須磨)。38-10

源氏「月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる」(須磨)。38-15

源氏「南殿の桜は盛りになりぬらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ」(須磨)。39-2

源氏『源氏物語』諸本では「うらやましくも」。(須磨) 38-8

源氏「宰相さらに立ち出でん心地せで(略)かえりみのみしつ出でたまふを、見送リたまふ気色、いとなかなかなり。(略)しめやかにもあらで帰リたまひぬるなごり、いとど悲しうながめ暮らしたまふ」(須磨) 39-8

源氏「夜もすがらまどろまず文作り明かしたまふ」(須磨) 39-9

源氏「ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲居か」(須磨)。38-8

源氏「さりや。いづれに落つるにか」(須磨)。22-8

源氏「いかでかかるついでに、この君に奉らむ」(須磨)、29-10

源氏「いちはやき世のいと恐ろしうはべるなり」(須磨)。86-9

源氏、紫上を須磨に同行せず、明石君をもうけたこと。→評論(源氏解・おもはずなること、源氏四十八ものたとへ・恋しき事)。47-15

源氏「帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御氣色いとあしうて睨み  
きこえさせたまふを」(明石)。29-16

源氏「心細きひとり寝の慰めにも」(明石)。29-10

源氏「入道、琵琶の法師になりて」(明石)。29-10

源氏「ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る  
人もなし」(明石)。15-15

源氏「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」(明石、諸本異同  
なし)。「浦づたひ」は明石巻の異名(拾芥抄・源氏物語目録)。20-8

源氏、明石巻の光源氏歌。20-10

源氏「たのみけるかな」は『源氏物語』諸本では「思ひけるかな」(明石)。39-14

源氏「あやしう昔より箏は女なん弾きとる物なりける」(明石)。103-12

源氏「琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人いにしへも難うはべりしを」(源氏・明石)。  
103-16

源氏「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかに独りごちながめたまふを(略)上包ばかり  
を見せたてまつりたまふ」(澤標)。→評論(源氏解・うらめしきこと)。48-1

源氏「かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方の物をも聞え合はせ人に思ひ聞えつるを」  
(澤標)。106-10

源氏「見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。(略)惟光も、「さらに  
え分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ入らせたまふ  
べき」と聞こゆれば／(歌同)／と独りごちてなほ下りたまへば御さきの露を馬の鞭し  
て払ひつつ入れたてまつる」(蓬生)、45-6

源氏「惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払は  
せてなむ入らせたまふべき」と聞こゆれば、「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き  
蓬のもとの心を」と独りごちて」(蓬生)。4-13

源氏「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を」(蓬生)。24-5

源氏「人の御心の中もたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどをいかが思す」  
(蓬生)。24-6

源氏「大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどをかたじけなく思ひたまへられしかばなむ」  
(蓬生)。24-9

源氏「遣水かきはらひ、前栽のもとだち涼しうしなしなどして」(蓬生)。玉藻 69-13

源氏「才学といふもの、世にいと重くするものなれば」(絵合)、18-5

源氏「御むすめにきしろふさまにてさぶらひたまふを」(絵合)。29-4

源氏「かの須磨、明石の二巻」、「左はなほ数ひとつある果てに、須磨の巻出で来たるに」  
(絵合)。29-5,48-3

源氏絵合巻の紫の上歌「ひとりゐてながめしよりはあまのすむかたをかきてぞみるべかり  
ける」。第二句「ながめしよりは」とある本は、池田本・肖柏本・三条西家本(青表紙  
本)と麦生本(別本)。48-5

源氏「おぼつかなき浦々磯の隠れなく描きあらはしたまへり」(絵合)。75-13,96-8

源氏「世の人のとあるかかるけぢめも聞きつめたまひて」(朝顔)。6-15

源氏「(頭中将ハ)人柄いとすくよかに、きらきらしくて、心もちみなども、かしこくも



- のしたまふ」(少女)、22-2
- 源氏「めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」(少女)。46-13
- 源氏「侍従の君」(少女) 諸本は「小侍従(の君)」。48-14
- 源氏「(花散里ハ) 容貌のまほならずもおはしけるかな」(少女)。23-10
- 源氏「いとさくじりおよすげたる人立ちまじりておのづからけ近きも、あいなきほどになりたればなん」(少女)。「まめ人の大将」に同じ。30-11,23-12
- 源氏「その御乳母の夫少弐になりて行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ筑紫へは行きける」(玉鬘)。25-13
- 源氏「遙かなる世界にて、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを」(玉鬘)。12-5
- 源氏、初音巻の一場面。正月一日、明石御方のもとに泊まったこと「新しき年の御騒がれもやとつつましけれど、こなたにとまりたまひぬ」(初音)。48-10
- 源氏「竹河謡ひて、かよれる姿、なつかしき声々の絵にもかきとどめ難からんこそ口惜しけれ」(初音)、92-12
- 源氏「はやうより隔つることなう、あまたの親王たちの御中に、この君をなん、かたみにとり分きて思ひしに」(胡蝶)。30-6
- 源氏「かしはぎのゑもんのかみ」の別称。「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」(胡蝶)、「この岩漏る中将も、大臣の御ゆるしを見てこそかたよりにほの聞きて」(同)。31-7
- 源氏「つれづれなれば、御方々絵、物語などのすさびにて明かし暮らしたまふ」(螢)、16-7
- 源氏「つれづれなぐさめぬべきわざ」評論(螢、枕・一三四)。19-5
- 源氏「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」(螢)。26-2
- 源氏「こころの中にはまことはいと少なからむを、(略)このいつはりごとどもの中に、(略)そらごとをよくし馴れたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど」(螢)。87-2  
→評論(源氏・螢)。
- 源氏「ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は」(螢)。25-11
- 源氏「(夕霧ハ) おほかたの心もちゐなども、いともものしく、まめやかにしたまふ」(螢)、22-2
- 源氏「見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」(源氏・野分)。31-12,21-4,45-15
- 源氏「かぜさはぎむらくもまよふゆふべにも」野分巻の夕霧歌。46-5
- 源氏「胸つぶつと鳴る心地するもうたてあれば、外ざまに見やりつ。(略)中將ながめ入りて、とみにもおどろくまじき気色にてゐたまへるを」(野分)。31-13
- 源氏「をかしき童、またいと馴れたる御隨身などに、うちささめきて取らするを」(野分)。46-7
- 源氏「女は、実の親の御あたりにも、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。まして、なぞこの大臣の、をりをり思ひ放たず恨み言はしたまふ」とつぶやくも、憎しと聞きたまふ」(真木柱)。25-7
- 源氏「こころ年経たまへる御住み処の、いかでか思ひどころなくはあらむ」(真木柱)。26-7
- 源氏「かかりどころ」の誤写か、歌論語「かかり」に関連するか。「見る前にだになごり

なき心は、懸り所ありてももてないたまはじ」(真木柱)。88-12

源氏「かのわたりのこと思ひ絶えにたらば、右大臣、中務宮などの気色ばみ言はせたまふめるを、いづくも思ひ定められよ」とのたまへど、ものも聞こえたまはず、かしこまりたるさまにてさぶらひたまふ」(梅枝)。31-1

源氏「年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを」(藤裏葉)。15-11

源氏「かの大臣も、なごりなく思し弱りて」(藤裏葉)。30-12

源氏「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御気色を賜はりて、頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ」(藤裏葉)。31-1

源氏「例の弁少将、声いとなつかしくて、葦垣をうたふ」(藤裏葉)。32-4

源氏、光源氏が准太政天皇になったこと、狭衣(藤裏葉)。53-14

源氏「院の帝は、月の中に御寺に移ろひたまひぬ」(若菜上)。44-9

若菜上巻の光源氏歌。44-11

源氏「二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ」(若菜上)。29-13

源氏「大将は、(略)いでや、こなたの御ありさまのさはあるまじかめるものを(略)と思ひおとさる」(若菜上)。31-11

源氏「目も及ばぬ心地するを」(若菜上)。89-16

源氏「いづかたにも皆こなたの御けはひには、かたさり憚るさまにて」(若菜上)、92-1

源氏「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは、憎からずかし。(略)／夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞く起きて行くらん」(若菜下)。大島本(河内本)と阿里莫本(別本)は「月まちてもと」。26-16

源氏「もろかづら落葉をなににひろひけむ名は睦ましきかざしなれども」(若菜下)31-4,49-5

源氏、若菜下巻の柏木の女三宮との密通場面。49-11,27-4,29-14

源氏「浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを(略)紛るべき方なくその人の手なりけりと見たまひつ」(若菜下)。29-14,27-4,49-11

源氏「参りたまふべきよしありけるを(略)かく重ねてのたまへれば、苦しと思ふ思ふ参りぬ」(若菜下)。29-15

源氏「この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく」「空に目につきたるやうにおぼえしを」「いかでかは目をも見あはせたてまつらむ」「御目とまれど、さりげなく(略)うち見やりたまふに、(略)さし分きて空酔ひをしつつかくのたまふ、戯れのやうなれど、いどと胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはすを御覧じ咎めて」(若菜下)、29-16

源氏「(柏木)人よりけにまめだち屈じて、まことに心地もいとなやましなければ」(若菜下)。31-16

源氏「いみじうわななけば、思ふこともみな書きさして」(柏木)。40-2

源氏「立ちそひて消えやしなましようきことを思ひみだる煙くらべに／後るべうやは」(源氏・柏木)。40-8

源氏「空を仰ぎてながめたまふ。夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御疊紙に、／(歌同)」(柏木)、40-11

源氏「さまざまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも」(柏木)。87-9

源氏、光源氏の長男夕霧。「まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将」(夕霧)、23-12  
 源氏「まめ人の心変るはなごりなくなむと聞きしはまことなりけり」(夕霧)。31-5  
 源氏夕霧巻の一条御息所歌「をみなへししをるるのべを」(夕霧)。49-1  
 源氏「単衣の御衣を御髪籠めひきくくみて」(夕霧)、今とりかへばや 75-1  
 源氏「ただありのあはつけ人だに寝ざめしぬべき空のけしき」(夕霧)。末葉の露 80-5,76-12  
 源氏「御几帳の帷子をもものたまふ紛れに引き上げて見たまへば」(御法)。41-2  
 源氏「風野分だちて吹く夕暮に、昔のこと思し出でて、ほのかに見たてまつりしものと恋しくおぼえたまふに(略)／(歌同)」(御法)。41-3  
 源氏「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ」(御法)、31-12  
 源氏「この思ひすこしなめに、忘れさせたまへ」と、阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ」(源氏・御法)、15-1  
 源氏「死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ゆるも、わりなきことなりや」(御法)。とりかへばや 71-5  
 源氏「ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを(略)過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを」(源氏・幻)、12-11  
 源氏「疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ」(幻)。42-2  
 源氏「みな焼かせたまひつ」(幻)。42-2  
 源氏「かきつめてみるもかなしきもしほ草おなじ雲るのけぶりともなれ」(幻) 別本と本文一致。42-3  
 源氏「曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも(河内本と別本の一部「も」なし)積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる」(幻)。41-7  
 源氏「うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひの外になほぞほどふる」(源氏・幻)。御物本(別本)のみ本文一致。41-10  
 源氏「御しつらひなども、いとおろそかに事そぎて、さびしくもの心細げにしめやかなれば／(歌同)」(幻)。41-13  
 源氏「世人は、匂ふ兵部卿、薫る中将と聞きにくく言ひつづけて」(匂宮)。33-11  
 源氏「紫の上の御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は二条院におはします」(匂宮)。31-12  
 源氏「丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける」(匂宮)。49-5  
 源氏「泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守りになるべかりける」(源氏・橋姫)。宇治八宮の中君説と、現存しない巢守巻の源三位の中君説とがある。33-7,21-12  
 源氏、宇治八宮の中君。「すもりのなかの君」(三頁七行)は別人か。21-12,26-12,47-3  
 源氏、宇治八宮の大君。「心憂かりし後は、ありしやうに姉宮をも思ひきこえたまはず」(総角)。彰本「宮」に従い、「八宮」とする説あり。21-12  
 源氏「中の宮は、思ふ方異なめりしかば、さりともと思ひながら、心憂かりし後は、ありしやうに姉宮をも思ひきこえたまはず」(源氏・総角)。26-12  
 源氏「名香のいとかうばしく匂ひて」(総角)、5-6  
 源氏「男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼めきこ

えたまへば、思ひよらざりしこととは思ひながら、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしさよりはとおぼえたまふ」(同・総角)。33-7

源氏「限りあれば、御衣の色の変らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かへたるをほの見たまふも／くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり」(総角)。42-8

源氏「簾捲き上げて見たまへば、向ひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、(略) わづかに生き出でてものしたまはましかば、もろともに聞こえましと思ひつづくるぞ、胸よりあまる心地する」(総角)。42-12

源氏「在五が物語」(総角)、87-8

源氏「御さまのをかしきにすかされたてまつりて」(早蕨)、岩うつ波 76-13

源氏「うちの中宮、かほる大將を、はじめて」(無名)で、「いたづらに」歌は中君のではなく、薫への最初の歌でもない。(宿木) 47-3

源氏「いたづらに」宿木巻の薫歌。47-4

源氏「また人も」一彰本「また人に」。『源氏物語』諸本も彰本と一致。宿木巻の匂宮歌。47-8

源氏「阿弥陀仏より外には、見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」(宿木)、15-1

源氏「みめもなほよしよししくきよげにぞある」(宿木)、24-7

源氏「みなれぬる中の衣とたのみしをかばかりにてやかけはなれなん」(宿木)、26-14

源氏「みなれぬるなかのころもとたのめしをかばかりにてやかけはなれなむ」宿木巻の中君歌。47-11

源氏「按察大納言は、(略)」「(略) なぞ時の帝のことごとしきまで婿かしづきたまふべき。

またあらじかし (略)」など、いみじく譏りつぶやき申したまひけれど」(宿木)。32-6

源氏「別れを悲しびて、骨をつつみてあまたの年頸にかけてはべりける人も」(宿木)。95-4

源氏「遣水のほとりなる岩にゐたまひて、とみにも立たれず／(歌同)」(東屋)。42-15

源氏「経などを讀みて、功德のすぐれたることあめる」(東屋)。15-1

源氏「橘の小島のは色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ」(浮舟)。21-11「こじま」は浮舟巻を指すか。「こしまき」(来し巻)の誤写とも。21-11

源氏「上も下も、かかる筋のことは、思し乱るるはいとあしきわざなり」(浮舟)。15-13

源氏「大將殿を、いときよげに、またかかる人あらむやと見しかど、こまやかににほひ、きよらなることはこよなくおはしけりと見る」(浮舟)、33-7

源氏「御文は、もとのやうにして、「所違へのやうに見えはべればなむ。(略)」と書き添へて奉りつ」(浮舟)。28-2

源氏、浮舟巻の浮舟失踪場面。49-12

源氏「かの夕霧の御息所のおはせし山里」(手習)。落葉宮の母一条御息所のこと。48-16

源氏、手習巻の横川僧都の母尼一行に浮舟が助けられた場面。49-13

源氏「ただ硯に向かひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことにて書きつけたまふ」(手習)、宇治八の宮の三女浮舟。「うきふねのきみ」(337)とも。27-10

源氏「門田の稻刈るとて、所につけたる物まねびしつ、若き女どもは歌うたひ興じあへり」(手習)、93-13

『源氏物語』の薫のこと。浜松 63-14,32-15

#### 1009～1011

金玉集、伊勢「ちりちらず」歌（春 19、歌結句「人もあはなん」）。拾遺抄、拾遺集、古今和歌六帖も参照。103-3

#### 1010頃

紫日記「ただこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをばなぐさめつつ」、10-2

紫日記「ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ」、15-1

紫日記「世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず」。17-14

紫日記「一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり」、うきなみ 86-1

紫日記「恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず」。88-11

紫日記「ひたおもてにさしむかひ」。92-14

紫日記「ありがたくぞ侍るらん。こゝろざま、ふるまひなどぞ、いと心にくからず、かばかりの」一底本・群本なし。彰本により補う。「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり」。99-2

紫日記、和泉式部評。100-14,99-8 参照。

紫日記「丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌よみとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つきにはべれ」、102-6

紫日記「しかじかさへもどかれじと、恥づかしきにはあらねど、むづかしと思ひて、ほけしれたる人にいとどなりはててはべれば、「かうは推しはからざりき」（略）一といふ文字をだに書きわたしはべらず」。106-4

#### 1012頃

和漢朗詠「背燭共憐深月 踏花同惜少年春」（春・春夜 27、白氏文集一三「春中与廬四周諒華陽觀同居」）。50-12

和漢朗詠「三五夜中新月色、二千里外故人心」（上・秋「十五夜付月」242）。38-16

和漢朗詠「遺愛寺鐘欹枕聴」（白氏文集・一六「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首重題三」／下・山家 554）。42-12

和漢朗詠「百千万劫菩提種、八十三年功德林」（白氏文集五七「贈僧五首鉢塔院如滿大師」／和漢朗詠・下・仏事 589）、2-1

和漢朗詠「行宮見月傷心色 夜聞雨猿斷腸声」（下・恋 779、白氏文集一二「長恨歌」）。あまのかるも 78-4

#### 1021

小右記、妍子女房一品經供養、治安元年（-02-）九月一〇日条、栄花（一六・もとのしづく）、左經記も参照。109-14

1021

左経記、妍子女房一品経供養、治安元年八月二九日条、栄花（一六・もとのしづく）、小  
右記も参照。109-14

1025

後拾遺「公葉集」一彰本「金玉集」。「今もいにしへもすぐれたる中にすぐれたる歌をか  
き出して、こがねの玉の集となむ名づけたる」（序）、89-11

後拾遺「一条院の御時皇后宮かくれたまひてのち帳のかたびらのひもにむすびつけられた  
るふみをみつけたりければ、うちにもご覧させよとおぼしがほに、うたみつかきつけ  
られたりけるなかに／（「よもすがら」歌）／（「しる人も」歌、結句「いそぎたつか  
な）」（一〇・哀傷 536・537）。『栄花物語』七・とりべ野、『今昔物語集』二四一四一  
も参照（いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆）。「よもすがら」歌については、『十  
訓抄』一一一一、『古来風体抄』上、『百人秀歌』、『発心集』六も参照。107-7

後拾遺「小式部内侍なくなりてむまごどものはべりけるを見てよみはべりける／和泉式部  
／（歌初句「とどめおきて）」（一〇・哀傷 568）。『宝物集』一、『和泉式部集』476（歌  
初句「とどめおきて」）、『栄花物語』二七・衣のたま、『古本説話集』上、『世継物語』  
も参照。100-3

後拾遺「のべまでに」歌「長保二年（-000）十二月に皇后宮うせさせたまひてさうそうの  
よ、ゆきのふりてはべりければつかはしける／一条院御製／（歌同）」（一〇・哀傷 543）、  
107-14

後拾遺「高階成順石山にこもりてひさしうおとしはべらざりければよめる／伊勢大輔／み  
るめこそあふみのうみにかたからめふきだにかよへしがのうら風」（一三・恋三 717）。  
『古本説話集』上、『世継物語』も参照。102-8

後拾遺「ここちれいならずはべりけるころ人のもとにつかはしける／和泉式部／あらざら  
んこのよのほかのおもひいでにいまひとたびのあふこともがな」（一三・恋三 763）。お  
だへのぬま 85-2

後拾遺「中納言定頼がもとにつかはしける／大和宣旨／（歌第二句「しのびもあへぬ」）  
（一四・恋 809）。『古本説話集』上、『世継物語』も参照。

後拾遺「後一条院うせさせたまひて、よのなかはかなくおぼえければ法師になりて、よか  
はにこもりゐてはべりけるころ上東門院よりとはせ給ければ／前中納言顕基／よをすて  
てやどをいでにしみなれどもなほこひしきはむかしなりけり／御かへし／上東門院／と  
きのまもこひしきことのなぐさまばよはふたたびもそむかざらまし」（一七・雑三 1029、  
1030）、109-7

後拾遺「をとこにわすられて侍けるころきぶねにまゐりてみたらしがはにほたるのとび侍  
けるをみてよめる／和泉式部／（「物おもへば歌」）／御かへし／（「おく山に」歌）」（二  
〇・雑六 1162・1163）。『俊頼髓脳』、『袋草紙』上、『古本説話集』上、『世継物語』、『古  
今著聞集』五一―七四、『十訓抄』一〇―一三、『沙石集』五末などに載る有名な説話  
（歌）。

1025

左経記、皇太后妍子大饗、万寿二年正月二二日～二四日条も参照。109-14

1026以後（正編）

栄花物語「あはれにいかにかにと殿の内思しまどふに、四月十日、入道殿（道隆）うせさせたまひぬ。あないみじと、世ののしりたり」（四・みはてぬゆめ）。97-2

栄花「太上天皇（花山院）を殺したてまつらむとしたる罪一つ、帝の御母后（詮子）を呪はせたまつりたる罪一つ、公よりほかの人いまだおこなはざる大元法を、私に隠しておこなはせたまへる罪により、内大臣（伊周）を筑紫の帥になして流し遣はす。また中納言（隆家）をば出雲権守になして流し遣はす」（五・浦々の別）。97-3

栄花「月の御事」（六・かがやく藤壺）。とりかへばや71-2

栄花「滅罪生善のためにとて、護摩をぞおこなはせたまふ」（七・とりべ野）。9-14 現世の罪障を消し後世の善行を願う、経文を読み終えるときのことば。

栄花物語「よもすがら」歌、「しる人も」歌（七・とりべ野）。後拾遺（一〇・哀傷 536・537）、『今昔物語集』二四一四一も参照（いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆）。

「よもすがら」歌については、『十訓抄』———、『古来風体抄』上、『百人秀歌』、『発心集』六も参照。107-7

栄花「のべまでに」歌「今宵しも雪いみじう降りて、おはしますべき屋もみな降り埋みたり。（略）内には、今宵ぞかしと思しめしやりて、よもすがら御殿籠らず思ほし明かせたまひて、御袖の氷もところせく思しめされて、世の常の御有様ならば、霞まん野辺もながめさせたまふべきを、いかにせんとのみ思しめされて／（歌第二句「心ばかりは」、第四句「わが行幸とも）」／などぞ思しめし明かしける」（七・とりべ野）、107-14

栄花「兵部命婦の養ひ宮をはなちたてまつりて」（八・はつはな）、23-15

栄花「あふこともいまはなきねの夢ならでいつかは君を又はみるべき」・一〇・ひかげのかづら、初句「逢ふことを」。13-14,109-4

栄花「宮の御前かへすがへす思し嘆かせたまひて、大殿籠りたる暁方の夢に、院のほのかに見えさせたまひければ／（歌初句「逢ふことを」（「を」は富岡本「も」、陽明文庫本は右傍に「も」）」（一〇・ひかげのかづら）、109-4

栄花「皇太后宮（妍子）の女房たち、端にうちながめて、おのがどちぞうち語らふ。「かくはかなき世に罪を作りて過ぐすはいみじきわざかな。いざたまへ、君達もろともに契りて、経一品づつ書いて申し上げん」と言ひて、（略）おのおのいかがせましと、聞きにくきまで思ひ騒ぐ。（略）ただ今はかやうの功德とは見えで、おのおの挑みわざのやうに見えて、なかなか罪作りに見えたり」（一六・もとのしづく）。『小右記』治安元年（-02-）九月一〇日条、『左経記』治安元年八月二九日条も参照。109-14

栄花「いと書きつづけがたげなることどもなれば、ただ片端ばかりをだにとてある、ものまねびなるべし」（二〇・御賀）。93-13,72-13

栄花「小松の僧都の靈の（略）いと恐ろしかりしかど、それをよろづにいひのまゝにせさせ給しほどに」（栄花・二一・後くみの大将）。61-8

栄花,万寿二年（-025）正月の皇太后妍子の大饗のこと。「事どもととのほりぬるほどに、みな例の作法にて、御前に方に西の対まで見わたしたまふに、さらにもいはず、衣の褻

重なりて打ち出だしたるは、色々の錦を枕冊子に作りて、うち置きたらんやうなり(略)  
(頼通)「今日のこゝと、すべていとことのほかにけしからずせさせたまへり」(二四・わかばえ)、「この時は制ありて、衣の数は五つ」(同・三四・暮まつほし)、「制あれば数五つなり」(同・三九・布引の滝)。109-14

栄花「阿弥陀の聖の、南無阿弥陀仏」と、くもくさうはるかに声うちあげたれば」(二五・みねの月)。15-2

栄花(二七・衣のたま)、『和泉式部集』476(歌初句「とどめおきて」)、宝物集、古本説話集、世継物語も参照。100-3

#### 1027

和泉式部集「くらきより」歌 150、『俊頼髓脳』、『袋草子』上、『古本説話集』上、『世継物語』も参照。100-11

和泉式部集「人に、「世のはかなきことを」などいひて、／いかにせんいかにかすべき世の間をそむけばかなしすめばすみうし」(429)、浜松 66-12

和泉式部集(536、歌第四句「うづまれぬなを」)、小式部内侍の死を悲しむ。宝物集、『沙石集』五末なども参照。98-1

和泉式部集「人もなく鳥もなからんしまにてはこのかはほりもきみもたづねん」(夫木 13142)、「鳥なき里の蝙蝠」と同義の諺(偽物が得意になっていること)か。32-6

和泉式部続集「御ふみどものあるをやりて、経紙にすかすとて」(86 詞書)、42-2

和泉式部続集「かたらふ人の、ものいたうおもふ比／いかにしていかにこのよにありへばかしはしも物をおもはざるべき」(1215)。浜松 66-12

#### 1041

赤染衛門集「津のくににいきていひたる／恋しきになにはのこともおもほえずたれ住吉の松といひけん／返し／なを聞くにながみしぬべし住吉の松とはとまる人やいひけん」(82、83／古本説話・上(第四句「まつとはまさる」))。102-7

#### 11世紀後半か

経信母集「まくらなるひはひきよせ、つまならし」(群書類従本経信母集)、103-15

#### 1055頃

堤中納言「をばなる人の、東山わたりに、おこなひてはんべりしに」(このつゐで)、2-14

堤中納言「齒黒め(略)つけたまはず、いと白らかに笑みつつ」(虫めづる姫君)。5-5

堤中納言「畳紙を隠して、おろおろにならして」(堤中納言・はいずみ)。33-16,45-5

堤中納言・はなだの女御「いみじくすかし謀る折のみあれば」。岩うつ波 76-13

堤中納言・よしなしごと「ただの柏、衾、せめては、ならはぬ野の破れ襖にても」。「青菜といふもの」「あを(襖=アウ)などいふもの」両説あり。97-6

#### 1058頃

本朝文粹「延喜天曆二朝の故事を案ずるに、旧史を抽象し必ず功労次第に依る」(六 159



1059頃

夜の寢覚、「中の上」の誤写とも。「人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寢覚めの御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな」(寢覚・一、巻頭)。58-14

寢覚「山里めかしくおもしろき所」(寢覚・一)。3-12,4-16

寢覚,新少将の君(但馬守の三女)の歌(一、結句「知らずやありつる」)。55-3

寢覚「宰相中將、おほかたの人がらも兄君よりはなつかしく、情あくまであるところつきて、幼くより、この御方に、あはれなるものにとりわき心寄せ、この御事をば、「身に代へても、いかにて」とおぼしたるに」(一)。61-3,56-10

寢覚「国のことなどしたたかに申し居たるさま見るに」(一)。あまのかるも 77-15 寢覚,老関白、男君(若関白)の二説あり。61-4

寢覚,嵯峨野広沢は、寢覚の君の父大臣が病氣になり移り住んだ別荘の地(寢覚・二)。

寢覚の君歌(二)。55-6

寢覚,少将歌(寢覚・二、第四句「思ひ果つべき」)。55-12

寢覚,男君(大納言)歌(二、第四句「なほや頼まむ」)。55-15

寢覚,寢覚の君の同母姉で、男君の妻である大君。『夜の寢覚』では「あねうへ」と呼称することはない。56-14

寢覚「車引き出づるほどにぞ、中將も中門のもとより立ち出づる、直衣姿なまめかし」(二)。56-2

寢覚、「女二宮」は女三の宮の異母姉(四)。「類なき天の下の有識にはものしたまふめれど、一人に二人の妹を見せたてまつらむとは、思ひ寄るべきことにもはべらず」(二)。57-15

寢覚,男君歌「かぎりとおもひたへ行く」。60-6

寢覚,『無名草子』以外に見えない歌。57-3

寢覚,『無名草子』以外に見えない歌。58-10

寢覚,『無名草子』以外に見えない歌「きみはさは」。60-9

寢覚,中間欠巻部分に、男君への降嫁の話があつたらしい。「氣高く、きよらかに、うるはしう、あてなる御けはひ、有様」(寢覚・四)、「御心ばへばかりは、いと氣高く、あらまほしく、あてはかにうるはしきところつきたまひて、(略)御けはひ、有様、いみじくめでたし。御心ばへ、けはひの氣高さ」(同・五)。58-13,56-14

寢覚,中間欠巻部分にあつたらしい。寢覚の君と冷泉院と間に関係があつたとの噂を男君が信じて、寢覚の君を問い責めたことをいうか。62-15

寢覚,まさことの関係は末尾欠巻部にあたる。57-13

寢覚,「院」は冷泉院。57-15

中村本(改作本) 寢覚,このあたりは中間欠巻部分で、寢覚の君は老関白の後妻となつたらしい(中村本・二)。56-3

中村本 寢覚「などかーくだりの御かへりだにみせざらん」(二)、「などか、情のーくだりだにみせ給はざらん」(同)。59-1

寢覚「いとよく思ひ固めてのがれゆきし人」(寢覚・四)。『夜の寢覚』以前に見えない語か。59-1

寢覚「おとど」は老関白のこと。59-8

中村本寢覚「率て隠してむ」と解するのが一般的。「忍ていてかくしたてまつらんに、したがつたなひなば」(二)。59-11

寢覚「いみじう心強う、引きくくまれたる単衣の関を」(三)。今とりかへばや 75-1

寢覚、「弁のめのと」は寢覚の君の姉大君つきの女房、「左衛門督」は異母長兄のこと。中村本『夜寢覚物語』では、大君と左衛門督とが同母(寢覚の君とは異母)。59-14

中村本寢覚「心うかりし御こゝろの程やすまりて、わが心ざしを思し給ふなめりと、あわれにうれしくて、つゆばかりもあやめおもふけしきを、かけても見えたてまつらじとおぼして、いとゞふかき心ざしをつくしたまふ」(三)。59-8

中村本寢覚「もろともにありへしやどはかわらねどはなは見しよのにほひやはある／(略)むねうちさはぎて見給へば、「これよりきこえさせばやとおもふをりしも、おなじ御心にさへ」とて、／花ざかりともにながめしふるさとのにわをば露もわすれやはする」(三)。59-8

中村本寢覚「およびなき事にさだまり給なば、みるめをかたくこそなどおぼしつゞけて、いとなげかしげなるを、なぐさめ給て、大将、／ことにいでゝいへばあだなりいまおもへつらき心のへだてありやと／との給へば、をんな君／(歌結句「かぎらましかば」)」(三)。56-15

中村本『夜寢覚物語』、『無名草子』の「大将」の他例は男君を指すが、中村本『夜寢覚物語』の該当箇所では「左大将」(『夜の寢覚』の老関白にあたる)。61-4

寢覚「女君はけざやかに起きあがり、さはやかにうちむかひきこえんことは、なほいとまばゆくて」(五)。12-7

寢覚「え去らず憂き世を知りそめにしはじめなりしに」(五)。60-14

寢覚、まさこ歌「ながらふるいのちをなどでて」。58-7

寢覚、現存本にはないまさこ歌。57-16

寢覚、「きさいの宮」は石山の姫君か。「春宮」は冷泉院の皇子で、母は老関白の娘(尚侍、寢覚の君の継娘)。立后・立太子の話が末尾欠巻部分にあったらしい。61-10

寢覚、寢覚の君歌。「夜の寢覚め絶ゆる世なくとぞ」(寢覚・巻五、末尾)、61-12

中村本寢覚「世の中のうき時ごとのねざめさへならひにしかばわすれざりけり」(五)。61-12

寢覚、歌の下句か。『夜の寢覚』になし。61-15

寢覚、「大将」は、寢覚の君の次兄宰相中将、まさこ、男君の弟三位中将、の三説あり。「大将のうへ」は中村本『夜寢覚物語』の「大夫の上」に対応するか。61-15

中村本寢覚「ありがたき契とぞ見るむさし野の草のゆかりはなつかしきにも」(五 大夫の上)。62-1

寢覚、いわゆる偽死事件。末尾欠巻部分にあったらしい。62-6,63-7,79-16,86-9

寢覚、末尾欠巻部分にあった歌か「たぐひなくうきみをいとひ」。63-15

寢覚物語絵詞切「弾く人、かしこまりおきたるけしき見るに、女二宮にものしたまふめりかし。(略)心とまるに、ことごと明くなりゆけば、御簾うちおろしつれば、あかすなげかれて、「ひともとゆへ」と思ひとどめらるる心浅からず」(伝寂蓮筆寢覚物語絵詞

切)。57-15

伝慈円筆寢覚末尾欠巻部断簡「あさちがすゑにといひし中納言のきみ」。58-3

#### 1060頃

更級「世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ」(更級)。18-16,50-1/10

更級「紫のゆかりを見て、つづきを見まほしくおぼゆれど」(更級)。21-11,47-9

更級「浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて」、3-12

更級「匂ひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅ぞこひしき」(更級)、露のやどり 81-8

更級「天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり」15-1

#### 1068頃

浜松『浜松中納言物語』の男主人公。故式部卿宮と北の方の子。渡唐し、河陽県后と結ばれる。帰国後、后が死去するも、吉野の姫君の娘として転生すると知る。63-13,68-12

浜松、中納言が夢で亡き父式部卿宮の転生を知る、という話が散逸首巻部にあったらしい。

64-16,68-3

浜松「帰らむことは、九月つごもりと定めらるるに、八月十五夜は、別れの宴して月をもてあそぶに」(一)。65-5

浜松、唐土の帝最愛の後で、中納言の父が転生した第三皇子の母。→六頁四行。中納言と契り、男児を儲ける。65-5

浜松「「わが世のおもておこすとおぼして、雍州のうちなる下臈と思はせて、琴を弾きて、この中納言に聞かせ給へ」と、ねむごろに仰せらるるに」(一)。65-5

浜松「ここなる人の琴の声聞かせたてまつらむと思ふなりと仰せらるる御答へ、ともかくも聞こえさせずして、あざやかにみなほりて、扇をうちならしつつ、「あなたふと」とうち出で給へる声のおもしろさは、さまざまのものの音を、調べ合はせて聞かむよりも、まさりて聞こゆる」(一)。65-6

浜松「后、わが世のたぐひなきかたち」(一)。65-8

浜松「中納言、日本(ひのもと)の第一のならばなき人なんめり」(一)。65-9

浜松「月日の光をならべて見む心地して、わが世に、かくめづらしきことをも見聞くよ」(一)。65-9

浜松、唐土最高位の大官の五女。中納言を恋慕う。「いつとなく沈み臥し給へるむすめの君、玉の簪あざやかにて(略)団扇を手まさぐりにして、見出でて臥したり。めづらかに、をかしうもあさましうもおぼえて」(浜松・一)、「男君も、この音に合はせて笛を吹き給ひつつ、別れを惜しみ給ふに、あはれもかなしさも、取り集めたる心地する」(同)。65-12

浜松、群本「月」。一の大官の五の君歌。「(歌結句「半ばなる月」)／いとよく聞こえて弾き澄ましたる、似るものなくおもしろし。なとて月ごろ聞きならさざりつるぞと、これ

さへあかぬもの思ひ添ひぬるとぞ」(浜松・一、巻末)。65-16

浜松、巻二の中納言歌(結句「月を眺めむ」)。66-3

浜松、大宰大貳の娘。中納言帰国時に接待し(二)、後に右衛門督の妻となる(同・三)。67-2

浜松、大貳の娘歌。「忘れずは葛の下葉の下風のうらみぬほどに音を聞かせよ」(二)。67-2

浜松、巻三の大貳の娘歌(第三句「忘れねど」)。右衛門督との結婚を聞き、中納言が送ってきた歌への返し。67-4

浜松「御心なぐさめに人の見るなる絵物語など」(三)。16-7

浜松「いざ、やがて率て隠してむ。いかにおぼすべき」とのたまへば、ほのかにうちうなづきて」(三)。67-6

浜松「かくてあるほどに、ぬすみ隠してむ」(四)。67-10

浜松「いみじう過ぎしがたうて、忍びもあへず、「中納言に告げさせ給へ」とぞ息のしたに言はれぬる」(五)。67-10

浜松、巻五の吉野姫君歌(第二句「越えわびつつぞ」、第四句「たづねぬ人を」)。式部卿宮のもとから中納言に引き取られた後に、中納言に対して詠む。67-12

浜松、「髪をそぎ、衣を染めて深き山に入りぬ」(五)。66-9,2-6

浜松「なほ女の身となむ生るべき」(五)。65-12

浜松、『無名草子』以外に見えない歌。66-12

浜松、巻五巻末の一の大臣の五の君歌「このよにもあらぬ人こそこひしけれ」。河陽県后が死去した後、立后を望まれるが、中納言を慕いつつこの歌を詠んで出家。66-7

浜松、『無名草子』以外に見えない歌「かかれとも」。66-14

#### 1069～1083

狭衣「少年の春惜しめども留まらぬものなりければ、三月も半ば過ぎぬ」(一、巻頭)、50-12

『狭衣物語』と同じように韻文を踏まえた起筆は、『有明の別』『あさが露』『いはしのぶ』『恋路ゆかしき大将』『木幡の時雨』等、後代の物語へと受け継がれた。玉藻69-7,50-12 狭衣、主人公狭衣のおじにあたる一条院の皇女。狭衣が飛鳥井姫に生ませた姫君を養育、三十歳余で狭衣に降嫁(狭衣・三)。51-1

狭衣、「仁和寺に某威儀師と申す人なり。年頃、懸想したまへる人の、太秦に日頃籠りたまへるが、出でたまふとて車借りたまへれば、喜ぶながら奉りたまひて、(飛鳥井)姫君一人を盗みて、率ておはするなり」(一)。52-15

狭衣、狭衣の乳母子、式部大夫道成。飛鳥井姫君を筑紫に同伴しようと画策(一)。53-1

狭衣、「(狭衣ノ)笛の音いとど澄みのぼりて、雲のはてまでもあやしう(略)天稚御子(略)ふと降りゐたまふ」(一)、53-6

狭衣、「(狭衣ハ)この世の人にはおはせず、天人の天降りたる」(同)。53-6,86-8

狭衣、飛鳥井姫君の「わたらなん水増さりなば飛鳥川明日は淵瀬となりもこそすれ」(一)という歌。52-7

狭衣、巻一の飛鳥井姫君歌。「あまのとをやすらひにこそ」52-8

狭衣「早き瀬の底の水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝へよ」(一、飛鳥井の姫君歌)。露のやどり 81-8

狭衣、巻一の飛鳥井姫君歌。「はやきせのそこのみくづと」52-11

狭衣「御気色よろしからねば」(狭衣・一)、寢覚 56-8

狭衣、「御灯のほのかなるに、普賢の御光けぞやかに見えたまひて、ほどなく失せたまひぬ」(二)。粉河寺は観音の霊場として有名。53-7

狭衣、「神代より標ひき結ひし榊葉は我よりほかに誰か折るべき／よし試みたまへ。さては、便なからりなん」(二)という文のこと。堀川の大臣の夢。53-8

狭衣、「神代より標ひき結ひし榊葉は我よりほかに誰か折るべき／よし試みたまへ。さては、便なからりなん」(二)という文のこと。堀川の大臣の夢。53-8

狭衣,女二の宮の母で、嵯峨院の皇后。娘の密通・懷妊を心痛して病死(巻二)。51-13

狭衣,巻二の大宮歌。51-16

狭衣,嵯峨院の皇女。狭衣との結婚が実現しないうちに、彼と密通し若宮を出産。それが原因で母宮は病死、女二の宮も狭衣降嫁を催促されて病気になる、ついに出家(二)。51-5

狭衣,帥平中納言の娘、飛鳥井姫君のこと。狭衣歌「たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」(二)による。52-7

狭衣「生きてみむと思はばと、契りわびはべりしかば、返す返すまろ寝にてのみこそ扱ひはべりか」(二)、浜松 68-10

浜松「ほけづく」の初例か。「浅からぬ御気色にてだにあらばとおぼして、ほけづきもてなして」(浜松・二)は「法気づく」の意。106-6

狭衣,先帝の皇女。早く両親と死別し、狭衣の母に養育された。狭衣に恋慕されるが、斎院となる(三)。52-4

狭衣「神殿の内、二度、三度ばかり、いと高う鳴りて(略)天照神も、驚かせたまはぬやうはあらじとおぼえつる琴の音を、賀茂の御社も、いかが聞き賞でさせたまはざらん」(三)。狭衣が斎院の前で琴の琴を弾く。53-9

狭衣,主人公狭衣のおじにあたる一条院の皇女。狭衣が飛鳥井姫に生ませた姫君を養育、三十歳余で狭衣に降嫁(狭衣・三)。51-1

狭衣,女二の宮の出家後、狭衣が一品の宮と結婚したこと(三)。51-6

狭衣,巻三の狭衣歌。一品の宮と結婚した翌朝、女二の宮に贈った。51-7

狭衣,巻三の嵯峨院歌。女二の宮の代わりに父院が詠む。『狭衣物語』本文では、第二句「あさちかはらに」、第三句「なしはてゝ」「荒れはてゝ」、結句「秋にやあるらん」「秋にもあるかな」などの異同あり。51-10

狭衣「あはれなりし阿私仙をさへ感はしたまひてし口惜しさも、思ひやる方なきままに」(三)、6-1

狭衣「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」(四)、23-12

狭衣,狭衣帝即位後、飛鳥井姫君が生前常盤で書いた絵日記を見て悲しむ。「我が世にありけることをども、月日たしかにしつつ、さるべき所々は絵に描きたまへり」(狭衣・四)。物語には「手習」という語は見えない。52-13

狭衣「いとしもなかりし宮の御思ひなれど、とりむすめの御事をさへ、かくもてなし聞えさせ給ふ事」(四下)。29-3,84-7

狭衣「天照神の御けはひ、いちじるしく顕れ出でたまひて(略)「大将は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、ただ人にてある、かたじけなき宿世・ありさまなめるを、おほやけの知りたまはであれば、世は悪しきなり」(四)。53-11

狭衣「(堀川) 大殿も、関白は左大臣に譲りきこえたまひて、おりゐの帝の位に定まりぬ」

(四)。以下、「堀川院」と呼称。54-7

狭衣「大地六反振動」「無垢世界 六反震動」(法華經・提婆達多品)。『狭衣物語』現存諸本には見えない。53-13

玉藻,他例を見ない。「おくになりて」「すゑがれ」(八頁六行)と関連するか。「たけ高し」と同類とも。69-9,70-12、

玉藻,不明。『風葉集』の「玉藻に遊ぶ関白」(五・秋下 342 など)にあたる男主人公か。69-11

#### 1092頃

栄花物語(続編)「顕基の中納言、人よりはことになどや思しめしけん、法師になりたまひにけり。世にあはれなることに言ひののしる。女院より御消息遣はしたりけるに、／(「よをすてて」歌)／と申したまへりければ、侍従の内侍、／(「ときのまも」歌、結句「背かれなまし」)／仰せごともきてありけるなるべし」(三三・きるはわびしとなげく女房)。『大鏡』後日物語、『袋草紙』上、『今鏡』一・望月なども参照。顕基出家譚は諸書に載る有名な説話。109-7

栄花「この時は制ありて、衣の数は五つ」(同・三四・暮まつほし)、「制あれば数五つなり」(同・三九・布引の滝)。109-14

#### 1094

扶桑略記「今年始入末法」(永承七年(-0五) 正月二六日条)。

#### 1025以後1134以前

大鏡「いつしか聞かまほしく、おくゆかしき心地するに」(序)。15-9

大鏡「今日、神となりたまへりとも、この世には、我に所置きたまふべし」(時平)。8-14,91-12

大鏡「世覚えやむごとなしと申せばおろかなりや」(基経)、50-12

大鏡「おもひせん」一彰本・群本「おもひけむ」。「この君(道雅)、故帥中納言惟仲の女に住みたまひて、男一人・女一人うませたまへりしは、法師にて、明尊僧都の御房にこそはおはすめれ。女君は、いかが思ひたまひけむ、みそかに逃げて、今の皇太后宮にこそまゐりて、大和宣旨とてさぶらひたまふなれ。年頃の妻子とやは頼むべかりける。なかなかそれしもこそあなづりて、をこがましくもてなしけれ」(道隆)。102-3

大鏡「御こころもちゐのさかさかしき」(岩瀬本大鏡・道長)、25-11

大鏡「今日、この伽藍にて、懺悔つかうまつりてむとなり」(道長)。7-4

大鏡「いふ」は「優」。「さすがに、あそばしたる和歌は、いづれも人の口にのらぬなく、優にこそうけたまはれな」(伊尹)、96-7

大鏡「さてもさても、重木が年かぞへさせたまへ。ただなる折は、年を知りはべらぬが口惜しきに」(雑々物語)。10-7

大鏡「同じ帝と申せど、その御時に生まれあひてさぶらひけるは、あやしの民の竈まで、

やむごとなくこそ」(雑々物語)、16-14

大鏡「私の頼む人にては、兵衛の内侍の御親をぞしはべりしかば、内侍のもとへは、時どきまかるめりき」と言ふに、「とは誰にか」と言ふ人ありければ、「いで、この高名の琵琶弾き。相撲節に玄上たまはりて、御前にて、青海波つかうまつられたりしは、いみじかりしものかな。博雅三位などだにおぼろけにはえ鳴らしたまはざりけるに、これは承明門まできこえはべりしかば、左の楽屋にまかりて、うけたまはりしぞかし」(雑々物語)、琵琶の名器「玄上」については、「御前に候ふ物は、御琴も、御笛も、みなめづらしき名つきてぞある。玄上、牧馬、井手、滑橋、無名など」(枕・八九)のほか、『江談抄』三一五七、同五八、『今昔物語集』二四一二四なども参照。104-5

大鏡「八十三年の功德の林」とは、今日の講を申すべきなめり」(後日物語)。2-1

八十三歳については、物語現在時説と出家時(過去)説あり。

大鏡、顕基出家譚(後日物語)。栄花、袋草紙(上)、今鏡(一・望月)なども参照。109-7

#### 1099

江家次第「秋風のふくたびごとにあなめあなめ」の小町髑髏歌。無名抄「業平モトバリキラル、事」『袋草紙』上・亡者歌(歌結句「すすき生ひたり」)、『和歌童蒙抄』七・草部・秋草・薄(歌第四句「をのとはならじ」)、『袖中抄』一六(歌結句「すすき出でけり」)にもあり。95-5

#### 1110頃

江談抄、博雅三位の琵琶(三一六三)。今昔(二四一二三)、『世継物語』、『和歌童蒙抄』五、国会図書館本『三国伝記』七一六、『東斎随筆』音楽類、『源平盛衰記「流泉啄木事」なども参照。104-2

#### 1111

俊頼髓脳「風情あまり過ぎたるやうなる歌」、今とりかへばや72-11

俊頼髓脳「凡夫の思ひ寄るべきことにあらず」(俊頼髓脳/袋草紙・上)。89-1,18-8

俊頼髓脳「おほかた、うたのよしといふは、心をさきとして、めづらしきふしをもとめ、詞をかざりよむべきなり。心あれど詞かざらねば歌おもてめでたしとも聞えず。(略)金玉集といへるものあり。その集などの歌こそはそれらをぐしたる歌なめり。それらを御覧じて心をえさせ給ふべきなり」。89-11

俊頼髓脳、題詠歌のこと。「おほかた歌を詠まむには、題をよく心得べきなり」。91-1

俊頼髓脳「(「おほえ山」歌(第四句「ふみままだ見ず」)ニツイテ)心疾く詠めるもめでたし」。98-15

俊頼髓脳「くらきより」歌150、和泉式部集、袋草子・上、古本説話集・上、世継物語も参照。100-11

俊頼髓脳「物おもへば歌」和泉式部、御かへ「おく山に」歌)。後拾遺、『俊頼髓脳』、『袋草紙』上、『古本説話集』上、『世継物語』、『古今著聞集』五——七四、『十訓抄』一〇——一三、『沙石集』五末などに載る有名な説話(歌)。

1120以後まもなく

今昔物語集、須弥山頂上にある、帝釈天のいる天界。浜松現存本には「天に生れ給ひぬる」

(巻四)とあるのみ。「摩耶夫人ハ失給テ忉利天ニ生レ給ヒニケリ」(一一二)。65-11

今昔「海ヨリ小船ニ乗タル翁ノ帽子ヲ着タル、漕ギ来テ」(今昔・一〇一一〇)、97-9

今昔「今生ハ徒ニ過ナムトス。後世ノ貯無クハ、此レ二世不得ノ身也」(一三一七) 2-3。

今昔「法花經ヲ受ケ持テ、毎日ニ三部、毎夜ニ三部ヲ読誦シテ、懈怠スル事無シ」(一三一四)。8-4

今昔「見レバ法師也。頭髮ハ三四寸許ニ生ヒテ綴ヲ着タリ」(一五一二八)、「此女日々ニ沐浴シ身ヲ浄メ、綴ヲ着テ、常ニ野ニ行テ、菜ヲ採テ業トス」(同二〇一四二)、97-8

今昔「経袋ニ一紙ノ書有リ」(一七一一四)、8-5

今昔、晩年の大斎院選子の風雅(一九一一七)。古本説話集(上)も参照。110-15

今昔「今昔、源博雅朝臣ト云人有ケリ。(略)会坂ノ関ニ一人ノ盲、庵ヲ造テ住ケリ。名ヲバ蟬丸トゾ云ケル。(略)琵琶ノ上手ナル由ヲ聞テ(略)夜、彼ノ会坂ノ関ニ行ニケリ。(略)件ノ手ヲ博雅ニ令伝テケル」(今昔・二四一二三)。『江談抄』三一六三、『世継物語』、『和歌童蒙抄』五、国会図書館本『三国伝記』七一六、『東斎随筆』音楽類、『源平盛衰記「流泉啄木事」なども参照。104-2

今昔「亭子院ノ法師ニ成ラセ給テ、大内山ト云所ニ深く入テ行ハセ給ケレバ、此御息所モ世中冷ク思ヘテ、家ニツク／＼ト長メ居タル也ケリ」(二四一三一)。102-13

今昔「庭ノ木立チ極テ木暗クテ、前栽極ク可咲ク殖タリ。庭ハ苔、砂青ミ渡タリ。三月許ノ事ナレバ、前桜露ク栄へ、寝殿ノ南面ニ帽額ノ簾所々破テ神サビタリ」(今昔・二四一三一)。102-14

今昔「今昔、延喜天皇、御子ノ宮ノ御着袴ノ料ニ御屏風ヲ為サセ給テ(略)藤原伊衡ト云殿上人ノ少将ニテ有ケルヲ召ヌ。(略)「(略)亦異人ニハ可云キ様無ケレバ、此ノ歌只今読テ被遣ナムヤ」トナン仰セ事候ツル」御息所此ク書タリ。／チリチラズキカマホシキヲフルサトノハナミテカヘルヒトモアハナム／天皇此ヲ御覧ジテ、目出タガラセ給フ」(今昔・二四一三一)、103-3

今昔(二四一四一)「よもすがら」歌)、「しる人も」歌。後拾遺(一〇・哀傷 536・537)。

『栄花物語』七・とりべ野、も参照(いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆)。「よもすがら」歌については、『十訓抄』一一一一、『古来風体抄』上、『百人秀歌』、『発心集』六も参照。107-7

今昔「祖ノ敵キ爵事ハ、極キ兵也ト云ヘドモ、難有キ事也」(二五一四)。岩うつ波 77-10

今昔「前生ノ報ニ依コソハ、夫妻ノ間モ返合ヒ」(二六一一一)、58-6

今昔「為盛ハ(略)人咲ハスル馴者ナル翁ニテゾ有ケレバ」(二八一五)、7-15

今昔「元輔ハ、馴者ノ、物可咲ク云フ人咲ハスルヲ役ト為ル翁ニテナム有ケレバ」(二八一六)。7-15

今昔「清廉、猫ヲダニ見ツレバ、極キ太切ノ要事ニテ行タル所ナレドモ」(二八一三一)。16-1

1125

金葉「色見えぬ心ばかりはしづむれどなみだはえこそしのばざりけれ」(二度本・八・恋下 444 中納言国信) 14-5、



金葉「和泉式部保昌にぐして丹後に侍りけるころ、みやこに歌合ありけるに小式部歌よみにとられ侍りけるに、定頼卿のつぼねのまへにまうできて歌はいかがせさせたまふ丹後へ人はつかはしけむやつかひまだまうでずやなどたはぶれてたてりけるを、ひかへてよめる／小式部内侍／（歌第四句「ふみもまだみず」）」（三奏本・九・雑上 543）。諸書にしばしば引用される有名な説話（歌）。98-13

金葉「うたたねのゆめなかりせばわかれにしむかしの人をまたもみましや」（二度本・九・雑上 553 修理大夫顕季）。13-12

金葉「小式部内侍うせてのち、上東門院よりとしごろたまはりけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに、小式部内侍とかきつけられてたるをみてよめる／和泉式部／（注二「もろともに」歌、第四句「うづまれぬ名を」、結句「きくぞかなしき」）」（三奏本・一〇・雑下 612 詞書・よみ人名）、98-1

#### 1127以前

和歌童蒙抄「秋風のふくたびごとにあなめあなめ」の小町鬘髻歌（七・草部・秋草・薄。歌第四句「をのとはならじ」）、江家次第、無名抄「業平モトバリキラルゝ事」『袋草紙』上・亡者歌（歌結句「すすき生ひたり」）、『袖中抄』一六（歌結句「すすき出でけり」）にもあり。95-5

和歌童蒙抄、博雅三位の琵琶（五）。今昔（二四一二三）、江談抄（三一六三）、世継物語、国会図書館本『三国伝記』七一六、『東斎随筆』音楽類、『源平盛衰記』「流泉啄木事」なども参照。104-2

#### 1134

打聞集「ナゾノ老法師ニカ有覧ト思テ、無礼ニ腰ウヤヲダニセデ過ニケルカナ」（達磨和尚事）。末葉の露 80-10

#### 1134～1136

為忠家後度百首「やどちかきわかきのさくらのきすぎてほつえにはなのさきにけるかな」（124）。5-2

#### 1144～1188

色葉字類抄「気色 きそく」（前田本色葉字類抄・下）。56-8,75-1

#### 1149

右衛門督家歌合「しほたるといふにて誰もしりぬべしなどききにくくくり事をする」（久安五年右衛門督家歌合 48 の判詞）、「叢言（クリコト）」（黒川本色葉字類抄・中

#### 1152

久安百首（俊成）「ときはのかげをたのむには」（11010）。110-11

1158

袋草紙「古今・後撰・拾遺等を三代集と号す」(上・雑談)。89-11

袋草紙「秘事なり。以往は万葉集を相ひ加へて三代集と号す。而して拾遺出来の後、万葉を棄てて拾遺を用う」(上・雑談)、89-7

袋草紙「後拾遺は末代の規模の集なり」(上・雑談)。89-9

袋草紙、顯基出家譚(上)、栄花、大鏡(後日物語)、今鏡(一・望月)なども参照。109-7

袋草紙「紫式部と云ふ名二説有り。一にはこの物語中に紫の巻を作ること甚深なり。故にこの名を得たり。一には一条院の御乳母の子なり。而して上東門院に奉らしめんとて、「吾がゆかりの物なり。あはれと思し召せ」と申さしめ給ふの故に、この名有り」(上)。

106-3

袋草子(上)「くらきより」歌150、和泉式部集、古本説話集・上、世継物語も参照。100-11

袋草子「法華經をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし」(上1129 大僧正行基／拾遺二〇・哀傷1346)。6-1

袋草紙「(伊勢物語ハ)業平朝臣の所為なり。偏にかの人の作れる歌のみに非ず。古今の間の歌の興有るを書き載するか。また自他を論ぜず、便に随ひて同人の歌の様にこれを書き列ぬ」(上)。87-8

袋草紙「時の大臣また一の人の歌は、秀逸に非ずといへども必ずこれを入るべし。英雄の公達またまた宜しきに随ひて優すべき事なり。(略)無双の歌においては左右なし」(上・撰集の故実)、91-12

袋草紙「秋風のふくたびごとにあなめあなめ」の小町髑髏歌(上・亡者歌(歌結句「すすき生ひたり」)和歌童蒙抄、江家次第、無名抄「業平モトマリキラル、事」『袖中抄』一六(歌結句「すすき出でけり」)にもあり。95-5

袋草紙「物おもへば歌」(上)和泉式部、御かへ「おく山に」歌)。後拾遺、『俊頼髓脳』、『古本説話集』上、『世継物語』、『古今著聞集』五——七四、『十訓抄』一〇——一三、『沙石集』五末などに載る有名な説話(歌)。99-7

袋草紙「江記に云はく、「赤染は赤染時用が女なり。右衛門志・尉等を歴るによりて、赤染衛門と号す」」(上)。102-6

1165

今撰集(顯昭撰)「かくばかりつれなき人とおなじ世にむまれあひけむことさへぞうき」(恋145 頼政)。16-14

1165

続詞花「まつり見ける女車よりかはほりをおとしたりけるをとりて、かきつけてつかはしける／いとむげにとりなきしまにあらねどもかはほりにこそおもひつきぬれ」(二〇・戯咲970 藤原道信朝臣)、32-6「まつりけるに、かはほりもちたるくるまに／(歌初句「いともげに」)」(道信集27)。32-6

1166

中宮亮重家歌合「左歌、姿・言葉めづらしくはきこゆるを、「さこそまたなき」とはいか

に詠まれたるにか。もし無二亦無三なるにやあらむ」(仁安二年中宮亮重家歌合 45 の判詞、判者頭広(俊成))。16-11

1167

源氏釈「しけきよもきのもとの心をとひとりこちて猶をり給。これみつさきにたちてよもきの露はらひていれたてまつる」(一三)、45-6

源氏釈、「十七」は「玉鬘」巻で、「十七のならひ」は「はつね」「こてふ」「ほたる」「とこなつ」「かゝり火」「野秋」「みゆき」「ふちはかま」「まきはしら」「さくら人」の諸巻。21-3

源氏釈「女君めをさまして風のおともうちそよめくに雁のなきわたるこゑほのかにきこへおさなきみちにもとかくおほしみたるゝにや雲井のかりもわかことやとあるは／霧ふかく雲井のかりもわかことやはれせずものはかなしかるらん」(一三)。47-13

1172頃

歌仙落書「とりとめぬとし月なれば、かしらの雪とのみつもり行くもあはれにて」(序)。2-11

歌仙落書「この道許は山の辺の跡たえず、柿の本の塵尽きずして」(序)。「やまびこのあと」は「たへず」の、「かきのもとのちり」は「つきず」のそれぞれ序詞。「やまびこ」は山上憶良ないしは山部赤人を、「かきのもと」は柿本人麿をひびかせている。91-14

歌仙落書「むかし九重の内に、かずならざりしかども、人なみに立まじり程に、いたづらに年をかさねて」。7-7

1173

玉葉「御堂御所障子絵、有其数」(承安三年(一一七三)九月九日)。3-8

玉葉「此日新御堂供養也。名最勝光院。建春門院御堂也」(承安三年(一一七三)一〇月二一日)、最勝光院は法住寺内にあった。建春門院は後白河天皇(7)女御で、高倉天皇(7)の母平滋子。3-3

1174頃

今鏡「源氏といふめでたきものがたりつくりいだして」(序)、18-2

今鏡、頭基出家譚(一・望月)、栄花、大鏡(後日物語)、袋草紙(上)なども参照 109-7

今鏡「歌の風情いたづらにうする事となり」(すべらぎの中)、今とりかへばや 72-11

今鏡「御気色聞えけれど、「ことさらに立ち宿ることなくて」(御子たち)、寝覚 56-8

今鏡「雪おもしろく積りたる朝に、白河の院にみゆきなどあらむと思ひて、(略)俄に御幸有りけるに、(略)かの入道の宮、その御用意ありて、法華堂に、三昧経しづやかに読ませ給ひて、庭の上、いさゝか人のあとふみなどもせず。うちいで十具ばかりありけるを、中よりきりて、袖二十いだしむ用意ありけるを、(略)既に渡らせたまひて、階かくしの間に、御車たてさせ給ひて、かくとや侍りけむ、さやうに侍りけるほどに、汗衫著たるわらは二人、ひとりしろがねの銚子に、みき入れてもて参り、いま一人は、しろがねの折敷に、こがねの杯すゑて、大柑子御さかなにて、いだし給へりければ」(今鏡・四・小野のみゆき)。『十訓抄』七一三、『古今著聞集』一四一四七五、『小野雪見

御幸絵巻』などにも載る有名な説話。112-9

今鏡「舟にのりぐして」(四・宇治の川瀬)。

今鏡「うちに源氏よみて、さかきこそいみじけれ、あふひはしかありなどきこえけり」(七・村上源氏)、19-7

今鏡「奥の方に、わざとはなくて、箏の琴のつま鳴らしして、たえだえ聞えけり」(今鏡・七・有栖川)。103-15

今鏡「花園の左の大臣とておはせしこそ、光源氏などもかかる人をこそ申さまほしくおぼえ給へしか。(略) 基隆の三位の播磨守なりし、初元結したてまつりて」(八・御子たち)。19-11

今鏡「日野・三位の女にて、世おぼえもことのほかに聞へ給しかども」(もみぢのみかり)。50-12,64-9

今鏡「六十巻」、現在は『源氏物語』五四巻と数える。→評論(更級、今鏡、源氏一品経)。

#### 1176～1184

唐物語「むかし秦穆公のむすめに弄玉と申人ありけり。秋の月のさやけくまなきに心をすましてまたくよの事にほだされず。又簫史といふ楽人あり、秋月きよくすさまじきあけぼのに簫をふくこゑあはれにかなしきことかぎりなし。弄玉それにや心をうつしけんすまみてあひ給にけり。(略) たゞもろともに臺のうへにてせうをふき月をのみながめ給事ふた心なし。ほうわうといふ鳥とびきたりてなむこれをきける。月やうやくにしにかたぶきて山のはちかくなる程に、心やいさぎよかりけん簫史弄玉ふたりの人をぐしてむなしきそらにとびあがりぬ」(一一)、11-5

#### 1178以後

宝物集、東山の道行は『宝物集』一と類似。2-14

宝物集「わかき人(声)」の問いに導かれつつの展開は、「若やかなる女」の発問から仏法論を展開する『宝物集』を継承。21-15

宝物集「第一にすてがたきふし」以下、『宝物集』一の「第一の宝」論と類似の構想。10-7

宝物集「鐘の声を聞つれば、打出したる物、こそ／＼と失る事の侍る也」(一)。15-6

宝物集「失にしか共、年来たびならひたる事なればとて、衣服をつかはしたりけるに、小式部内侍と云札のつきたるをえて、今さらかきくらす心地しければ、／いづみ式部／(歌同、結句「きくぞかなしき」)」(一)。『和泉式部集』536(歌第四句「うづまれぬなを」)、『沙石集』五末なども参照。98-1

宝物集(一)、『和泉式部集』476(歌初句「とどめおきて」)、『栄花物語』二七・衣のたま、『古本説話集』上、『世継物語』も参照。100-3

宝物集「大二条殿の思人にて、事の外にもてなし給ひけり。万の人心をつくし、思をかけたりけれ共」小式部内侍(一)。98-3

宝物集「小野小町が(略) みづから野べの蕨をつみて、簀にいれて臂にかけたり」(三)。5-14,1-9

宝物集、小町歌「色みえで」「題しらず／(歌同)」(古今・一五・恋五 797／小町集 20)。94-7

宝物集「のべまでに」歌「定子皇后宮、帳の紐にあまたの歌むすびつけて、かくれ給ひに

ければ、鳥辺野にて、とかくしたてまつりける夜、雪ふりければ、よみたまひける／一条院御製／（歌第二句「心ばかりは」、結句「しらずやありけん」）（宝物集・三）。107-14  
宝物集「おろ／＼うけたまはりしは」（六）、33-16  
宝物集「まゐりつれども、法華經にかたさり奉りてかへりぬ」（九冊本・九）。92-1

1179頃

治承三十六人歌合「東山の紅葉見がてら、時雨とともに山めぐりして、もも寺うちながめ侍しに（略）あやしうからさびたる翁共の、鳩の杖にすがれるなむあゆみいできたれる」（仮名序）。2-14

太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合「右もとの三句ぞてづつげにきこゆれど心ありてみゆれば勝とも申してん」（草花・四番の判詞）、うきなみ 86-1

1184頃

唐物語「むかし王子猷山陰といふ所にすみけり。（略）たゞ春の花秋の月にのみ心をすましつつ、おほくのとしつきをくくりけり。（略）月のひかりきよくすさまじきよ、ひとりおきゐてなぐさめがたくやおぼえけん、たかせぶねにさほさしつゝ心にまかせて戴安陶をたづねゆくに」（一）、『晋書』八〇、『蒙求』上などにも見える話。11-5

1187

袖中抄「秋風のふくたびごとにあなめあなめ」の小町髑髏歌（一六、歌結句「すすき出でけり」）、和歌童蒙抄、江家次第、無名抄にもあり。95-5

1188

千載「延喜のひじりの御世には古今集を撰ばれ、天曆のかしこきこ御時には、後撰集を集めたまへき」（序）。13-2,102-16,104-4

千載「つねよりもむつまじきかなほととぎすしでの山ぢのともとおもへば」（九・哀傷 582 鳥羽院）、3-16

千載「二条太皇太后宮賀茂のいつきと申しける時、本院にて、松枝映水といへる心をよみ侍りける／京極前太政大臣／ちはやぶるいつきの宮のありす川松とともにぞかげはすむべき」（一〇・賀 616）。110-11

千載「色見えぬ心のほどをしらすはたもとをそむる涙なりけり」（一一・恋一 688 祐盛法師）。14-5

千載「おもひきやしぢのはしがききつめてもも夜もおなじまろねせんとは」（一二・恋二 779 俊成）。浜松 68-10

千載「さまかへんとおもふ人、ものあはれなるゆふぐれに、しやうのことひくをききてよめる」（一七・雑中 1142 詞書 二条太皇太后宮式部）。20-5

千載、紫野にあった斎院御所の様子を言う。「ときはのかげをたのむにも」（一八・雑下 1163 待賢門院堀河）、110-11

1188～1234

建礼門院右京大夫集「家の集などいひて、歌よむ人こそかきとゞむることなれ、これはゆめ／＼さにはあらず。たゞ、あはれにも、かなしくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることども、あるをり／＼、ふと心におぼえしを、思ひ出でらるゝまゝに、我が目ひとつにみんとてかきおくなり」(序)。92-12,105-8

建礼門院右京大夫集「ほうぐえりいだして、れうしにすかせて、経かき、(略)「見るもかひなし」とかや、『源氏物語』にある事、思ひ出でらるるも」(228・229 詞書)。42-2

1190

山家集「京極太政大臣中納言と申しけるをり、きくをおびたたしき程にしたてて」(466 詞書)、とりかへばや 70-6

山家集「ねぞめする人のところをわびしめてしぐるるおとはかなしかりけり」(上 492)。寢覚 62-16

山家集「此世にてかたらひおかんほととぎすしでの山ぢのしるべともなれ」(中 750 待賢門院堀川)。4-3

1192頃

とりかへばや、『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」のこと。70-14,19-14,28-12

とりかへばや、現存本巻一の四の君歌(結句「影となりけり」)。今とりかへばや 73-13

とりかへばや「たゞ月ごとに四五日ぞ、あやしく所せき病の、人に見えてつくろふべきにはあらぬを」(一)、71-2

とりかへばや「何事の心づくしになるにかと聞くに」(一)。今とりかへばや 73-16

とりかへばや、現存本巻二の四の君歌。今とりかへばや 74-2

とりかへばや「とりこめたてられてはせん方なく、心弱きに、こはいかにしつる事ぞと、人わろく涙さへ落つる」(二)。今とりかへばや 74-8

とりかへばや「この女君、見る目有様は児めかしうあてやかに、物遠きながら」(二)。

今とりかへばや 73-12,70-10

とりかへばや、諸注、「れいけんでん(麗景殿)」は「宣耀殿」の誤りとする。「宣耀殿の内侍の督はしも、限りなくおかしうて、人に心をかゝるゝ振舞ひは思ひのどめられなんかし(略)つきづきしく心深くひきつゝみて、動きをだにし給べくもあらず」(二)。「麗景殿の女御の妹」とする説もあるが、現存本には彼女が尚侍となった記事はない。今とりかへばや 74-16

とりかへばや、諸注、「ひきくくみ」は「ひきつつみ」の誤写とする。今とりかへばや 75-1

とりかへばや「今はをだしく、かくを見るべきものと打とけおぼして」(三)、「これ(若君)を見捨ててはふり離れじと思ふ頼みさへいと強くなりて」(同)。今とりかへばや 74-8

とりかへばや「見しまゝの有しそれともおぼえぬはわが身やあらぬ人やかはれる」(三)。

今とりかへばや 74-13

とりかへばや「昔の世より、さるべきたがひめの有し報ひに、天狗の男は女となし、女をば男のやうになし、御心に絶えず嘆かせつるなり」(三)。今とりかへばや 73-3

とりかへばや「髪もかき垂れなどして(略)女びさせたれば」(三)。散逸古本では男装

のまま「もとよりゆるして」(71-1) 出産したらしい。今とりかへばや 73-6  
とりかへばや「長き御髪を押し切りて例のもとよりにとりなし給」(三)。73-6  
とりかへばや「昔見し宇治の橋姫それならでうらみとくべきかたはあらじを」(四)。75-5  
とりかへばや「さやうのねぢけばみ、かかづらふべきにもものし給はず」(中)。玉藻 69-13  
とりかへばや、物語を批評する場面は現存本に見えない。70-14  
とりかへばや、現存本に見えない場面。71-3  
とりかへばや、現存本に見えない場面。71-5  
とりかへばや、現存本に見えない場面。71-6

岩うつ波、『無名草子』以外に見えない歌。76-15

岩うつ波、『無名草子』以外に見えない歌。77-4

#### 1192頃

海人の刈藻(古本)、女主人公の母。「君たちの御方をうち見給ひつつ、霜・雪などの消ゆるやうに、つひにはかなくなり給ひぬ」(二)。78-6  
海人の刈藻、近江守の娘で、中宮(注九「大宮」の妹)の女房。男主人公と契る。「昨日、中宮おはしましぬ」と聞き奉りしに、もし江侍従や御供に候ふ」と、弘徽殿わたりをたたずみ給ふ。心ばせかどありて、見る目も憎からねば、内侍になさせ給ひて」(三)。78-6  
海人の刈藻、男主人公(注二の「三位中将」)のこと。正確には「権大納言」(八頁五行、現存本、『物語二百番歌合』、『風葉集』)。あまのかるも 78-8  
海人の刈藻現存本、『物語二百番歌合』、『風葉集』。あまのかるも 78-8  
海人の刈藻「かく独り住み給ふ」(三)。79-2  
海人の刈藻「心知らぬ舎人一人具して参る。(略)明け果つるほどに、山におはし着きぬ」(四)、78-8  
海人の刈藻、現存本には登場しない。78-8  
海人の刈藻、和歌の下句。現存本には見えない。「大宮は、雪かき曇り降るにも、「比叡の山はいづ方ぞ」とて、泣く泣く眺めやり給ふに」(四)。78-10  
海人の刈藻、男主人公の兄(注二の「権中納言」)。「大將はいと繁く、ありしよりほのめき参り給ひつつ」(四)、78-11,79-10  
海人の刈藻「殿、御扇にてうち招き給へば、走りおはしたり。「てては」と問ひ給へば、大將に向かひて高やかに笑ひ給ふ。「母は」と聞こえ給へば、斎宮の御方へ指をさし給へば、「乱りがはしのことどもや」とても、またうち泣き給ふ。」(四)。78-13  
海人の刈藻「九体の如意輪観音(略)七仏薬師(略)七観音(略)九体の弥勒(略)千体の地藏(略)千手観音」(四)。79-14  
海人の刈藻、男主人公の最期。「骸だにもなく、はや紫雲に移り給ひぬ」(四)。79-15  
海人の刈藻「中むすめは、殿の大納言殿に、かうかう歌を詠みかけ侍りし」(二)。おだへのぬま 84-13

緒絶えの沼、「式部卿中むすめ」一群本「式部卿の中むすめの」。不明。84-13

#### 1190年代か

松浦宮「むかし、藤原の宮の御時」（一、巻頭）、「この物語、高き代のことにて、歌も言葉もさま異に、古めかしう見えしを」（同・三、偽跋）。86-5

松浦宮「けだかき翁の、ないがしろの帽子押し入れて」（一）。97-9

#### 1192頃

梁塵秘抄「法華經八卷は一部なり 拵けてみればあな尊 文字ごとに 序品第一より 受学 無学作礼而去に至るまで 読む人聞く人みな仏」（二 288）。16-9

#### 1100～1200頃

名義抄「屍 カバネ」（名義抄・法下）、「略 カバネ」（同・仏下本）、

#### 平安末か鎌倉初期

古本説話集（上）、宝物集、和泉式部集 476（歌初句「とどめおきて」）、栄花物語（二七・衣のたま）、世継物語も参照。100-3

古本説話「されば、昔今の人を、一手に具して申たる也」（上・八）。かくれみの 71-13,80-4

古本説話「物おもへば歌」（上）和泉式部、御かへし「おく山に」歌。後拾遺、『俊頼髓脳』、袋草紙、『世継物語』、『古今著聞集』五——一七四、『十訓抄』一〇——一三、『沙石集』五末などに載る有名な説話（歌）。99-7

古本説話（上）「くらきより」歌 150、和泉式部集、袋草子・上、世継物語も参照。100-11

古本説話「みて」—彰本「きて」。「病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たるける」（古本説話・上）。100-14

古本説話、和泉式部「病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たりける。歌の徳に後の世も助かりけむ、いとめでたき事」（上）。『世継物語』も参照。100-15

古本説話「今は昔、御荒の宣旨といふ人は、優にやさしく、容貌もめでたかりけり。皇太后宮の女房なり。中納言定頼、文をこせ給。（略）」心少し変り、絶え間がちなり。／（歌同）」（上）。『世継物語』も参照。101-8

古本説話、みあれ宣旨。「絶え給て後、賀茂に参り給と聞きて、「今一度も見む」と思ひて、心にもあらぬ賀茂参りして、／（歌同）／とても、涙のみいとゞこぼれまさりて、大方現し心もなくぞおぼえかる」（上）。『世継物語』も参照。101-13

古本説話、大和宣旨。「中納言定頼がもとにつかはしける／大和宣旨／（歌第二句「しのびもあへぬ」）（後拾遺・一四・恋 809）、『世継物語』も参照。

古本説話、赤染衛門。（上、第四句「まつとはまさる」）。102-7

古本説話、赤染衛門（上）、後拾遺、『世継物語』も参照。102-8

古本説話、『源氏物語』成立伝承（上）。世継物語、河海抄、花鳥余情、賀茂斎院記、謡曲『源氏供養』などに見える。105-12

古本説話、晩年の大斎院選子の風雅「世もむげに末になり、院の御年もいたく老させ給ひにたれば、今はまいる人もなし人もまいらねば、院の御有様もうち解けにたらん、若く



盛りなりし人／＼もみな老失せもていぬらん、心にくからでまいる人もなきに、後一条院御時に、雲林院不断の念仏は、九月十日のほどなれば、殿上人四五人ばかり、果ての夜、月のえもいはず明きに、(略) 帰るに、斎院の東の御門の細目に開きたれば(略)「かゝるついでに院の中みそかに見む」と言ひて入りぬ。(略) 御前の前栽、心にまかせて高く生い茂りたり。(略) 露は月の光に照らされてきらめきわたり、虫の声／＼さま／＼に聞こゆ。遣水の音、のどやかに流れたり。そのほど、露音する人なし。船岡の風の風、冷やかに吹きたれば、御前に御簾の少しうち揺るくにつけて、薫物の香のえもいはず香ばしく(略) 御格子もいまだ下ろされぬなりけり。「月御覧ずとて、おはしましけるまゝにや」と思ふほどに、奥深き箏の琴の、平調に調められたる音の、ほのかに聞こゆるに、「さは、かゝる事も世にはあるなりけり」と、あさましくおぼゆ(上)。『今昔物語集』一九一一七も参照。110-15

世継物語(小世継)「物おもへば歌」(上) 和泉式部、御かへし「おく山に」歌。後拾遺、『俊頼髓脳』、袋草紙、古本説話集、『古今著聞集』五一一七四、『十訓抄』一〇一一三、『沙石集』五末などに載る有名な説話(歌)。99-7

世継物語、宝物集、和泉式部集 476(歌初句「とどめおきて」)、栄花物語(二七・衣のたま)、古本説話集(上)も参照。100-3

世継物語「くらきより」歌 150、和泉式部集、袋草子・上、古本説話集・上も参照。100-11

世継物語、和泉式部「病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たりける。歌の徳に後の世も助かりけむ、いとめでたき事」(古本説話・上)参照。100-15

世継物語、御荒の宣旨。「今は昔、御荒の宣旨といふ人は、優にやさしく、容貌もめでたかりけり。皇太后宮の女房なり。中納言定頼、文をこせ給。(略)」心少し変り、絶え間がちなり。／(歌同) (古本説話・上)も参照。101-8

世継物語、みあれ宣旨。「絶え給て後、賀茂に参り給と聞きて、「今一度も見む」と思ひて、心にもあらぬ賀茂参りして、／(歌同)／とても、涙のみいとゞこぼれまきりて、大方現し心もなくぞおぼえかる」(古本説話・上)も参照。101-13

世継物語、大和宣旨。「中納言定頼がもとにつかはしける／大和宣旨／(歌第二句「しのびもあへぬ」)(後拾遺・一四・恋 809)、古本説話『世継物語』も参照。

世継物語、赤染衛門。後拾遺、古本説話集も参照。102-8

世継物語、博雅三位の琵琶。今昔(二四一二三)、江談抄(三一六三)、『和歌童蒙抄』五、国会図書館本『三国伝記』七一六、『東斎随筆』音楽類、『源平盛衰記「流泉啄木事」なども参照。104-2

世継物語、『源氏物語』成立伝承(上)。古本説話集、河海抄、花鳥余情、賀茂斎院記、謡曲『源氏供養』などに見える。105-12

1193

六百番歌合「万葉集は優なることを取るべきなりとぞ、故人申侍し」(春上・五番の判詞)、88-12

六百番歌合「右、詞づかひおかしからんとは見え侍を」(春中・二番の判詞)、歌合の判

詞や歌論書に見える歌論用語の一つ。『無名草子』中にも頻出。21-11  
 六百番歌合「右歌、「雉鳴とだち」、手づつに聞ゆ」(春中・八番の判詞)。うきなみ 86-1  
 六百番歌合「詞続き、心ゆかず」(秋上・一八番の左方難陳)、19-11  
 六百番歌合「関の小河紅に成に」けんも、おびたしくや聞こゆらん」(冬上・二番の判詞)、とりかへばや 70-6  
 六百番歌合「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」(冬上・一三番の判詞)。88-11,→評論(六百番歌合)。96-10,98-5  
 六百番歌合「右、「道の椎柴」といへる、事新しく聞ゆ。左こそは勝侍らめ」(冬下・一六番の判詞)、12-4,14-16,16-12,28-8  
 六百番歌合「花の宴」→評論(六百番歌合)。20-1  
 六百番歌合「耳(に)立つ」は、歌論書や歌合の判詞では「耳障りだ」という否定的意味で用いられる。「心もあり、めづらしくも聞ゆる歌は、「すべて心ゆかず」「耳に立つ」などいふ事に侍れば」(六百番歌合・恋六・二四番の判詞)、浜松 68-16  
 六百番歌合「水無瀬河」は、「さのみぞいかに」など、おかしきさまに聞ゆるに程に、「契なるらん」と侍、末瀬れにや侍らん」(恋七・一七番の判詞)。「後干(しりひ)」と類似するか。「豊旗雲」などはこと／＼しくは聞ゆれど、「閑し晴れねば」など言ひ果てたる、後干なるべし」(同・恋六・七番の判詞)。こまむかへ 83-16,69-9

#### 1193

六百番陳状「親修理大夫頭季卿予に万葉集を講給し時云、「万葉集は只和歌の籠にて、納箱中で可持。常に披みて不可好読。和歌損ずる物也」と云々」(春上・五番左)、88-12  
 六百番陳状「やまと歌のならひ、風情を先として実義をたださぬ事多し、今とりかへばや 72-11

#### 1193～1206

物語二百番歌合「世をそむきてのち、やまのみかどの御ふみに、このよにはうくてわかれしなかなるをいかにいりにしひとつみちなり、との給はせたる御かへし／(歌初句「かぎりなく」)」(20)。寝覚 63-15  
 物語二百番歌合「中納言と申しし時、大殿の御物いみかたくてえおはしまさざりければ、あすかがはあすはわたらむと思ふにもけふのひるまはなほぞこひしきと、侍りける御かへり／あすかる／(歌同)」(28)。52-7  
 物語二百番歌合「のわきのあした女のもとにつかはしける／(歌同)」(35)、46-5  
 物語二百番歌合「唐人に帰るにつけて、一の大官の五の君のもとに／(歌初句「あはれいかで」)」(47)、浜松 66-3  
 物語二百番歌合「兵部卿の宮、宇治におはしかよふとききて、うきふねの君に／右大将／(歌第二句「ところもしらず」)」(65)、浮舟巻の薫歌。高松宮家本・陽明家本・国冬本・麦生本(別本)は第二句「ころともしらで」、他本は「ころともしらず」。27-16  
 物語二百番歌合「大将におはせし時、さい宮の御くだりちかくなりてのころ、のの宮にまゐりてみやすん所にたいめんしたまへるあか月／(歌同)」(77)、44-16  
 物語二百番歌合「ふりすててけふはゆくともすずかがはやそせのなみにそではぬれじやと

- 侍りける御かへり／（歌同前）」(81)。45-3
- 物語二百番歌合「すまのわかれに／（歌同）」(89)、37-12
- 物語二百番歌合「すまのわかれに／むらさきのうへ／（歌同）」(91)、37-16
- 物語二百番歌合「めのとにいざなはれていでたつあか月／あすかゐ／（歌第四句「ゆふつけどりに）」(96)、52-8
- 物語二百番歌合「すまのうらにて／（歌同）」(99)。38-12
- 物語二百番歌合「むらさきのうへかくれ給ひてのち、六条の院の御まへの花ざかりに／（歌同）」(125)、41-15
- 物語二百番「かぎりになりてのち女三の宮に かしはぎの権大納言／（歌同）」(133)、40-4
- 物語二百番歌合「心からこのよをかぎりにおもひすてけるよ／浮舟（歌同）」(135)。浮舟巻の浮舟歌。27-11
- 物語二百番歌合「うまれたまへるみこを見たまひて／嵯峨院皇后宮／（歌同）」(138)。51-16
- 物語二百番歌合「よもぎふのすみかおぼしいでてなほわけいり給ふとて／（歌同）」(157)、45-6
- 物語二百番歌合「ふねのうちにて／あすかゐ／（歌同）」(182)。52-11
- 物語二百番歌合「頭中将ときこえし時、六条院中将に物したまひし時うちよりひたちの宮にかくろへいりて、のきちかきかうばいのかげにたちよりたまふに、もとよりたちかくれて、ふりすてさせ給へるつらさに御おくりしつるはとて／前太政大臣／（歌同前）」(187)。28-13
- 物語二百番歌合「すまのうらにてはなのえんの日おぼしいでて／（歌結句「けふもきにけり）」(189)、39-2
- 物語二百番歌合では「あねのうへ」(206 詞書)、「あねうへ」(224 よみ人名)。56-14
- 夜の寝覚、大君歌。56-15
- 物語二百番歌合「九条のたびねののち、後の宮にめしだいされたるを、ねむごろにかたらしつつ、かの御ゆくへたづね給ふことたびかさなれば、おもひわびて／女院新少将／（歌結句「しらずやありける）」(210)、寝覚 55-3
- 物語二百番歌合「兵部卿の宮右おとどにかよひたまひてのちうへにたいめんして、しづかなる夜のけしきむかしにかよへる御けしきをえしにびあへず、みすのそばよりそでをひきよせて、くやしとおもひわたる心のうちをもらしいでてもかひなきものから、人めのあいなきをおもひかへして、たちいでてあしたに／（歌同）」(219)、47-4
- 物語二百番歌合「なれけるそでのうつりがを」と侍りける御かへし／兵部卿の宮のうへ／（歌同）」(223)。26-14
- 物語二百番歌合「なれけるそでのうつりがをと侍りける御かへし／兵部卿の宮のうへ／（歌同）」(223)。47-11
- 物語二百番歌合「関白一品宮にまゐりそめたまひける日、おもひなげきたまへるをなぐさめて、「よしやきみながきちぎりはたえせじをいのちのみこそさだめがたけれ」と侍りければ／（歌第二句「ちぎりにそへて）」(224)、寝覚 56-15
- 物語二百番歌合「院の御けしきよろしからで、女宮ぐしたてまつりて、れぜい院にわたらせたまひにけるのち、右大将しらかはの院にまゐりてむなしくたちかへるとて、「わたくしにだにわすれたまふなよ」と侍りければ／女三宮の中納言／（歌第二・三句「あさ

- ちがすゑのしらつゆの)」(226)、寝覚 58-3
- 物語二百番歌合「女三宮の中納言」(226 よみ人名)。寝覚 57-15
- 物語二百番歌合「あかしにてよなよなかよひそめ給ひしころ、むらさきのうへに／(歌第三句「かりそめの」、結句「すさびなれども」)」(277)。39-11
- 物語二百番歌合「中納言の君、「きえかへりてもいつかわすれむ」ときこえけるかへし／右大将／(歌第三句「あさぢふの」)」(228)、寝覚 57-16
- 物語二百番歌合「帰朝ちかくなりてのころ、まかれりけるに、うきくももまがはぬ秋の月かげに、いけのなかしまのもみぢのかげなる楼のうへに、こと・びはひきあはせてわかれをしむ夜、中納言、「日のもとや山よりいでむ月見てもまづぞこよひはこひしかるべき」と申しけるかへりごとに、びはをもちながら／大臣の五のきみ／(歌結句「なかばなる月」)」(256)。浜松 65-16
- 物語二百番歌合「みかはにさける所たがへに、権中納言あながちにせうそこしよりて、あらぬ人と見あらはしたるけしきみえ侍りければ／太皇太后宮御匣殿」(276 詞書・よみ人名)、権中納言に人違いされて契りを結び、姫君を出産後、死去。82-9
- 物語二百番歌合、男主人公(権中納言)に愛された女性。後に尚侍となる。「忍びて出づる暁、東宮宣旨に」(288 詞書)。みかはにさける 82-5
- 物語二百番歌合「権中納言、心みにつらき心をならはばやさてうらみずやありけると見むと侍りけるかへし／東宮のせんじ／(歌同)」(292)、みかはにさける 82-6
- 物語二百番歌合「右大将、いたづらにわけつるみちのつゆしげみときこえ給ひけれど、おのづからしみにけるうつりがをとがめいでさせ給ひて／兵部卿のみこ／(歌初句「また人に」)」(297)、47-8
- 物語二百番歌合「おもひわびてしらかはよりしのびていづるかはらのほどにて、おとどの御くるまのあひたまへる、すだれをおしあけてさしのぞきたまへるを見て／朝倉女君／たまぼこのみちゆきずりのかばかりもあはれいづれのよにか見るべき」(310)、76-9
- 物語二百番歌合「もえむけぶりもむすばほれと侍りし御返し／二品親王女三宮／(歌同)」(313)。40-8
- 物語二百番歌合「心ならずさすらへけるころ、いしやまにこもりておもひあかすに、権中納言ときこえし時こもりあひたまへるをよそにききて／朝倉女君／なみのよるあか月ごとのかぜのおとはむかしの秋にかはらざりけり」(316)、76-9
- 物語二百番歌合「むらさきのうへかくれたまひてのち、むかしの野わきのゆふべほのかなりし御おもかげ、いまはのほどのかなしさなどおもひつづけて／右大臣／(歌同)」(319)。→評論(源氏解・むねつぶるゝこと)。41-3
- 物語二百番歌合「すまのわかれのころ、かがみを見たまふとてむらさきのうへに／(歌同)」(371)、37-3
- 物語二百番歌合「すまのうらにおぼしたちしころ、到仕のおとどにわたりたまひて大宮にきこえさせ給ひける／(歌第二句「もえしけぶりも」)」(375)。36-13
- 物語二百番歌合「よをそむきてのち、権大納言のもとに／入道兵部卿親王」(380 詞書・よみ人名)。露のやどり 81-15
- 物語二百番歌合「すまのわかれちかくなりてわたりたまへりしに／花ちるさとのうへ／(歌同)」(383)、38-4

物語二百番歌「宰相中将ときこえし時、ひさしくれいならざりしまぎれに、女君のゆくへ  
たづねうしなひて／右大臣」(392 詞書・よみ人名)。男主人公か。末葉の露 80-9

物語二百番歌合「やまひかぎりになりて／右大将／いつの日かかりのはかぜにさそはれて  
すゑばのつゆのきえははつべき」(394)。「源中将」(注四)と同一人物とも。80-13

物語二百番歌合『風葉集』とも原則として男君は「関白」と呼称。寝覚 60-13

物語二百番歌合、右方に「みかはにさける」一五首収録。『夜の寝覚』二〇首について多く、  
『浜松中納言物語』と同数。みかはにさける 82-4

#### 1192以後

源氏物語歌合「むらさきのうへ／あかしより、れいよりも御ふみこまやかにかき給ひて、  
まことや、またものはかなき夢をこそ見侍りしか、かくきこゆるとはずがたりにへだて  
なき心のほどはおぼしあはせよ、ちかひしこともなかきかきて、見るめはあまのすさ  
みなれどもとある御返りを、いとなに心なくらうたげにかき給ひて、御夢がたりにつけ  
てもおもひあはせらるることおほかるをとて／(歌第二句「思ひけるかな」)」(55)。39-14

源氏物語歌合「花ちるさと／すまの御出たちのころ、いといたくふかしておはしたれば、  
むかし今の御物語に明がたちかくなりにつけり、みじかよのほどや、かばかりのたいめん  
も、またはえしもやはと思ふこそ心ばそくとのたまふに、鳥もしばしなけば、よをつつ  
みていそぎ出で給ふ、れいの、月入りはつるほど、よそへられてあはれなり、女君、こ  
き御そでにうつりて、げにぬるるがほなれば／(歌同)」(73)。38-4

#### 1195頃

有明の別れ「みのけだちて、「やうなきこときこえて、かすがの神の御とがめにや」とわ  
なゝくに」(一)。97-2

#### 1195頃

水鏡「紫式部が源氏など書いて侍るさまは、たゞ人の為業とやは見ゆる」(跋)。18-2

水鏡「大鏡の巻も凡夫の為業なれば、仏の大円鏡智の鏡にはよも侍らじ」(跋)、18-8

#### 1196

『無名草子』で具体的な年号が記されるのはこのみ。この年俊成は八三歳であった。

#### 1201

古来風体抄「歌の本躰は、ただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり」(再撰本・上)。88-13

古来風体抄「古今の後、後撰集いかなるにか、歌も古きすがたをむねとし、ことばも古き  
さまにかゝれたるが、いみじき事なるぞと申しつたふめる」(再撰本・上)。89-1

古来風体抄「万葉集の歌は、よく心を得て、取りても詠むべきなりとぞ、古き人申し侍り  
し」(再撰本・上)、88-12

古来風体抄「大納言公任卿、この拾遺集を抄して、拾遺抄となづけてありけるを、世の人  
これをいますこしもてあそびけるほどに、拾遺集はあいなくすこしおされにけるなるべ  
し」(再撰本・上)、89-6

古来風体抄「拾遺抄こそ抄なれば、十巻に抄せらるるを、金葉・詞花は拾遺抄を存じけるにや、この二つの集は十巻に撰したるなり」(再撰本・上)。なお、『無名草子』では八代集のうち『詞花集』の記述のみなし。90-2

古来風体抄(上)、「よもすがら」歌)、「しる人も」歌。後拾遺(一〇・哀傷 536・537)。

『栄花物語』七・とりべ野、『今昔物語集』二四一四一も参照(いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆)。「よもすがら」歌については、『十訓抄』一一一一、『百人秀歌』、『発心集』六も参照。107-7

古来風体抄「歌は、ただ一詞に、いみじくも深くもなるものに侍るなり」(上)。105-7

古来風体抄(再撰本)「言葉、ことの続き、姿心、限りなく侍るなるべし」(下)。19-11,69-6

古来風体抄『金葉集』のこと。「金葉集は、撰者のさほどの歌人に侍れば、歌どももみなよろしくは侍るを、少し時の花を折る心の進みけるにや、当時の人のみ初めより続きだちたるやうにて、いかにぞ見え侍るなるべし」(再撰本・下)。89-15

古来風体「この千載集は、ただ我が愚かなる心ひとつに、よろしと見ゆるをば、その人はいくらといふ事もなく記しつけて侍りし程に、いみじく会釈なく、人すげなかるべき集にて侍るなり」(再撰本・上)、「千載集は、また愚なる心ひとつに撰びけるほどに、歌をのみ思ひて、人を忘れけるに侍るめり」(同・下)。91-12,8-14

## 1202

千五百番歌合「源氏歌には、しほしほとまづぞなかるるかりそめのみるめはあまのすさみなれども、ともよめり」(2444・2445の藤原顕昭の判)、39-11

千五百番歌合「たがさとのつゆをばそでにはらふらんよもぎのものは風にまかせて／右歌は源氏のよもぎふのまきに、たづねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもぎのものと心を、と侍る歌の心歟、本歌にふかきよもぎのものと心と侍れば、いかにと申すにはおよび侍らねど、よもぎのものは風にまかせてと侍るつづき、いかがとこそおぼえ侍れ」(2529の藤原顕昭判詞)。45-6,21-1,24-5

## 1205

新古今「かの万葉集は歌の源なり」(仮名序)。88-12

新古今「なく声をえやはしのばぬほととぎすはつうの花のかげにかくれて」(三・夏 190 柿本人麿)、4-15

新古今「あふこともいまはなきねの夢ならでいつかは君を又はみるべき」(八・哀傷 811 上東門院／13-14

通具俊成卿女歌合「とこなつ長春花などをよめらんやうにや」(18・19判詞)。5-1

## 1213

明月記「籬下長春花猶紅薬」(建保元年(一二三)一二月一六日)、5-1

明月記「夜火果而是最勝光院(略)土木之壮麗、莊嚴之華美、天下第一之仏閣也」(嘉禄二年(一二六)六月五日)。3-3

1209～1221

近代秀歌「近き世の人は、ただ思ひ得たる風情を三十字に言ひ続けむことをさきとして、さらに姿詞の趣を知らず」、今とりかへばや 72-11

1209以後

平家公達草子「建春門院は、御心いとうるはしく、かしこくおはしましければ（略）世の中も女院おはしましける程静かにめでたかりけるを」。3-9

1212

方丈記「夏は郭公を聞く。語らふごとに死出の山路を契る」。3-16

1211～1216

無名抄「秀句ナラネド、只詞ツカヒ面白クツツケツレバ、又ミ所アリ」（俊恵歌スガタヲ定ル事）、21-11

無名抄「タダ同ジ詞ナレドオビタハシク聞ユ」（事ガラ善悪ノ事）。とりかへばや 70-6

無名抄「風情ヲ思ヒエヌ時、心ノタクミニテツクリタツベキヤウヲナラフ也」（故実ノ躰ト云事）。今とりかへばや 72-11,86-5

無名抄「この躰はやすきやうにて極めて難し。一文字も違ひなば怪しの腰折れに成りぬべし」（俊恵歌スガタヲ定シ事）。93-2

無名抄「野ノ中ニ歌ノカミノ句詠ズルコエアリ。其詞云／アキ風ノフクニツケテモアナメ／トイフ。（略）或人語云、ヲノハ小町コノ国ニクダリテ此所ニシテ命ヲハリニケリ。スナハチカノ頭是也トイフ。コハニ業平アハレニカナシクオボエケレバ、涙ヲオサヘテ下句ヲツケハリ。ヲノトハイハジスハキオヒタリ／トゾツケハル」（業平モトバリキラルハ事）。『江家次第』、『袋草紙』上・亡者歌（歌結句「すすき生ひたり」）、『和歌童蒙抄』七・草部・秋草・薄（歌第四句「をのとはならじ」）、『袖中抄』一六（歌結句「すすき出でけり」）にもあり。95-5

無名抄「仁和寺ノ淡路阿闍梨とトイヒケル人ノイモウトノモトナリケルナマ女房ノ」（思余自然歌読事）。103-14

1215以前

古事談、清少納言零落説話（一五五、一五七）能因本枕・奥書も参照。97-5

1216

発心集「人の形にも非ず、やせおとろへ、物のはらはらとある綴ばかり着て」（一一三）。97-8

発心集「花からを谷に散らし給ひてと言ふを聞けば、女声なり」（六・上東門院女房住深山事）。5-12

発心集（六）、「よもすがら」歌、「しる人も」歌。後拾遺（一〇・哀傷 536・537）。『荣花物語』七・とりべ野、『今昔物語集』二四一四一も参照（いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆）。「よもすがら」歌については、『十訓抄』一一一一、『古来風体抄』上、『百人秀歌』も参照。107-7

1219

毎月抄「かやうのそぞろごとまで申侍る事、いとどかたはらいたふぞ覚え侍る」10-2

毎月抄「耳に立つ詞の珍しきは、長詞にて候はねども、二字三字もあまたよみつればあさましき事にて候」。浜松 68-16,86-13

毎月抄「俊頼は、えもいはず長高きを宜しと申しためり」玉藻 69-9

毎月抄「万葉はげに代もあがり人の心もさえて、今の世にまなぶとも更に及ぶべからず」、88-11

毎月抄「万葉よりこのかたの勅撰」（毎月抄）。現在と同様に『古今集』～『新古今集』を「八代集」と称するのは、『八代集秀逸』（定家撰、天福二年（-三三））や『明月記』文暦元年（-三三）九月八日条あたりが早い例。89-7

毎月抄「げにいかにも恐ろしき物なれども、歌によみつれば優に聞きなさるるたぐひぞ侍る」。96-7

1219以後

たまきはる「建春門院をはしまさでのち（略）最勝光院の方見やれば、尽きせず昔のみ思出でられて」3-3

たまきはる「御心にまかせぬ事なしと、人も思言ふめりき」、3-9

たまきはる「民部卿殿、あきときの中納言中むすめ」、おだへのぬま 84-13

1220

愚管抄「カナラズ昔今ハカヘリアイテ」（七）。58-6

1220以後

平治「内宴の相撲（スマウ）の節（セツ）、絶てひさしき跡を続」（金刀比羅本平治・上・信頼信西不快の事）。104-4

1221頃

住吉「髪は雪をいたゞき、額には四海の波を畳み」（下）、2-11

住吉「目しばたゝきて、顔赤くなして、言ひやるかたもなく、そぞろき居たり」（下）。岩うつ波 77-10

1221頃

宇治拾遺「不断香の煙満ちたり」（一三——三）。5-5

宇治拾遺「これは名香などたき給ふなめり（略）「暁香ばかりつるは、極楽の迎へなりけり」（一五一九）。5-6

宇治拾遺「ひがさのうへを又おとがひに縄にてからげつけて」（八一——二）。7-5

宇治拾遺「経袋首にかけて夜昼経読みつるを」（一〇——〇）。8-5



1 2 2 2

三代集之間事「此集華山法皇御撰也。(略) 四条大納言。(略) 忽抄出其歌。任意取捨。是法皇不知食事也」(定家)。89-6

1 2 2 9

京極中納言相語(先達物語)「大方はたけたかくさびたる、めでたし」玉藻 69-9

京極中納言相語(先達物語)「詞づかひの有様のいふかぎりなきものにて、紫式部の筆をみれば、心もすみて歌の姿詞優によまるゝなり」、21-11

1 2 3 3

明月記「源氏并狭衣(略) 於歌所拔群」(天福元年(一二三) 三月一九日条)。50-12

1 2 3 5 頃

百人秀歌、「よもすがら」歌)、「しる人も」歌。後拾遺(一〇・哀傷 536・537)。『栄花物語』七・とりべ野、『今昔物語集』二四一四一も参照(いずれも和歌の順序は『無名草子』と逆)。「よもすがら」歌については、『十訓抄』一一一一、『古来風体抄』上、『発心集』六も参照。107-7

1 2 3 7

木師抄「比巴はむかし兵衛命婦とて、ゆゑしかりける比巴ひき。大内裏大極殿にて玄上をひきけるが。らいせぬ門まできこえけるなどかたり傳たり」(木師抄)。琵琶の名器「玄上」については、「御前に候ふ物は、御琴も、御笛も、みなめづらしき名つきてぞある。玄上、牧馬、井手、渭橋、無名など」(枕・八九)のほか、『江談抄』三一五七、同五八、『今昔物語集』二四一二四なども参照。104-5

1 2 3 8

梶尾明恵上人遺訓「心づかひは物に触れ誑惑がましく欲深く」、文明本節用集「欲深 ヨクフカシ」。34-3

1 2 4 4

新撰六帖「いたづらに磯(五十カ) ちを過ぎし春あきは恋しからずといふこともなし」(四1276 内大臣)。2-1

1 2 5 2

越部禅尼消息「御手づからなる詞遣まで、めづらしくけだかうおもしろく京極殿のかんな序など」。歌合の判詞や歌論書に見える歌論用語の一つ。『無名草子』中にも頻出。21-11

1 2 5 2

十訓抄(一一一一)、「よもすがら」歌)。後拾遺(一〇・哀傷 536・537)。『栄花物語』七・とりべ野、『今昔物語集』二四一四一も参照(いずれも和歌の順序は『無名草子』と

逆)。『古来風体抄』上、『百人秀歌』、『発心集』六も参照。107-7

十訓抄「子猷は月の夜、雪の空にあくがれて、はるかに剡県の安道を尋ね」(五)。『晋書』八〇、『蒙求』上などにも見える話。

十訓抄、小野のみゆき(七一三)、今鏡(四・小野のみゆき)、古今著聞集(一四一四七五)、小野雪見御幸絵巻など 112-9

十訓抄「秦穆公の女弄玉はたぐひなく簫を愛し、周靈王太子王喬は、好て笛を吹、あるひは鳳に伴ひ、或は鶴にのりて、ふたりながら仙を得て去にけり」(一〇)。11-5『列仙伝』上などにも見える話。11-5

十訓抄、小式部内侍病重く「いかにせむ」歌を母によみ天井に感ずる声ありて病ゆ。(一〇——四) 沙石集・五末なども参照。98-8

#### 1 2 5 4

古今著聞集「小式部の内侍、この世ならずわづらひけり。限りになりて、(略)いきのしたに、／(歌同)／と、弱りはてたるこゑにていひければ、天井のうへにあくびさしてやあらんとおぼゆるこゑにて、「あらあはれ」といひてけり。さて身のあたたかさもさめて、よろしくなりてけり」(五——七五)、98-8

古今著聞集「うたよみおぼえ」一群本「うたよみのおぼえ」。「(注六「おほえ山」歌ニツイテ)これより歌よみの世おぼえいできにけり」(五——八三)。98-5

古今著聞集、小野のみゆき(一四一四七五)。今鏡(四・小野のみゆき)、十訓抄(七一三)、小野雪見御幸絵巻など 112-9

古今著聞集「雪おほく盛りて、日隠の間の御縁に置きて」(一——四〇八)。112-12

古今著聞集、小町歌「わびぬれば」(五——八二) 古今「文屋やすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる／(歌同)」(一八・雑下 938／小町集 38)。94-9

#### 1 2 5 7

私聚百因縁集「物の思遣り有らん程の人、忍びに尋ねて我とぎにさせ給へ」(九)、9-11

#### 1 2 6 5

続古今「たび人はたもとすずしくなりけりせきふきこゆるすまのうらかぜ」(一〇・羈旅 868 中納言行平)。38-10

#### 1 3 世紀後半か

早歌「源氏の巻の中にも紅葉の賀ぞすぐれたる」(紅葉興)。→評論(源氏解・すぐれたるまき)。19-7

#### 1 3 世紀後半か

小野雪見御幸絵巻、小野のみゆき。今鏡(四・小野のみゆき)、十訓抄(七一三)、古今著聞集(一四一四七五)など参照 112-9

1 2 5 6 以後 1 2 8 7 以前

撰集抄「何を以てか人界の思出とせん」(跋)、2-1,16-14

1 2 6 5

続古今「(歌初句「あはれまた」)(一四・恋四 1314 菅原孝標朝臣女)。浜松 66-3

1 2 6 5 ~ 1 2 7 0

苔の衣「オ・才覚につけて、世にとりて何事にも余り給ひたる」(四)。18-5,53-12

1 2 6 9

名語記「人のさかさかしげるを、りりしといへり。如何。答、理々し也。又聴敏によせたるは利々也」(三)。25-11

名語記「問 人ノ身ニサチサイワイトイヘル サチ如何 答 シナツキノ反 シナツキタル程ノ人ハカナラス涯分ノサイワイハアル也 幸ヲサチトハツカヘル歟」(六)。63-11

名語記「次 コレハシ ソレハシナニトスナナト制止スル詞ノハシ如何 ハシハ (略) 又云 フラセリノ反 イヒフラスヨシ歟」(三)、

1 2 7 1

風葉集「女院」(六・冬・416 詞書など)にあたる。末葉の露、女主人公か。80-6

風葉集「だいしらず／とりかへばやの太政大臣四君／(歌結句「かげとなりけり」)」(一・春上 48)。今とりかへばや 73-13

風葉集「すまにてわかきのさくらほのかに咲きそめたるを御らんずるに、一とせの花のえんなどおぼしいでられければ／六条院御歌／(歌結句「けふもきにけり」)」(二・春下 82)。39-2

風葉集「心高き後冷泉院」(二・春下 93 よみ人名)。天皇在位の終わりごろに、女主人公の娘が入内したらしい。76-1

風葉集、のちの右大臣(二・春下 96 よみ人名など)か。おだへのぬま 84-12

風葉集「六条院、御息所のもとより出でさせ給ひけるあした、せんざいの色色みだれたるをすぎがてにやすらひ給ふに、中将御ともにまゐるを、しばしひきすゑさせ給ひて」(四・秋上 247「さくはなに」歌の詞書)。43-6

風葉集「玉藻に遊ぶ関白」(五・秋下 342 など)にあたる男主人公か。玉藻 69-11

風葉集、女主人公と契る。「右大臣心あくがれたるさまりけるころ、手習ひにしてはべりける／心高き後冷泉院宣旨」(五・秋下 352 詞書・よみ人名)。『物語二百番歌合』『風葉集』の「右大臣」にあたる。75-14

風葉集「世をのがれむとて出でけるに、江侍従内侍がもとのものに見あひてことづけ侍りける」(六・冬 415 詞書)。あまのかるも 78-8

風葉集, 男主人公か。「中納言の息子の中将」か、「中納言兼中将」の意か、不詳。のちの春宮大夫(一一・恋一 458 よみ人名など)か。おだへのぬま 84-16

風葉集「やがてうまよりおりて、みやしろのかたををがみ給ふ、神にまかり申したまふとて／六条院御歌／(歌同)」(風葉集・七・神祇 465)。37-12

風葉集「すまにうつろひ給はんとするころ、きやうだいにより給ひて、こよなうこそおとろへにけれとて／六条院御うた／(歌同)」(八・離別 527)。37-3

風葉集・「かへし／むらさきのうへ／(歌初句「わかれても」、結句「なぐさめてまし」)」(八・離別 528)。37-7

風葉集「御かへし／むらさきのうへ／(歌同)」(八・離別 530)。37-16

風葉集「ちち大弐になりて、ぐしてくだり侍りける女を、えとどめ侍らでよめる／つゆのやどりの権大納言」(八・離別 566 詞書・よみ人名)。「権中納言」は男主人公か。81-8

風葉集「紫の上かくれ侍りて、かのすみ侍りけるはるのかたの花ざかり、いにしへにかはらぬを御らんじて／六条院御うた／(歌同)」(九・哀傷 614)。41-15

風葉集「かしは木の権大納言身まかりて後、ゆふべの雲のけしきにび色にかすみて、花のちりたる梢をみて／源氏の致仕太政大臣／(歌同)」(・九・哀傷 615)、40-11

風葉集「左大将身まかりける頃、しぐれのする日、女院にきこえ給ひける」(九・哀傷 645 詞書)、末葉の露 80-13

風葉集「入道摂政身まかりけるに、権大納言のもとにつかはしける／露のやどりの中将内侍／(歌第二句「袖だにいまは」、第四句「くちぬや君が」、結句「けふの袂は」)」(九・哀傷 677)。詠者が異なる。81-16

風葉集「あね君かくれて後、宇治にまかりて、やり水のほとりなるいはにゐて／(歌同)」(風葉集 692)。43-1

風葉集, 男主人公のこと。「岩打つ波の内大臣」(一一・恋一 790 など)にあたる。76-13

風葉集「うちの中君のもとにまかれりけるに、かをる大将のうつりがのふかくしみたるを、あやしととがめでてけしきどりけるに、ともかくもいらへ侍らざりければ／にほふ兵部卿のみこ／(歌初句「また人に」)」(一三・恋三 953)。47-8

風葉集, のちの東宮。「世の中はしたなくて里にはべりけるころ、東宮、皇子と申しける時、忍びておはしまして行く末こちたく契らせたまひけるに／緒絶えの沼の尚侍」(一三・恋三 946 詞書・よみ人名)。84-16

風葉集, のちの内大臣(風葉集・一三・恋三 954 よみ人名)か。おだへのぬま 84-14

風葉集, 女主人公か。のちの尚侍(一四・恋四 1015 よみ人名など)らしい。三宮(のちの東宮、注二参照)と中納言中将(のちの東宮大夫か、注三参照)の二人に愛される。おだへのぬま 84-16

風葉集「みかどただ人におはしましけるころ、しのびてかよひ給ひける所をわれにもあらず外へうつろひけるあかつき、ただいまなんとは聞えまほしきに鳥もなきければ／あすかゐ／(歌同)」(一三・恋三 972)。52-8

風葉集「閑白いまだ三位中将にはべりけるころ、しのびても申しけるを、つつましきことありていでのみちに、かのくるまのあひてはべりければ／あさくらの皇太后宮大納

言／玉ばこのみちゆきずりのかばかりも哀いづれのよにかみるべき」(一三・恋三 973)。

76-9

風葉集、女主人公は入内し、「中宮」(一四・恋四 978 詞書)にまでなつたらしい。岩うつ波 77-1

風葉集「しのびたるをとこのかへりごとに、ひまなきよしをいひて侍りけるに、さらばまたはえきこゆまじ、あまり人わろき心ちすと申したりければ／みかはにさけるの尚侍(歌同)」(一四・恋四 988)。82-6

風葉集「しのびて物いひわたりける女の、こと人にむかへられにければつかはしける」／ねざめの関白／(歌第四句「涙しもなど」)」(一四・恋四 1014)。60-6

風葉集「たれともしらでもの申しける女の、いとたぐひなくおぼえ侍りければ、かならずここをたづぬべきさまにかたらひおきける所にゆきても、むなしうたちわづらひて、ふえふきうたなどうたひける末つかた、「恋しなどはおろかなり」と、ふたかへりばかりののち、神うたにうたひ侍りける／をだえのぬまの春宮大夫」(一四・恋四 1015 詞書・よみ人名)。「こひしなどはおろかなど」—彰本「こひしなどはおろかなる」。85-1

風葉集「内にまゐらんとし侍りけるのちのあふせをさまざまちぎりて、いはほにおふるまつほどはと申しける人のかへしに／おなじ春宮のはは女御／契りきと我はわすれず思ふともいはほにおふるまつ人もあらじ」(一四・恋四 1022)。玉藻 70-1

風葉集「六条院あかしのうへの事ほのめかしの給はせたりける御かへし／むらさきのうへ／(歌第二句「おもひけるかな」)」(一四・恋四 1023)、39-14

風葉集「もの申しける女のもとに、こと人のまかりかよふと聞きてつかはしける／かをる大将／(歌第二句「比ともしらず」)」(一四・恋四 1024)。27-11

風葉集「前関白いとせちに言ひ寄りて、人たがへしたるさまに見えはべりければ／みかはに咲ける女院の御匣」(一四・恋四 1026 詞書・よみ人名)。82-9

風葉集「ねざめのひろさはの准后、こころにもあらずおい関白にむかへられてなげき侍りけるころ、わか関白の夢にみえ侍りけるうた」(一四・恋四 1035 詞書)は、老関白との対比で「わか(若)」という形容を付す例。60-13

風葉集「たえてひさしうおはしまさざりける所を、もののたよりにおもほしいでて、たちよらせ給へるに、更にえわけさせ給ふまじきよもぎのつゆけさになんはべると申しければ／六条院御歌／(歌同)」(一五・恋五 1075)、45-6

風葉集「六条御息所、むすめの斎宮にぐしてくだらんとし侍りけるに、なが月のはじめつかたたちよらせ給へるに、明けゆく空のけしきことさらにつくりいでたらむやうなれば／六条院御歌／(歌同)」(一五・恋五 1121)。44-16

風葉集「野分しける日、女のもとにつかはしける／夕ぎりの右大臣／(歌同)」(一五・恋五 1113)。46-5

風葉集「うちの中君のもとにて、あかつきちかくなるまで物がたりしあかして、あしたにつかはしける／かをる大将／(歌同)」(一六・雑一 1204)。47-4

風葉集「父御子かくれての又のとし秋、あねのもとにつかはしける／うちの河浪の帥親王の三君」(一六・雑一 1212 詞書・よみ人名)、「返し／式部卿親王北方」(同 1213 詞書・よみ人名)。帥宮の長女のこと。中の君(注六)の姉。83-5

風葉集「冷泉院のかしこまりゆるさせ給ひてのち、女三宮もろともに秋の夕をながめてよ

みはべりける／ねざめの右大将／（歌同）」（一六・雑一 1215）。58-7

風葉集「中将出家して後、思ひがけずみあひて侍りけるに、雪の中にまた出でけるをかくるまでみおくりて／とりかへばやの前関白四君／をちこちのしらぬ山路にあくがれてかかる雪まをいかでわくらん」（一六・雑一 1249）。とりかへばや 71-3

風葉集「右大将、冷泉院にかしこまること侍りていできるに、わするなど申しければ」（一七・雑二 1309 詞書）、57-15

風葉集「（歌第二・三句「あさちがすゑのしらつゆの）」」（一七・雑二 1309、詞書は 57-19 参照）、58-3

風葉集「（「あらしふく」歌の）かへし／（歌第二句「あらしにつれて）」」（一七・雑二 1310）。

この歌と次の歌の贈答の順序が『物語二百番歌合』『風葉集』とは逆。『無名草子』の誤りか。寝覚 57-16

風葉集「関白、入道太政大臣のあねむすめにすみわたりけるに、そのおととをはやう見はべりけるを、たれともしらでゆくへきかせよと、せめ侍りければ／ねざめの女院新少将／（歌初句「こぎかへし）」」（一八・雑三 1351）。寝覚 55-3

風葉集「中納言のもとに、あかつきたちよりてはべりけるに、いみじくたふとく経をよみすましてゐあかしつるにやとみえければよめる／はままつ宰相中将／（歌第三句「とこの浦に）」」（一八・雑三 1357）。浜松 65-2

風葉集「ゆくへしられはべらざりけるをとこに、いしやまにこもりあひて侍りけるを、後にききて、そのをり哀とは思ひけんやと申しければ／あさくらの皇太后宮大納言／吹きよりししがのうら風いかばかり我が身にしみし物とかはしる」（一八・雑三 1358（1047 も参照）。76-9

## 1280

弘安源氏論義「しめやかなるよゐのつれ／＼なぐさむばかりのこと（略）源氏のうちのおぼつかなきことを、二くさづゝ問をいだして、六日論義すべきにさだまりぬ」（序）、19-5,105-11

弘安源氏論義「なにかしの院といへるにて河原院とはきこえたりこたまにとらるゝる事もおもひよそへらるゝ事はべり」、49-8

## 1286頃

和歌知頭集「百年に一年たらぬつくも髪」（島原文庫本）は同段に小町伝説も掲載。7-16

1283以後1308以前

沙石「人間ニ生レテ、思出モナクシテ」(沙石・二一六)。2-1,16-14

沙石「出家ノ僧侶ハ(略)頭ヲソレ共欲ヲソラズ。衣ヲ染テ心ヲソメズ」(三一八)。2-4

沙石「小式部内侍、病重くして、心弱く覚えける時、母を見て、声の下に／(歌第三句「おぼほえず」)／天井に感ずる声ありて病癒えにけり。神明の御助けにこそ」(五末)。『十訓抄』一〇——四なども参照。98-8

1292頃

中務内侍日記「唐人の姿ども、並み立ちて拝し奉るに、身の毛も立ち、涙がましくめでたく嬉し」(下)、97-2

1303

新後撰「此世にてかたらひおかんほととぎすしでの山ぢのしるべともなれ」(一九・雑下1556) 4-3

1310頃

夫木和歌「家集、北野行幸に本院の辺にて詠む／躬恒／おとに聞くいつきの宮のありす河ただふなをかのわたりなりけり」(二四・雑六11200)、110-11

1331頃

徒然「かたち・心ざまよき人も、才なくなりぬれば、しなくだり」(一)。25-13

徒然「おなじ心ならん人としめやかに物語して、(略)うち語らはば、つれづれ慰まめと思へど」(一二)。19-5,105-11

徒然「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」(一三)。12-11

徒然「養ひ君の、比叡山に児にておはしますが」(四七)。23-15

徒然草「若く末々なるは、宮仕へに立ち居、人の後にさぶらふは」(徒然草・一三七)。94-1

鎌倉期(原形は平安末期)

九条家本源氏古系図「紅梅右大臣／は、衛門督にをなし。(略)こうはいの巻に按察の大納言とみゆ。たけかはに右大臣になりて右近大将兼す。えん(たんカ)いむのまけわさのひわらはにてたかさこうたひし人なり」。32-3

正嘉本源氏古系図「源三位」、「巢守三位／(略)兵部卿宮のかよひ給ければはなやかなる御心をけさましく思てかをる大将のあさからすきこえければ心うつりにけり」、「中君／一品の女房」(正嘉本源氏古系図)はいずれも「蛸兵部卿親王」の子として掲載。

ただし、「以下四人流布本無し」と注記あり。33-7,21-12

源氏物語古系図「手習三君」、27-10

#### 鎌倉期

伊勢源氏十二番女合「夜ふけはてゝ、こだまとかいふものきたりて、女君をとり奉る」(一〇番)、49-8

伊勢源氏十二番女合「いまはの時に、侍従につかはしける、／(歌同)／宮御覧じて、／たちそひて消えやしなましようき事を思ひこがるゝ烟比べに」(六)。40-4

#### 鎌倉期

源氏解→評論(源氏解・すぐれたるまき)。きりつぽ 19-7

源氏解「うけられぬこと うつせみ、あますがたにてのまじらひ」、22-14

源氏解、某の院にて、夕顔の上こだまにとられたる(あさましきこと、源氏四十八ものたとへ)。49-8

源氏解、朧月夜の尚侍、源氏を帳のうちに籠めて、父大殿にみつけれられたるところ→評論(心うきこと、同・あさましきこと、源氏四十八ものたとへ)。49-9

源氏解、源氏、紫上を須磨に同行せず、明石君をもうけたこと。→評論(おもはずなること、源氏四十八ものたとへ・恋しき事)。47-15

源氏解「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかに独りごちながめたまふを(略)上包ばかりを見せたてまつりたまふ(うらめしきこと)(澤標)。48-1

源氏解、源氏初音巻の一場面。正月一日、明石御方のもとに泊まったこと(いうなること)。48-10

源氏解「いみじきこと、花ちる里、夕ぎりの御おやになり給ひたる」。→評論(源氏解・いみじきこと)。23-13

源氏解、柏木の文を源氏見給ふを見つけた(源氏解・むねつぶるゝこと、源氏四十八ものたとへ)。49-11

源氏解→評論(源氏解・いとおしきこと、柏木の死)。31-15,21-9,40-1

源氏解「いとおしきこと 女三宮へ朱雀院より、御文に、「世をのがれ入りにし道にをくるとも」とあり」(いとおしきこと)→評論(源氏解)。26-16

源氏解、浮舟が薫大将・兵部卿官分きがたく身をいたづらになしたる事(もどかしきこと、源氏四十八ものたとへ)。49-12,27-10

#### 鎌倉期か

源氏抄「ことば すまには心づくしの秋かぜにうみはすこしとをけれど、ゆきひらのちうなごんの「せきふきこゆる」とながめけんうらなみの、よるはいとちかうきこえて」。  
→評論(源氏四十八ものたとへ・言葉)。38-10

源氏抄「あはれなる事 すまのわかれにうへのかきつくし給ひけん御てをとりいでゝ、「をなじ雲ゐのけぶりとものなれ」などかきそへてやり給ひけん、げんじの御心のうち」→評論(源氏解あはれなること)。42-3

源氏抄「にくき事 「六ゐすくせ」とつぶやきけんめのと」。→評論(源氏解・にくきこと)。46-13

源氏抄「うた／(歌結句「名をやこのさん」)」。→評論(源氏解・うた)。40-4

源氏抄「あねみやに心をかけて、なかの宮をにほふ宮にゆづり給へるに」(くやしき事)。



21-12→評論(源氏四十八ものたとへ・くやしき事)。21-12,23-7,42,7

源氏抄「うちのなかの宮、ひやうぶきやうの宮のうへになりてのち」(むつかしき事)、26-12

源氏抄「なかの宮をにほふ宮にゆづり給へるに」(くやしき事)。→評論(源氏四十八ものたとへ・むつかしき事、くやしき事)。26-12

源氏抄「ふたかたの御心ざしをおもひわづらい給ひけんてならいのきみ」(ありがたき事)。  
27-10

#### 鎌倉期か

源氏四十八ものたとへ「あさましき事 某の院にて、夕顔の上こだまにとられたる事」。

→評論(源氏解・あさましきこと)。49-8

源氏四十八ものたとへ、源氏、紫上を須磨に同行せず、明石君をもうけたこと。→評論(恋しき事。源氏解、おもはずなること)。47-15 源氏四十八ものたとへの事「おとこ「な  
の みこと < しく」といひけたれ給へど、げんじ。薫大将の我から心づかひは、猶たぐ  
ひ なくこそ」。→評論(源氏解・おとこ) 22-2,24-12,51-1,58-13/15,64-13,81-10,84-1

源氏四十八ものたとへ、源氏絵合巻の紫の上歌「ひとりみてながめしよりはあまのすむか  
たをかきてぞみるべかりける」(こゝろもとなき事)。48-9

源氏四十八ものたとへ「心憂き事 朧月夜の尚侍、源氏を帳のうちに籠めて、父大殿にみ  
つけられたるところ」。→評論(源氏解・心うきこと、同・あさましきこと)。49-9

源氏四十八ものたとへ「うらめしき事、まめ人、緑の袖の昔より見慣れたる雲井の雁と、  
落葉の宮と、十五日づつ通ひ給ふ事」。→評論(源氏解・うらめしきこと)。23-12

源氏四十八ものたとへ「うらめしき事 まめ人、緑の袖の昔より見馴れたる雲井の雁と、  
落葉の宮と、十五日づつ通ひ給ふ事」。→評論(源氏解・うらめしきこと)。49-5,31-4

源氏四十八ものたとへ「いとほしき事 柏木の今はの際に、夕霧に達ひて語り出でけむ  
事」。柏木巻に見える。31-15

源氏四十八ものたとへ「胸つぶるる事 柏木の文を源氏見給ふを見つれたりけん小侍従の  
心のうち」。→評論(源氏解・むねつぶるゝこと)。49-11

源氏四十八ものたとへ「もどかしき事 浮舟さしも薫大将・兵部卿官分きがたき御心ざし  
をふり捨てて、身をいたづらになしたる事」。→評論(源氏解・もどかしきこと)。

49-12,27-10

源氏四十八ものたとへ「てならひのきみ」→評論(源氏四十八ものたとへ・ありがたき事)。  
27-10,49-12

#### 鎌倉期か

源氏人々の心くらべ「空蟬の世を背きて後は、山里などにかき籠りたらば、昔の心にくさ  
も思ひ合せられいとをし」→評論(源氏解・うけられぬこと、源氏人々の心くらべ・玉  
鬘と空蟬)。22-14

源氏人々の心くらべ「新しき年の御騒がれもやとつつましけれど、こなたにとまりたまひ  
ぬ」(初音)。(玉鬘と空蟬)参照。48-10

源氏人々の心くらべ「玉鬘の尚侍、(略)我が心ならずといひながら、髭黒の大將の北の  
方になり給へる」。→評論(源氏人々の心くらべ・玉鬘と空蟬)。25-6,48-14

1338～1376

増鏡「ありつる人の帰り来ん程、御伽せんはいかが」(序)。「対 トグ」(名義抄・法下)、  
「伽 トキ」(天正十八年本節用集)。9-11

増鏡「世に怨みある物など、ここかしこに隠るへばみてをる限りは、集まりつどひけり」  
(一六・久米のさら山)。「かくろへばむ」は『無名草子』以前に例を見出しがたい。92-14

1345～1352

兼好法師集「菩提樹院のふぢみにまかりて／さきにほふふぢのうらばのうらとけてかげも  
のどけき春の池水」(201)。31-1

1362頃

河海抄「石山寺に通夜してこのことをいのり申すに折しも(略)物語の風情空にうかびた  
るを」(巻一・料簡)。18-3

河海抄「めづらかなる草子や侍ると尋申させ給けるにうつば竹取やうの古物語はめなれた  
ればあたらしくつくり出したてまつるべきよし式部におほせられければ」(一・料簡)。  
18-5→評論(枕・一九九)。

河海抄「水鏡に云紫式部が源氏物語作出して侍るはさらに凡夫の所作とおぼえ侍らず」(一  
・料簡)。18-8,89-1

河海抄、『源氏物語』成立伝承(上)。古本説話集、世継物語、河海抄、花鳥余情、賀茂  
斎院記、謡曲『源氏供養』などに見える。105-12

1364

新拾遺「權のあだにはかなき命をばつとめてのみぞしばしたもたん」(一〇・哀傷 910  
少僧都源信)。13-9

1371

平家「心も詞も及ばれね」(一・祇園精舎)。88-11,72-11,86-6

平家「母うへ大殿の北の政所」(一・願立)。ここでは摂政・関白の正妻の意。うちの河  
浪 83-9,7-8

平家「その気色、大方ゆゆしうぞみえし」(二・教訓状)、56-8

平家「さか／＼しき男にて」(七・主上都落)、25-11

平家、平忠度が都落ちの際に、『千載集』への入集を期待して「秀歌とおぼしきを百余首」  
を俊成に託し、結果、「読人知らず」として「さざなみや」歌が撰ばれたという話は有  
名(平家・七・忠度都落)。91-12,8-14

平家「四の宮は(略)能円法師のやしなひ君にてぞ在ましける」(八・山門御幸)、23-15

平家「花がたみひぢにかけ」(覚一本・灌頂・大原御幸)。2-9,4-14

平家「夏草のしげみが末を分けいらせ給ふに」(平家・灌頂・大原御幸)。5-1

平家「薨やぶれては霧不断の香をたき、枢おちては月常住の燈をかかぐ」(灌頂・大原御  
幸)、5-5

平家「一部の法華經」(三・足摺)『法華經』八卷二八品。8-2,9-15

平家「えひくるひとは云ひながら、さしもやは有べき」(長門本平家・一二)、末葉の露 80-15

1371頃

太平記「我朝は申すに及ばず、唐土、天竺太元、南蛮も」(六・関東大勢上洛事)。13-2

太平記「かたへの女御・后は、花の側の深山木の色香も無きが如く也」(六・民部卿三位局御夢想事)。93-16

1381仙源抄「やまひこ 山孫(ヒコ) こたまなといふ同事也」、「Cotama」(日葡)。49-8

1411頃

義経記「ただ置いて物を見よとつぶやきごとして」(四・住吉大物二ヶ所合戦の事)。32-7

義経記「大津次郎が女房こそ、例の酔狂ひして、男に打たるれ」(七・大津次郎の事)。  
末葉の露 80-15

1448～1450

正徹物語「みめのうつくしき女房のもの思ひたるが」(上)。24-7


1459～1487

文明本節用集「云触 イイフラス」(文明本節用集)。101-5

# 『無名草子』 関連作品年表

## 【凡例】

- ・これは、『無名草子 注釈と資料』（和泉書院）の本文に登場する散文作品（現存・散逸）・歌集・歌合および「物語評論」に取り上げた作品を成立年代順に並べたものである。
- ・見出しの表記は、『無名草子』本文における表記に従い、〔 〕内に、通行書名・成立年・出現箇所（頁数）を記した。
- ・複数回の登場で呼称・表記が異なる場合は、見出し以外の表記を〔 〕の後に＊を付して列挙した。
- ・散逸作品は点線で囲んで下方に配置し、物語評論で取り上げた作品は網掛け（          ）をした。なお、本文に登場する作品で、物語評論でも取り上げたものは、通行書名にのみ網掛けをした。
- ・同年代の中で成立の前後が不明なものは、『無名草子』に登場する順序に従った。

750	万葉集〔万葉集・天平宝字三年(759)以降・72,86,88,89〕	
		
	たけとり〔竹取物語 18〕	
900	伊勢物語〔伊勢物語 87〕＊伊勢 古今集〔古今和歌集・延喜五年（905）勅命？奏覧？・88,89〕＊古今	
	後撰〔後撰和歌集・天曆五年（951）勅命・89〕	
	大和物がたり〔大和物語 87〕＊大和・やまもののがたり	
	うつほ〔うつほ物語・『蜻蛉日記』以前・18,72,86〕 <u>蜻蛉日記</u> 〔天延二年（974）以降〕	
	<u>三宝絵</u> 〔永観二年（984）〕	
	しるゐせう〔拾遺抄・長徳二年（996）～三年頃・89〕	かくれみの〔隠れ蓑 72〕 すみよし〔住吉 18〕
1000	まくらさうし〔枕草子 12,92,96〕 しうゐ集〔拾遺和歌集・寛弘二年（1005）～四年・89〕 公葉集〔金玉集・寛弘四年（1007）・89〕 源氏〔源氏物語 16,18,50,72,92,105〕 その人の日記〔禁式部日記 106〕	
	よつぎ〔栄花物語 - 正編・万寿二年（1028）頃・77,113〕	
	さごろも〔狭衣物語 50,64,85,86〕 <u>更級日記</u> 〔康平二年（1059）以降〕	たまも〔玉藻に遊ぶ・天喜三年（1055）以前・69〕
	ねざめ〔夜の寝覚 54,64,79,85,86〕 みつのほま松〔浜松中納言物語 64,85〕＊はままつ	あさくら〔朝倉 76〕

大かがみ〔大鏡 113〕

後拾遺〔後拾遺和歌集・応徳三年（1086）奏覧・89,96〕\*ごしうゐ

よつぎ〔栄花物語・続編・寛治六年（1092）頃・77,113〕

とりかへばや〔古とりかへばや 70,71〕  
こゝろたかき〔心高き 75〕  
かはぎり〔川霧 76〕  
いはうつなみ〔岩うつ波 76〕

1100

堀川院百首〔堀川院百首・長治二年（1105）～三年奏覧・91〕

公葉集〔金葉和歌集・天治元年（1124）初度本成立・89〕

あまのかるも〔海人の刈藻 77,80,82〕  
すゑばの露〔末葉の露 80〕  
露のやどり〔露の宿り 81〕  
みかはにさける〔みかはに咲ける 82〕  
うちの河なみ〔宇治の川波 82〕  
こまむかへ〔駒迎へ 83〕  
おだへのぬま〔緒絶えの沼 84〕  
はつゆき〔初雪 85〕

新院百首〔久安百首・仁平三年（1153）第三次本成立・91〕

げんそむ〔現存集・『今撰集』以前・90〕

こせんす〔今撰集・永万元年（1165）～二年・90〕

いまとりかへばや〔とりかへばや物語 72〕

源氏一品経〔永万二年（1166）以降〕

今鏡〔嘉応二年（1170）〕

からむす〔歌苑抄・安元三年（1177）以前・90〕

月けす〔月詣集・寿永元年（1182）・90〕

せんざい集〔千載和歌集・文治四年（1188）奏覧・89,90〕\*千載集

ならず〔奈良集？90〕  
ぎよくわす〔玉和集？玉花集？・建久七  
年（1196）・90〕

九條殿の左大將と申し侍しおりの百首〔六百番歌合・建久五年（1194）・91〕

まつらの宮〔松浦宮物語 86〕

ありあけのわかれ〔在明の別 86〕

うきなみ〔うきなみ 85〕

宝物集〔建久九年（1198）以前〕

1200

無名草子〔正治二年（1200）頃〕

物語二百番歌合〔元久三年（1206）以前〕

ゆめがたり〔夢語り 86〕  
なみちのひめぎみ〔波路の姫君 86〕  
あさぢがはらの内侍のかみ〔浅茅原の尚侍 86〕

新勅撰和歌集〔貞永元年（1232）勅命・奏覧〕

源氏物語表白〔文暦二年（1235）以前〕

源氏物語願文

今物語〔暦仁二年（1239）～仁治元年（1240）〕

伊勢物語奥書

源氏人々の心くらべ〔鎌倉時代後期〕

源氏解〔鎌倉時代後期〕

源氏四十八ものたとへの事〔鎌倉時代後期〕

源氏ものたとへ〔鎌倉時代後期〕

弘安源氏論義〔弘安三年（1280）〕

賦光源氏物語詩序〔正応年間（1288～93）〕

1300

## 『無名草子』人物年表

### 【凡例】

- ・これは、『無名草子 注釈と資料』（和泉書院）の本文に登場する人物を年代順に並べたものである。
- ・見出しの表記は『無名草子 注釈と資料』『人名事典』に従い、〔 〕内に、通名・生没年・出現箇所をの頁数を記した。
- ・複数回の登場で呼称・表記が異なる場合は、見出し以外の呼称・表記を〔 〕の後に＊を付して列挙した。
- ・生没年が未詳の人物は、矢印の頭をつけず、生存がわかっている部分にだけ線を記した。また、生没年が未詳で、なおかつその事跡の年代も不明な人物は、点線で囲み下方に配置した。

八五〇

(亭子のみかど)

(伊勢の宮す所)

91) ※あるいは山部赤人か

かきのもと〔柿本人麻呂 91〕

※あるいは山上憶良か

業平〔在原業平（825～880）87〕

ゆきひらのそち〔在原行平（818～893）38〕

(これひらの中將)

おのゝこまち [小野小町 5,94,95]  
\*をのゝこまち

